

るところに非常なへだたりがある。恐らく今後幾萬年の後も四川省、西藏、青海方面の黄土質の地質の無くなつて了はぬ限り、永遠にその濁流は續いて行くものだと思へられる。

長江の水が濁流であるといふことはこれによつて幾多の支那の國民性が特色づけられてゐる。又ある意味に於ては支那人の大陸氣分はこの濁流によつて遺憾なく靜かに表現し盡されてゐるものと云はれる。昔から河海は細流を擇ばずといふ言葉があるが、恐らく長江の濁流はあらゆる清濁を擇ばず、濁の濁なるものでも優に之を受入れて行くのである。寧ろ清を入れるよりも濁を入れる方面の方が多い位である。固より江西省廬山の下に清水を湛へた鄱陽湖の如き紺碧の色を見せた湖水が長江に注いでゐるといふところもある。けれども、又湖南省の洞庭湖の如き春夏秋冬最も著しい濁流を湛へた一大貯水池が長江の中流に流れ込んでゐるといふやうなものもあつて、長江に注ぎ入るところの湖沼並に支流には清濁交々來り、實に複雑を極めてゐる。恐らく支那大陸の奥地を流れてゐる清流濁流の大半は或は南し或は北に走つて、結局この長江の大濁流に注ぎ込み之と合流して世界有數の大江となつてゐる譯である。宛然長江の流れは支那大陸に於ける、大自然界に於ける大人物の典型とも見られる。清水を湛へた溪流をも受入れ、又濁の濁なる湖沼の

水をも受入れて、結局湖の如くして數十哩に達する大きな江口を有し、南米のアマゾン河と相伯仲して東半球の大河のナンバーワンとなつてゐる次第である。

従つてその濁流の吐出す水の中には多大の黄土色沈澱物を河床に堆積し、その河口方面には崇明、馬鞍などを初めとし、幾多の三角洲を作りあげてゐる。その崇明島の如きは楊柳茂り田畑ひらけて都色を出現してゐる位である。長江の濁流は専門家の調査に據れば、一ヶ年一平方哩に對して約八寸の高さに至る泥を吐出してゐるといふことであるから、今後幾千幾萬年の後には日本の肥前五島の方面に向つて幾多の三角洲を形成し得るかも知れない。薩摩の西海岸吹上の濱に見る十四里の間の松原は昔吳の太伯の頃長江の砂が波で打寄せられて出來た濱邊だと云はれてゐるが、自分の見たところではそれは花崗岩系統の土質であつて、長江方面に見る黄土質とは關係がなく、従つてこれが長江とか長江の延長に見るものとは物が違ふやうに思はれる。

何れにしても長江の大濁流は支那の大陸氣分を如何にもよく現はしてゐて、その水流の中には蕪湖附近に鱈魚が泳いでゐたことがあり、又その附近では鱈魚の剝製したのを賣つてゐるところがある。或は漢口の上流、長江の中流地方は江口から約八百哩九百哩の地點であるにも拘らず、

大きな海豚の群が黒い背中を現はして溯江中の楚客の目を驚かしたことが頻りであつた。

先頃四川省で魚類の研究に没頭せられてゐた岸上博士の一行も之等の巨口細鱗に目を觸れられたことと思ふ。其他巨大な鯉魚の淵を廻り激湍と戦ふ傳説は、四川省三峡方面の長江にはいくらでも流布されてゐる。長江の濁流に基くところの珍談逸話は求めるに従つていくらでも得られるほどそれほど偉大なる力を住民に見せてゐるのである。長江は支那大陸住民によりて、測り知る事の出来ぬ偉大なもの、一つの神の如く考へられ、禹王が治水の事に全生涯を没頭したのもこの長江のためであり、今猶各地方に禹王を祀つた古廟が見出される。

現に長江の本流支流の全體がその流域の住民を養つてゐることは全人口の大半二億萬以上と算せられてゐる。それ故生れながらにして世界的に長江の濁流その物は非常な力を以て江岸の住民から恐れられ、驚かれ、或は慈母の如く懐かしく思はれてゐる。謂はば二億萬の住民はこの長江を以て自分の命とも考へてゐるのである。従つて長江の濁流其物が支那の國民性を作り上げ、同時に大陸氣分の根本を殆ど無意識の間に築き上げてゐるのである。支那人の大陸氣分は濁を濁と自覺せず、當然のことゝわきまへ、賄賂も取ればまた謀反も企てる。破壊もやれば、一瀉千里

に片附けることもやる。百萬の大軍を動かして敵を攻め、一舉にして王者を氣取りもすれば、一夜のうちに大氾濫を被つてその勝ち誇つた氣分が、敢なくも槿花一朝の夢となつて流民の悲哀を感ずるといふやうなことも、殆ど是れ又無意識の間に演ぜられるのである。

水流もその量の少ない時には濁流を濁流として際立つて感ずるのであるが、河上河下見渡す限りその天際の間を流れるといつた長江の如き、大量の濁流となると、最早之を濁つた水として特別に考へなくなる。それが水の普通の状態であるものとして感じ、濁流の意識が麻痺して了ふ。そこまで來なければ支那人の大陸氣分は徹底しないし了解し得ないのである。自分の周囲の取りまき連中に對していちいちその性癖、性質の濁れる點を氣にやんでゐては大きな仕事は出來ない。凡て之を受入れて而も受入れざるが如く堂々と押して出るといふその大陸的態度といふものは遺憾なくこの長江がその模範を示してゐる。その模範的氣分の中から老子の如き、又莊子の如き南方の思想を代表した一種の大人物が生れ出てゐる。自分は何處までも支那の大陸氣分を味ふには、無限の材料教訓並に貴重なるヒントが、この濁流そのものの中に暗示されてゐるやうな氣がしてならぬのである。茲に於いてか大地支那の香氣第一のものとして、自分は先づ以て長江の

濁流禮讚を高調する次第である。

長城・運河・クリーク

支那人の面貌に偉大なる裕りのある氣持が何處となく現はれてゐる事は前に述べて置いたが、實際にその面貌の物語るが如く、その氣分は誠に餘裕りと雄大味とを有してゐる。急がず、騒がず、而もその目的とするところのものは最後には必ず之に到達し、之を實現し、完成する。その熱は、可なり盛んなものである。唯その間に餘り裕りを置いて居るがために、性急な日本人から見れば或は忘れて居るのではないかといふ風に見えてゐるだけの事である。今日地球上に人類の作り上げた偉大なる大仕事と云へば、千古を貫くところの大工作物としてのエジプト・ナイル河畔のピラミッドと、もう一つは支那蒙古さかひの萬里の長城とであらう。ピラミッドの事は今茲には云はない。萬里の長城は春秋戰國の燕の國以來その工作に従事したとは云へ、或は遠く歴史以前の時代から北方外狄に對して、之が築城の必要を感じて居つたかも知れぬ。史上秦の始皇帝が之を完成したと云つてゐるが、然しその後約二千年の間始終繼ぎ足し繼ぎ足しして、或は要害

の關門には三重、四重、五重と之を築き、峯から谿へ、谿から峯へと蜿々長蛇の如き偉觀を呈し雄大味を見せて居る。その努力と熱心振りとは、支那民族の如何に底力のあるエネルギーがこの工作に表はれてゐるか云ふと認めなければならぬ。之は親しく支那に遊んで度々長城の上に足跡を印しその雄大味を體驗したことがある著者にとつては、人一倍その感を深くするのである。朔風強く、身を切るが如き凄じい蠻的氣分の域を、延長約日本里數の八百里、恰も青森から鹿兒島に至る距離をも凌ぐ長さ互つて居る。幾千年の星霜をかけて之を完成したといふことはあのゆとりのあるゆつくりした顔付とは相容れないやうに見えるけれども、かうした千古に互る仕事を爲し終へるだけの底力を持つてゐることを事實に於て證明したわけである。戰鬥力に於ては兎も角として、この防備につとむる努力の結晶といふものは、全人類をも壓倒するだけの大業をなし終へてゐる。茲に支那人の風貌の趣を一層力強く感銘せしむるに足る可き偉大な潛勢力のあることを感ずる次第である。

支那の大陸氣分を裏書してゐる大工作には更に、かの都市々々に見る所の所謂城壁なるものがある。これは長城が漢民族全體を守る防禦壁となつてゐると同じ理窟で、各都市の周圍には皆

城壁が圍らされてゐると云ふ譯である。これは即ち市民の生命財産を保護する目的から出来てゐるものである。この金城鐵壁は支那の都市生活の上に必ず永久になくてならぬものである。最近の如く飛行機で爆彈投下を行ふ場合は別であるが、一般の都市生活に於ては、敵軍に對しては固より、平素の馬賊土匪其の他の襲撃に對して、是非共保存して置かなくてはならぬものである。近來交通改善の目的から都市の城壁を取毀して、その跡へ街を取圍む環狀道路を開設しようとする議も出て來たけれども、これは意味のない事であると思はれる。一寸考へると如何にもハイカラな説のやうであるが、いざといふ場合には、いくら環狀線を通して見ても、城壁がないために、幾十萬の市民の生命財産が危険に頻するといふことでは問題にならないのである。幾千年の歴史とその民族的の必要から出来てゐるものを歐洲文明のアスファルト道路に今すぐかへて終ふといふことは、支那の事情に照して考ふ可き事ではあるまいか。心ある爲政者は思付きに驅られて斯くの如きハイカラな方法をとるよりも、矢張り城壁は城壁として古代文化の保存に努めた方が民生を全うする所以であつて、又その方が得策ではないかと思ふ。

支那に残された二大工作の中には尙一つ大陸の水運の便をはかつてゐる運河の工作がある。運

河といへば、隋の煬帝が南北支那を水路によつて結びつけた大運河のあることは既に世間周知の事であるが、しかし實際江南の各地方に七重八重と通じて居る運河網の現状を見て來るとこの程度のもはいくらでもあり、別段大した物とも思へなくなる。煬帝の運河の外に又それを大きくしたやうなものがあまたあつて、運河は實際江蘇浙江、杭州の田舎には無數に見出されるのである。その運河の水はもとと大小無數の水を四方八方へ導き、或は揚子江或は錢塘江その他の巨大な水流と連絡をとり、殆んど運河によらなければ南方の交通は不可能であると云ふ程度にまで完全に發達してゐる。さながら人間の身體に細かく血管の行き互つて居ると同じやうに組織的にその分派がよく通じてゐるのである。運河と云へば交通を助ける唯一の水路として江南地方の呼物となつてゐるのみならず、實は巨大な江流には夏の氾濫期となるとその水のはけ場として、或は貯水場として何處かに水道のゆとりがつかなければならぬのである。その意味から云へば江南地方の無數の湖沼並に運河は眞に好都合の水はけ場となつてゐるのである。水面の高さは殆んど江流のそれと餘り變つてゐない。一度夏の氾濫期に於て這入り込んだ水はその一ヶ月間はその運河に湛へられてゐる。大小無數の船はその水路のお蔭によつて舟楫の便を得てゐる。それ故運河

の水路が多ければ多いほど江流の氾濫は調節される譯である。

若し之等無数の運河クリークがなかつたならば、それだけ江南地方は洪水の害が多いものと見なければならぬ。この大自然の水量を如何に利用し、如何に導くかといふことは、古代の傳説を見ると、大禹自身もかなり苦心された事であると思はれるが、全く南方支那の水郷の實際を見て來るといふと、大いにその苦心の程が察せられる。否な、實にこの運河の工作はイタリーのヴェニス^{ヴェニス}の式で村といふ村、町といふ町が貨物の運搬、子供の通學、物賣り、葬式等すべてこの運河によつて營まれてゐるのである。その運河工作の迹は少しく小高い山に登り、一望千里の綠野を見渡して見ると、さながら蜘蛛の巢の如く、所謂運河網を發達させてゐるのである。若しそれ春の菜種の咲きそろふ頃、紫雲英畑の間に夕日を受けて光り輝く運河の景のその美しさを眺むる時は何とも云へぬ天國の景色が思ひ起されるのである。

かやうな運河の流域は恐らくその面積から云つて、日本の面積の二倍乃至三倍或はそれ以上廣がつてゐるかと思はれる。南方は汽車の便、自動車の便を固より無視するわけにはいかぬが、この運河の便によらなければ産業の發達、文運の進歩、兵隊の總動員などといふものはすべて出來

なくなるのである。これ丈の大きな水流としての運河を工作し完成し得たことは、これ又萬里の長城と共に茲に特筆大書しなくてはならぬ事である。長城は外敵に對する千古の防禦壁であり、運河は國內に於ける文化の進歩を助く可き交通上の一大動脈であると思はれる。かういつたやうな大きな工作はあの長江千哩に互る大自然の氾濫其の他の大陸的氣分を漲らせてゐる。支那人々はこの廣大な大自然の背景を常に見せつけられてゐるために、別段この運河事業を大工作とも思はず、何時の間にか自然の間に誰が作るともなしに完成されたものとして歎じてゐるのである。兎に角自分達の社會に必要なものとなると、幾百年幾千年を費しても何時の間にか拵上げて終ふその努力といふものが、支那人の面貌を見てゐると、さう云つた完成力の強い氣持が何處となく浮べられてゐるやうに思はれるのである。

宮殿と墓陵の大規模

支那人の面貌には前述する如く又非常におほまかなところがかがはれる。そのおほまかな氣持は日常生活のあらゆる方面に現はれてゐるが、特にその大陸氣分に結び付けて興味深く感ずる

所のものは宮殿並に墓陵の規模の大きいといふ點である。

支那各地方の遊歴のうち試に足を北京の紫禁城に運ぶとする。その南より這入るとすれば第一に正陽門、次に中華門、それから更に奥へ深く這入つて行けば午門で、その奥庭の正面に大和殿右に文華殿、左に武英殿、奥に中和殿、その又奥に保和殿とあつて、そのもう一つ奥は清朝時代の故宮博物館として保存されてゐる宮室がある。その善美を盡した金殿玉樓の結晶形が悉くここに保存表現されてゐると云つても過言でない。その當時の禁裡に見る日常生活はあの金殿玉樓の中に、又政治上、文武百官に調を賜ふ時などは午門から這入つて大和殿、中和殿、保和殿の各官殿が用ひられてゐたのである。これ等の公式或非公式に用ひられてゐた紫禁城内の官殿建築とその設計振りの雄大美とは實に驚く可き大陸氣分を深からしめてゐる。その官殿の前後左右に鋪きつめられた大理石鋪道、又大理石の彫刻を以て埋められた美しい勾欄、畔池、その他東華門、西華門を初め大小無數の官殿に見る樓門がこれ亦驚く可き善美を盡してゐる。而かもその全體に調和せるところの規模の雄大なる點は實に言語に絶するばかりである。若し夫れ上述の午門の城壁に登りその大理石鋪道から幾何の高さを有するやを調べて見ると、目測でさつと五十尺に及ん

でゐることを認めた。今日歴史博物館に提供されてゐる午門壁上から武英殿、文華殿、大和、中和、保和の各官殿全體を見渡して大觀する時には追が支那四百餘州の主都の禁裡である哉と云ふことに想到し實に恐ろしい桁を以て設計されたものであるといふことに氣づくのである。

更に禁裡の御苑に出で、その水郭、池亭を楊柳の間に眺め、北海、中海、南海の蓮華香しき水郷を打眺め、又彼方五龍亭の綠蔭に隠見するを打眺め、或は碧空に聳ゆる白塔を背景に、千歳を経たる老楊の並木の下、廻廊のあたりを逍遙せる紳士淑女のみやびやかな姿を見たりなどする時は、轉、自ら畫中の人となつてゐるの感じがして、ありし昔の王朝の榮華を思ひ出さずには居られないのである。或は遙か中天に聳ゆる景山、山巔の樓郭を見、鐘樓、鼓樓を仰ぎ見て、北京城外萬壽山下の離宮に遊ぶとせんか。昆明大湖の碧水を壓して天に聳ゆる佛香閣の秀麗な建築美を賞することが出来る。その他大理石の樓船、フラワー・ボートに、或は西太后の居室であつた殿内の秘宮からして、金色燦爛たる長廊下の清趣の水に映せる光景、更に十七空橋、中島あたりの處をとり入れたその景色と云つたら、全くこれ前王朝の黄金時代の榮華を物語れるものとして最もふさはしきものである。或は又南の方、天壇に遊び其の規模の廣大なる祈年殿や寰丘の如きを

見れば、皆大陸建築の象徴として善美の限りを盡したものであると云へるのである。

蒋介石時代の當局はいくら大規模の宮殿建築があらうとそれには目もくれず、只管南京を首都として此に崇高なる三民主義の建國精神を樹立せんことにのみ汲々としてゐた。革命の功尙未だ成らざるの時その大宮殿、大建築など顧みるの餘裕を有しない状態なのであつたが、然し又南京の郊外紫金山を見れば、その中腹に造營せられたる總理孫中山の墓陵の雄大美は是れ又舊來の宮殿建築のそれに比べてひけをとつてゐない。墓陵といへば南京城外は明の孝陵、並に其の墓道に並べる石人石馬石象石獅等を見るのであるが、何れも大理石にて彫刻されたかなり大規模のもののみである。中山陵の墓道は敢てこれ等の石人石馬を有してはゐないが、その周圍境外に幾百萬坪と云ふものを提供して國立公園を設計し、自動車を通ずる坦々たる道路を作り、三百三十九段と云ふ御影の大規模石段など、何れもその大國の墓陵たるを失はない。聽て幾百年の後には乾隆帝の墓其の他古來幾多の名天子の墓陵の跡と同じく、結局は荒廢に歸する運命を持つてゐるものであると率直に述べることはよくないかも知れぬが、然し事實今日三四百年前の墓陵、北京郊外、明の十三陵のその如きその長陵と云ひ、思陵と云ひ、皇陵と云ふ皇陵は殆んど皆廢頽し、

墓道の石頭牌樓と石人石馬の行列を見るのみで、大理石の橋梁、鋪石はひどく荒れ果て、ただ秋蟲の淋しく草間に鳴いて居るといふ哀れさを見せてゐるに過ぎないのである。

然しいくら荒廢し寂れた墓陵であつても、その規模から考へて工作造營の當時の輪奐の美は定めし驚く可きものがあつたと思はれる。日本の里數に直して十里もあらうと云ふ廣々とした塋域を有し、その廣い面積の中に墓陵宮殿牌樓石人石馬が配置され、三方天壽山と云ふ山で圍まれた絶好の地を靈場と見立て、立派な設計振りを見せてゐると云ふことは全く敬服の外ない。蒙古さかひのあの巍々たる連山を背景に十三陵の地點が設定せられたといふことは全く賞讃に値する。けれども、後世となつて誰れ一人墓守りとしてゐるものがあるのでもなし、唯往古を懐かしむ吾れわれ閑人が偶々之を訪ふ位のものであり、桃林や柿の林の間に秋の蟲の靜かにその英靈を慰めてゐるだけである。甚だ悲觀したやうな批評を茲に手向けておくわけだが、しかし實際規模の雄大さはその荒廢の狀を甚しく見せるので國亡びて山河ありの感を深からしむるのである。又支那人の大陸氣分は獨り萬里の長城や運河並に宮殿美の如き實際方面の上に役立てられ、又その工作上に向けられてゐるばかりでなく、更に死後の生活の上にも非常な大工作の施されて人心に雄大

なる感化を興へんとするの心理情態がよく現はれてゐる。そこが參拜者の胸にも迫つて來る。明の十三陵や孝陵を拜し、更に中山陵を幾度か訪ねたことのある自分には、上に述べたやうな大陸の深刻な印象が思ひ出される。

編纂の大業

支那人の頭に描く大陸的工作は、更に一步進めて知識方面に及び書物の出版編纂の大業といふ事にもなつてゐる。昔から西方の文明で古代文化の中心となつたものには、アッシリアに於けるハムラビの法典を初めとしてギリシヤ、ローマ其の他に幾つもの大きな編纂の大業があつたのである。然し恐らく古來人類の始まつて以來、一代の君主がその在世中に六十餘萬卷といふ大編纂の偉業を成し遂げ得たと云ふことは餘り聞かぬ。清朝の黄金時代を飾つてゐた乾隆帝はその力を治世のことに集中して四庫全書六十幾萬卷を完成した。恐らく當時の文化の粹を蒐められたものでエンサイクロペディア以上の大業を作り上げたわけである。これはもと寧波に於ける范氏の故宅から種々な材料が提供され、それを基礎として編纂したものである。今日寧波范氏の遺跡へ親

しく行つて見ると、それは殆んど見る影もなく荒廢してゐる。然し乾隆帝の四庫全書は秘庫として浙江、杭州の文瀾閣や奉天文淵閣等の數ヶ所に分散され、それぞれ兵燹などの患ひのないやうな處に保存されて居るのである。嘗つて大養木堂翁は支那側の諒解を得てこれ等六十餘萬卷の四庫の原本、寫本を世界の有數な圖書館と富豪の手許に保存せしめようといふことで、たしか十幾部とかを出版發行したらしい計畫を自分に物語られたことがあつた。自分はその壯舉の實現を祈つてゐたものであるが、肝腎の支那政局に變動があり、當局者の顔振れも一變してしまつたためにとうとうこの計畫は畫餅に歸してしまつた。

四庫全書出版の事は兎も角として、かう云つた大きな編纂の偉業は更に皇清經解の如き、或は太平御覽の如き、その他汗牛充棟も音ならぬ程にあるのであるが、然しかう云つた大業は佛典の翻譯事業と相並んで支那文化の粹を蒐めたものであつて、支那人のおほまかな氣分の中に動もすれば又斯くの如き細かく容易ならぬ大業の營々致々として行はれてゐたのを見るのである。支那は文字の國だけに、此の方面の著述編纂は世界の文明國に對して優つてゐるとも、決して劣つてゐないのである。殊に近來醫學藥學方面に於ては、歐米から支那に不老長壽の祕法を求めに來

てゐる者が尠くない。百年一日の如く終始一貫同じ調子で倦まず撓まずその事を完成せずんば止まぬといふその堅忍不拔の氣持とその特質は、明かに支那人の面貌の上に聯想せられてゐるのである。而も支那の人々は世界に類例のない偉業を完成し、又人類に誇るに足る可き大仕事を成遂げてゐて少しも之を鼻にかけるといふやうな底の見え透いた態度は噫にも出してゐない。之は恰かも麻雀で巨萬の富を得ようが、或は之に失敗しようが、喜憂の情を少しもその面貌に現はさぬのと同じである。そこに無頓着のやうな而も奥底の知れない一種のゆかしさを持つてゐるのである。然し觸つて見ればなかなか觸りのよく、言葉を發するにも氣持ちよく流暢なものである。そこに支那人特有の大陸氣分が窺はれるのである。すぐ喜んだり、すぐ悲觀したり、右から左にすぐそれをさも大事件の如く見せかけるといふやうな氣持は見えないのである。これ等の點は支那人の面貌を洞察すると同時によく看破しておかねばならぬ點であると思ふ。

大陸的火車

支那大陸の火車は固より廣軌の汽車であつて、北京から西北に向ふ一線の外は多く外人の手に

よつて敷設されたもので、その乗心地は悪くなく凡て鷹揚に出來てゐて如何にも大ざつばであるが、吞氣でよろしい。近來天津、南京に至る津浦線の如きは嘗て奉天軍のために善い列車の箱は滿洲に持つて行かれて終つてその後は寄せ集めの悪いものになつた。多少乗心地のよくないやうな點もある。嘗てアメリカの紳士淑女が山東の田舎の臨城で土匪のために襲撃されて以來、裝甲列車なども立派なものが出來たやうであるが、當時滿洲の方に持つて行かれて終つた。

支那の汽車は頭等、二等、三等、臥車、食車、貨車等のある外に貧民車四等などもある。殊に貧民車は箱にドアがなく兩側入口が開いたきりであるから、動搖のはげしい時にはウツカリしてゐると振り落されることもある。大陸的火車の特徴は、一切の規則を超越して桁はずれの現象を見せてゐるのである。先年支那内地の軍隊輸送の場面を除州の驛で見たのであるが、無蓋車に乗つてガタ馬車を亂雑に積込んだり、機關銃、飛行機などを之又山積してゐる外に、客車といふ客車の屋上に寝てゐる兵隊があり、胡坐あぐらをかいてゐる兵隊があり、實に危い光景を見せてゐた。宛ら震災當時の關東の汽車の混雑と同じやうに黒煙を浴びつゝ屋上で我慢しながら運ばれてゐる所など可なり振つてゐる。是等の或るものはスピードを出してカーブに差しかゝつた時など

は動搖のために無論振り落されるであらう。豚一匹の價よりも相場の安い支那兵が哀れ無難作に取扱はれてゐるさまは實に斯くの如きものである。

支那の客車は固より客を客として克く接待し進行中にボーイが熱い手拭を持つて來たり、茶の湯をさしに來たり、衣裳にブラシをかけに來たり、頗る鄭重振を發揮するのであるが、然し車掌が切符を改めに來る時になると、劍附鐵砲と最新式のモーゼル式ピストル、腰には彈丸の帶皮をしめた憲兵どもが必ず三四名ついて來る。これは頗る物々しい氣分をそそるのである。その癖憲兵の胸についてゐるその所屬を示す師團聯隊等の地名から當人の姓名原籍等の書いてある文字をジロジロ眺め、之を読み上げる。時としては之が陳なら陳先生、王なら王先生と呼びかけて話して見ると、存外ニコニコ顔で愉快に應答する。その邊が頗る人間味に富んでゐて、窓外に見える山川の説明までもしてくる。ピストルや鐵砲はまさかの時の用意であつて、たいして恐ろしいものでない。然し日本あたりの汽車と違ひ、武装した兵隊を連れて切符改めをするなどは如何にも支那らしい。殊に一日のうちに數回もいかめしく見廻つて來るのであるから、氣の弱い旅客は見ただけでゾットするのである。

支那近海の船では三等客が全部居なほり強盜となつて乗組員を慘殺し、強奪を企てるといふ椿事さへ聞くことが珍らしくないのであるから、汽車に之れ位の武装のあるのも或は無理でないかも知れぬ。殊に民國十二年五月五日の夜半に行はれた臨城事件の如き不祥事を見ることもあるのであるから、武装せる切符改めの必要があるのも當然の事と思はれる。

大陸の汽車は又頗る人間味に富んでゐて、正月の朝は汽車にも正月をさせるといつて、朝早くから運轉することはない。なるべく運轉回数を少くし、又驛員なども元日の朝は誰も居なくて、旅客は荷物を持つたまゝ、素通りして構外に出て行くやうなこともある。日本のやうに元旦は惠方を求めて、早朝から汽車で出かけるといったやうなことは出來ない。この支那の様子を知らぬ日本人は仕度までして驛まで出かけて行く。全く拍子抜けがして大いに馬鹿を見たといつてこぼす人もある。その外大陸の汽車は土匪襲來の恐れのある險惡な地方は夜行を全く廢止し、或は又出水のために人家もない途中で立往生をする。乗客は不平タラダラで一騒動を起すけれども、不可抗力だといつて當事者も取合はぬから喧嘩にもならない。結局仕方なく、ただ諦めて車中にジツトして外の事でも考へてゐる外に仕方がないのである。或は又急行列車に乗つたから普通車よ

りも早いものと思つてゐたところで、それは原則としては早いのであつて、毎日の急行必ずしも時間通りに運轉されてゐない。自分も晩の八時の急行を翌朝の四時半になつてやつとつかまへる事の出来たことがあつた。之は地方軍隊動員のために支障を起したためだつたらしいけれども、大抵このやうな調子である。此様な場合一等乗客券を持つてゐたところで一等車は兵隊で満員である。合理的な不平でも訴へようものなら、いきなり劍附鐵砲を見舞はれる。只易易諸諾として三等車の便所の中でも座席を恵んで貰ふ事が出来れば難有い仕合せであると心得て居らねばならぬ。それが氣に入らねば屋根の上に昇れば廣々として便所の臭もせず、好都合なのである。初めから汽車を的あてにしたのが誤りで、テクテクくるつもりで居ればかやうな不平も起らずにすんだのである、と理窟をつけて諦めるより外はない。

支那の火車の運行は常識では律せられない。大體旅行日程などを立てて歩くのが間違ひである。規則通り走らないのが支那の汽車である。かやうに定義を下しておけば別に腹は立たない。丁度西洋人が震災前の東京市中の道路を田圃の中の畦道であると觀念して雨中の帝都の交通を諦めてゐてくれたのと同じである。支那の火車は多く外國の借款で出来てゐるために、レール、枕

木、列車、驛の建築物、防風林等は到れり盡せりである。然し列車の中は必ずしもさうではない。日本人の想像する程に南京蟲はゐない。又啖唾たんつばを吐くことも近來はいくらか少なくなつて來た。然し一種支那らしい不安な氣分が支那汽車の常態として伴つてゐるやうに感ぜられてゐる。之は初めて支那を旅行し、事情に馴れぬ者は、鬼の國にでも入るやうに脅えてゐるのでもわかる。實際夜汽車などで驛に停車した時にいきなり鬼のやうな姿をした苦力共が天秤棒を肩に割れるやうな聲を立てて列車内に押かける。この時落付いて徐ろに考へてゐれば何の事はないが、脅えて終ふと言葉がわからず、鞆などを持つて行かれて終つて生きてゐる氣持がなくなる。秩序があるでなし、取締る者があるでなし、支那の汽車はこの點で旅馴れぬ旅客には甚だ不自由不安に感ぜられる場合のあつたのも無理はない。

然し上に述べたやうな支那汽車の有様は、即ち支那人の大陸氣分を縮寫して茲に表現してゐるものと見られる。決して之を恐れることなく、こんなものだと思つて考へてゐればよろしい。寧ろ汽車に乗れば對手を求めて麻雀でもうち初め、汽車賃に拂つた金かねは即座に取返すといふやうな要領のよいことを考へてゐた方が氣樂で宜しい。多く三等車に乗る旅客は同じ賃錢を拂つた以

上十分でも二十分でも長く汽車中に居る方が得だといふ考である。朝の八時の汽車ならば、五時六時から出かけて行きチャント窓に近い座席を占め、隣席の人と談笑に耽つてゐるのだ。こゝに呑気な気分が漲つてゐる。この心理から若しその汽車が急行である場合には、別に急行の料金を拂つて票を求めて來なければならぬといふことを教へてやると、急行で早く到着地へ着き早く降ろされる汽車に對して餘計な賃金を仕拂はせられるといふことは意味をなさぬ。長い時間乗せられて澤山の料金を仕拂ふのであれば話がわかるが、餘計な料金を仕拂はさせられるのであれば、今すぐこの汽車を降りて終ふなど云つてゐる百姓もゐる。時は金なりといふ言葉を知るほどこに行詰まつて居らぬ支那の百姓の上は實に羨ましい次第である。これは支那大陸氣分の一方面を物語つてゐる旅客の状態である。

或時自分の乗り合せた三等客の中にも、大きな鼈甲縁（恐らくはセルロイドであらうが）の眼鏡をかけて木版本の詩集などを繕きながら音吐朗々とゆるやかに兩肩をゆすぶりながら白髻をしていてゐる村夫子らしい者がゐる。近づいてその漢籍を見せて貰ふと杜少陵全集であつた。春の清明節の頃菜種の花が一面に咲いてゐる中を汽車で行く時には窓外の雲雀の音と相應じて又詩集

を読む吟聲之に和してえもいはれぬ春らしい氣分をそそられるのである。是又支那大陸の一方面を表現してゐるといへる。

以上述べた如く支那人の大陸氣分は支那の大自然を背景として、即ち何れも支那の大地を母として生れ、或は長城と運河に又宮殿墓陵に其他編纂の文化事業に、或は長江の濁流に、或は罪なき支那汽車の上に様々の風物を取り添え、之を見るときは、一として支那人の風懷を物語らぬものはない。この邊の呼吸を吞込んでゐて、之等の氣分が支那人の面相に何處となく現はれてゐる様子を見る事は、人知れぬ興味を感じる次第である。讀者幸に支那人の面相を觀察する場合には、大地支那のほひを思ひ、各々その自得するところの觀察點を腹の底に持つて之を味はつて見られたならば、讀者の智識、見識、氣持などを察する何物かを得られることであらうと思ふ。更に茲に自分は今支那人の面貌から一層深く入つて支那人その者の肚裏即ち腹の底について二三の觀察を試み、讀者と共にその顔に表はれた方面と、肚の底を探り得る何物かを研究して見ようと思ふのである。その上で支那人のすること、爲すこと、その要領が必ず結局は大陸氣分といふ大きな坩堝に投ぜられてゐることを見出すのであるが、その大陸氣分の坩堝の中から支那人の腹

藝が如何にして表はれ出づるか、その外腹藝に伴ふところの徹底した氣分が如何に日常生活の上に、又外交の上に、或は藝術の上に其他萬般の文化的表現の上に、ひらめいてゐるかといふやうな點に向つて相互の研究を進めて見たいと思ふ。

支那人の腹藝——人間動物一體の世界

支那人の事物に對する凡ての態度は例外もあるけれども、その大體は眞にやさしく滞りなく愛護の情を盡す。決してきつく當つたり、悪い感じを持たせたり餘計な事にくちまをは入れたりするといふやうな氣まづいことは一切しない。えぐるやうな言葉を放つて痛快がつて見たり、必要以外の鞭を打つて自ら得々とすることは支那人の普通の世渡法よわたりはぢではない。殊に心ある人々は動物に對する場合と、人間に對する場合と同じやうな愛の心でやつてゐることを如何にも目に見えるやう試むる術を心得てゐる。時には心の中で六か七しか感じてゐないことでも十か十二分に表はし、又それを文章の上で或は其他實際の行爲の上で遺憾なく發揮する。支那人くらゐ自分と同等の人に對して或は又自分以下の者に對して又目上の者に對しても、上下左右に如才なく愛撫の念を振

りまわす者は少ない。日本人は兎角左右に構はず下に威張り已れの威嚴を維持することに努力する。その癖目上の者には敬する以上に頭を下げてゐる者を見る。上にビョコビョコするのは自己の榮達を欲するためであらう。然し自己を愛する氣分を下を哀れむかといふと、存外その點に理解がない。之は日本人の政治がまだまだ富豪中心の考へで行はれてゐるといふ事を意味してゐる。その外に、幼稚な事のみ跋扈してゐるのを見てもわかる。或は自分で威張り度いために他人の前で、額をつけてゐる細君を叱りつけるといふやうな小さい腹藝の見えすく者もある。支那人は如何なる場合でも愛撫の表現法を忘れないやうにしてゐる。そして時としては、愛撫してゐなくても愛撫の意味にとれるやうな方法を講じてゐる。其間の消息は頗る日本人は下手で、支那人はするいともいへる。然し、利巧であるとも云へるのである。相手方に云はしむれば、日本人のやり方では目下めしたの方に反抗心を起させて反對の精神を起させる。支那人の場合は反抗心の起りやうもなく、其他に懐柔策も巧みにやるのである。日本人は凡て規則によつてゐるから仕方がないが、一にも二にも法律といふこんりゆう衰龍の袖にかくれる。支那には規則はどうであらうと、法律などは超越して人間味を以てする。それ故に懐かしみの情が何れにあるかと云へば、人間味のある方がよい

こと云ふまでもない。人心の收攬はまさに支那流のやり方にある。この間のこつは支那人の腹藝として天下一品である。この支那流の慣用手段にかかる時は幾萬の兵隊も幾十萬の家の子郎黨も参つて終ふのである。それでゐて又何時でも自分で反對の態度に出られるやうにそこにゆとりをつけてゐる。それ故愛撫其ものがはつきりしてゐる場合とはつきりせぬ場合とあるが、そこは人間には夫々自惚があるから相手の方でも愛撫されてゐると思ひ込む。だから支那人は何時如何なる場合でも多少のゆとりをとつてゐる。獨り人間に對するばかりでなくこれを凡ての物の上にも及ぼしてゐるのである。

動物は人間の如く言葉でいふ事は出来ぬからその反應を表はすことをせぬのは云ふまでもないが、その動物を手なづける點に於ては日本人とは頗るその行方を異にしてゐる。最近萬里の長城の外で自分は内蒙古の包頭鎮の田舎から一千頭の綿羊を二人の牧人が、羊と共に野に伏し山に宿り、六ヶ月餘りの日數を費して放牧しつつ八達嶺まで連れて來てゐるのに出會した。後數日にして北京の城内に入ると羊は賣飛ばすのである。六十日以前には皆小さい羊の子であつたのが、それをこれまでに途中で養ひながら此處まで楽しみつゝやつて來たのであると云つて、一條の鞭

を肩にしつつ自分に物語つてゐたのであつた。朔風と戦ひつつ數多の羊を追ひ長途の旅を続けるといふことは、いくら商賣にしたところで、容易な業ではない。固より群羊の中には之をリードする年長の白羊もゐる。それが又多くの仲間を指導する如く頻りに意をくばつてゐる様子が見えて甚だいぢらしかつた。何にしても確確の山野をかくして病氣もせず連れて來るといふ事は實際骨の折れる仕事である。羊に對する牧人の心づかひは察するに餘りあるのである。

驢馬にしても支那の百姓の之を愛撫することは一通りではない。日本人で初めて支那に遊ぶ人は、面白がつて善良な驢馬に矢鱈に鞭を打つ。そのためいくら温順な驢馬でも遂に怒り出し疾走中に落馬させる位の腹藝はやる。日本人の習慣としては手に鞭を持つ以上は驢馬の尻をパチンパチンと打たなければ乗つたやうな心持がしないのであらう。驢馬こそよい迷惑な話である。支那人は人を乗せるために驢馬が此の世に生れて來たのであることを固より知つてゐるが必要以外には決して叩かぬ。否殆ど全く打たぬといつてもよい位である。然し不幸にして意地の悪い驢馬に當れば手綱を持つ右手は其儘に左手で軽く尻のつけ根の處を指頭で以てさはつてやる。愛撫すること稍久しうして流石の驢馬もその恩に感じ、氣を平かにして乗客に満足を與へるやうに努め

る。驢馬は善い氣持で目尻を小さくして喜んで鈴の音も勇しく歩いて行く。乗手は柳の並木の垂れた間を善い氣持で手綱もゆるく自ら晝中の人となつて行くのである。結局双方共によい氣持で鞭は殆ど無用の長物の如くにして行くのである。驢馬に對する愛撫の極は此處まで行くのである。手がきたなく穢れたと思へば後で熱湯で洗へばそれでよろしい。矢鱈に無用な鞭を使つて落馬するよりもどの位よいか知れない。

その外小鳥の飼方にしても、支那の人は之を捕つて馴らす迄には可なり小さな鳥籠に入れておいて、小さい籠に入れ殆ど運動させない位にして之を馴らすのである。それから次第に大きな寸法の籠に移して行く。すると窮屈な籠にゐたものが急に大きい大きな籠に出されたものであるから、小鳥の喜びは一と通りでない。又その鳥の飼料なども多くは非常な手数を費して蒲公英の花の中にゐる幼蟲を以て、その餌とするとか、時にはこの小さな蟲を一升も二升も集めて専ら小鳥の餌にするといふやうな風で頗る努めたりといふべしである。又小鳥の餌を入れる器物の如きは幾十種もあつて、之に花鳥山水を描き五色人形を書いたりする。小鳥を優遇することは非常なものである。日本人の小鳥の飼方は初めから大きな籠を用ひ、廣ければ小鳥が樂であるといふ考で

ゐる。廣い處を初めから見せるから飼主に懐くことが縁遠くなり、小鳥が又我儘になる。餌や食器の如きも、支那人程苦心してゐる人があるかも知れないが、自分は知らない。尙日本では小鳥を止まり木にとまらせて道を歩き野に遊ばせるといふ習慣が少ない。ために晩秋もずを止り木に止まらせて遊ぶ位が關の山である。昔の鷹匠の遊びは之を別として、支那の社會では勞働者苦力階級に至るまで道を行くとき小枝を手にして之に鳥を止まらせてゐるのを見かける。花眉、ラアチャオ、其他梅花の如き小鳥を止り木に止まらせ、口笛を吹きながら小鳥のお相手をし如何にも愉快さうに愛撫してゐる光景は屢々見るのである。

日本人は小鳥を括る時には肝腎の足をしぼる。之は小鳥の心理を察せざるも甚しいもので、いくら小鳥でも足をしぼられては善い氣はせぬ、支那人は小鳥の首から少し下つた翼のつけ根の邊りを軽く縛る。そして一見何れの部分が縛られてゐるのかわからぬ如くに見えてゐる。其邊の様子は日本人のやるやり方とは全然異つてゐる。

要するに支那人の小鳥を愛撫する方法は支那の人が如何に生物を柔かく巧みに操縦して行くかといふ事を物語るものであつて、この方法からすれば動物は善い氣持になつて來るにきまつてゐ

る。外に飛んで行つても又歸つて來ると云ふだけの心をひきつけるこつを心得てゐる。茲に支那人の腹藝の奥ゆかしいところがある。日本人に取扱はれる馬や牛などを見る時には、轉^{ウツ}之等の犠牲者に對して同情の念を禁ぜざるを得ない。若しそれ支那江南の鶉飼の方法に至つては最も見る可きものが多く、實に巧みな方法でやつてゐるのである。

支那の腹藝——列強操縦の秘訣

支那人の大陸氣分から出發すれば、動物も人間も家族の觀念から出てゐるのであるから、宗教家の云ふ言葉ではないが、實際無差別の觀念に終始してゐるものと云へるであらう。この點は物を初めから區別してかかる我々日本人から見れば大いに學ぶべき點があると思ふ。その奥底に腹藝を秘めてゐることは兎も角として小鳥をそらさず、驢馬をそらさず、人間をそらさず、拒まず、去る者は追はず、實に愛の極致をあらはすのである。かやうな出發點にゐる支那人の氣持の前には列強の操縦などは朝食前の事であらうと察せられる。日本人は根が正直なものだからすぐ顔色を變へる。ロシアや歐米の事でもみると、一大問題でも起つたかのやうに甚だしく皆が騒ぐ。ア

メリカが一つ咳でもしようものなら、すぐあわて考へ出す。ロシアがどうかするとすぐ日本が赤化思想に侵されはしないかと危惧の念を抱いて心配をする。何故日本人はかやうに落着かないのであらうか。何故かくの如く小事にこだはるべきたちなのであらうか。妙くとも列強を操縦し之を窺がふ位のゆとりと興味とがないのであらうか。國際關係に於ては正直といふ事も固より結構な事であるが、列強の事とさへいへば無闇みに固くなるばかりが藝ではあるない。之も根が餘りに正直に過ぐることに致すところであらう。

支那人は自分の見る處を以てすれば、芝居氣の如き腹藝がある。或る意味から云つて小鳥も驢馬も苦力^{クワリ}も、學生も、或は條約國の領事も公使大使も同じ位にしか見てゐない。或は寧ろ領事公使よりも内間の小鳥の方が腹藝を行ふ上に於て興味深く感じてゐるやうにも見えるのである。之は列強の人物をけなしたり、債權國の諸公を輕蔑していふのではないが、實際支那人の腹藝は相當興味あるものであると思ふ。日本人はすぐ請訓したり、やれ何々會議と規則づくめで大騒をする癖があるが、支那人の氣持からすればどの詰り敗戦するに極つてゐても殆ど問題にせず、又どれだけの價值のある事でも、乗物の中で片付け又、麻雀でもして茶でも飲みながら手輕に無雜

作に片付けようとする。かつて支那問題で日本のお歴々が大官を集め、鳩首會合してゐるほどの騒ぎをして、その結果を齎らして行つても、折角南京まで出かけて行つて見ると、時の外交部長王正廷から、今日は忙しいから明日来てくれの一言で以て軽く拒否され、二日も三日も南京で待たされてゐたといふやうな事もあつた。本當に支那にとつて支那自身が居ても立つても居られぬ程の非常時であつたところで支那要路の人々は一向に南京に乗り出して來ない。そのところを以て見ると、支那自身に於ては世の中を長閑ながひらに考へて別にやきもきすることもしないやうである。鳴かざれば啼くまで待たう時鳥式に構へてゐるのである。

支那は現在と將來に生きる國民であつて、決して過去にこだはることはしない民である。

東亞に顔を出して來る列強にしたところで、是又大してさう齒のたゞぬ程の六ヶ敷い相手とは思はれてゐない。腹の上に乗せておけば何日しかころげ落ちるだらう。何時かは又かけ上つて來る時もあらうから、その時は又その時のことぐらゐに見ておけば澤山だといふやうな態度で、腹の底をきめてゐる。殊にイギリスの如き嘗て香港の總督には實に妥協性に富んだおとなしい無抵抗主義の學者をその位置におき、殆ど十が十まで支那の意見を入れるといふやうな態度に一變し

て來て以來、イギリスを視ること殆ど小鳥一匹程の興味も持たず、餘裕綽々の腹藝を見せてゐたことさへあつた。こは往年における支那の目新しい態度であつた。支那の青年政治家中には年齢こそ若けれ其背後には、春秋戰國以來の二千有餘年に互る合縱連衡等複雑多様な人間操縱術の秘訣を體驗して來た先天的の腕を持つてゐる。それ故に過去幾千年の支那民族の腹藝は二千有餘年に互る歴史的の絲を引張り、その絲によつて若い連中達が然るべく善い加減にあやつてゐるのである。支那を相手とする凡ての交渉事は支那人の腹藝を理解しないで取かかると、結局は支那料理と卓上のお世辭位のところで體よく饒けされる。これが精々の收穫となるものだ。要するに自分では眞劍でゐても、支那から見れば周章しく食客の去來する影法師位にしか見えてゐないかも知れぬ。往年ゼネーブに於ける國際聯盟の席上に表はれた支那委員のやり方に見ても明瞭に伺はれるのである。こゝには列強の面目にも拘はるから、餘り具體的に述べたくはないが、要するにコンパスが違ふ。列強のコンパスが文明式で、合理的であるといふ。支那の腹藝が持つコンパスは元始的に出來てゐてその實際上の働きは大して物の役にも立たぬ。半分は振おとが弛ゆるんできかない事が多い。然し利かせるやうにして之を持出して來る時には途方もなく大きなコンパスと

なつて、列強を煙に巻くやうなことになるのである。之は甚だ皮肉な見方ではあるけれども、非國家的のやり方であつたのであるから仕方がない。而も最後の結論に於てはその氣のきかぬ壞れたやうな巨大なるコンパスが勝を制すると自惚れてゐる。一方では理窟をこね廻すうちに、どん／＼と先の先を見越し自然と我物となつて来るやうな大勢をつくることに頗る妙を得てゐる。之は論より證據、阿片戦争以來過去九十餘年間イギリスが支那の要處々に自國の第一戰として經營した重要な居留地といふ居留地をばあの通り大抵還付するの止むなきに至つた哀れな場面を見ても判る。結局支那人心理から之を云へば我が物が當然我に還つたのであるから、當然の腹藝であると云つてゐるかも知れないが、イギリスから云へば過去九十年間に苦心慘愴して完成し上げた物を無慘々々と還付させられたといふことは、その當時の時勢であるとは云へ、萬感胸に迫るものがあつたであらう。結局これは眼中英國なしと云つた支那側の腹藝が九十年振りに初めて表はれたものではなくして何ぞやと云ひ度くなるのである。

斯くの如く英國が、支那人の腹藝の前に、無雜作に殆ど海鼠ネズミの如くに柔かく片附けられてゐたといふ事は抑々何に原因してゐるのであらうか。之は人道主義とかクリスト教の博愛主義のため

とか、文明の移殖だとか、東亞の開発だとか、乃至は機會均等だとか、人類愛だとか同じやうな云ひ方を違へた美しい言葉で云つて見ても、結局支那に對してその利權に對して内心純でない點のあることを支那人から看破されたためである。物貰ひがやつて来て、いくら玄關先で親切さうなことを並べて見たところで、腹の底を見すかされた時には應接間に通されぬのは固より主人の書齋とか、細君の室とかへは通さるべくもない。いくら若年でも支那青年有識者はそれ位の事は判つてゐる。列強操縱の秘訣は少しも六ヶ敷い事でない。その列強の弱點を以つてこれをよい加減に取扱ひ、今日は忙しいから又来てくれの一言だ。こは最も深刻に又最も明瞭に此間の消息を物語つてゐるといへるのである。宜べなるかな、小鳥や驢馬などよりも列國の使臣、領事を無雜作に擲揄してゐるのも道理のあることだ。或は支那人の目から見れば領事館とか公使館とか或は大使館區域といふやうなものは、一つのこけおどし、餘計な施設と見てゐるのかも知れない。寧ろ支那に交渉があるならば宜しく腹で來い。腹藝同志の比べこなら何時何時でも交渉に應ずる用意がある。來て貰ひ度くはないが、來るなら何時でもいらつしやい、席を清めて御高來を待つてゐるといふやうな御世辭は、よく並べもし振舞つてもくれるだらう。それを餘り圖に乗つてお目

度く調子づき、輕はずみなことをすると、又御馳走の方法が小指一本で挨拶されることになるであらう。言葉少なくて意を盡さぬ。そこらは遺憾であるが、殊にこの邊の文字は熟讀玩見して頂けば讀者の胸に深刻に響くものがあるであらう。之を深刻に感じて一種の興味と大陸氣分とを以て解釋し、了解し、之に依つて腹を扶られたやうな感じのしなくなつた時に於て、初めてその讀者は、支那大陸の腹藝の第一歩がわかる時であらうと思つてゐる。

奥底の知れぬ生活断面

不老長生

不老長壽の考へは支那の情緒のうち最も根強い力を持ち、その功成り名遂げたるもの、又富貴臨門の瑞氣に恵まれたるものの必ず抱くところのもの。従つてこれは恐らく古今を貫く最も支那らしき趣味的談柄となつてゐるものである。

支那の田舎には百十六歳又百一歳と云つた老翁で眼鏡一つかけず硬いものでもカリンと音をさせて噛みわることができ、隨時船車を利用して旅行などしてゐる者がある。親しくそれらの長壽者からその養生法について聞いて見るに、さしたる珍法は見出されない。が第一には神身の安泰である。氣分を呑ん氣に持ち無理な過勞や心痛を避くることこれである。事實支那の片田舎には、新文明の侵し來たる者少なく平々凡々裏に氣分の安泰を期圖し得ることは最も可能性がある。第二は千里鶻啼いてみどり紅に映すと云つた式に周圍の環境が甚だなごやかに出來てゐる。張り合のないくらゐ穩かに出來てゐる。世相の不安、思想の變革が一方に勃發しさうでもあるが、又それは富豪名門の人の主に氣遣はるゝことであつて、土着の老農や中以下の大衆生活を營んでゐるも

のには何の障りもない。それだから土豪や外人を除けば世は太平と云つてもよいくらゐに氣樂である。この一と二とは正に因となり果となつて精神方面に著しくよい長生法の條件を提供してゐるのである。

第三にはそれぞれ相當勞役に従事し又おのづから保健上の運動が出來てゐる。元來體格が見事で骨格もよろしい。寒暑に對しても風雨に對しても抵抗力が十分に出來てゐる。近來日本の眼鏡黨のむやみに激増してゐる悲觀すべき状態とは異なり目は殊によろしい。目、齒、生殖この三點が健全なる民族は長壽保健の優者と云へる。本來悠久な氣分のある處へかうした神身の條件の兼ね存してゐることが何よりも強みを與へてゐる。第四には不老藥であるがこは精力劑として平素食する料理のうちに暗々裡に採り入れられてゐる。祕藥と云ふよりか不斷の食料品の方からその精力劑を用ひるの適切なるには若かないのである。曰く

一、蒜（ニンニク料理）

二、蛇料理

三、血液料理

四、鷄卵丸料理

五、鷄蛋料理

六、魚翅（ふかのひれ）

七、紅燒鯉魚

八、火 棗

わけてもニンニクはその量を過ごせばのぼせる位に効能がある。老人の回春法に之が特効を證明せる實例はあまりにも有名である。あとで砂糖をなめるならば食後の臭みをとれると支那人は云つてゐる。蛇料理とは廣東の冬の料理であつて評判の呼物である。蛇膽酒と共にこは房中の秘藥視せられてゐる。之を初めから人に説明するときには之をきらふと云ふ處から、宴終りたる後に白狀するといふものが多い。効果は靚面である。血液と云ふは雞血又はスツポンの血である。溜めて凝結せしめ之を豆腐の汁の式に汁で食す。最も大衆的な料理の一つである。火棗は山東曹縣の種のなきものを最上となし、老人は之を或る秘密の方法にて鹽からくし之を食後しやぶつてゐる。それを以つて乙女の精氣を受けたものとして長壽妙藥では無二の秘訣となしてゐる。南支北支は共に棗の産地多く、老人連の之に力を集中するのその間何等かの不可思議な關係あるは拒みかたき事である。古へ漢の武帝に西王母が桃實を献上し不老不死の獻策をなしたとの傳説があり、又秦始皇の徐福童男童女を東瀛の島に遣はし不老不死の妙藥を求めしめた話もあり、そんなわけで、今だに支那の奥地で大抵の老人が更に若返り法を見出さんと腐心せることは想像の外で

ある。煉丹術により仙術を行ふものもあり、雲水となり山に入るもあり、尸解昇天を夢みてゐるもある。神仙列傳に入り不老不死となつたと傳へらるゝも多々あるが、しかし結局はその止むに止まれぬ熱望を傳説化したものに過ぎぬ。唯その長壽法によつて採られる方法が精力劑によるものと尙一つは腎臓の爲めになる物を採ることに意を用ひてゐることがわかるのである。つまり萎縮腎を防ぐ方法として利尿劑をとること、たうもろこしの毛にきささげを五分五分にして煎じて飲み、小便の出ない病氣に利尿作用をつくと云つた卑近なる本草學の應用を實用してゐる。四川長壽縣には藥草が多く栽培せられ、何首烏始め老人向きの草根木皮が殊に多い。これ亦利尿的のものを主となしてゐるやうである。

支那の老人が更にあらゆる手段をつくし生命の延長を願望するは當然であるに拘らず、その反對の打消し方法を續行してゐることは頗る了解に苦しむ所である。と云ふのはその一夫多妻なるもの多きこと、今一つは阿片吸煙の習慣から免れることの出来ぬことこれである。又そのモヒの中毒にかかるまで之を續け再び立つ能はざるの癮者（中毒患者）となるもの多きは驚くべきことである。その極端なものになると、顔色蒼白、肉落ち、火箸の如くなつて路上に行き倒れと

なるを見ることすらある。いくら制裁を厳にしても賭博と阿片は支那民族から取り除くことが出来ぬことになつてゐるが、その阿片の爲めに一方に止むにやまれぬ長壽の考をば打こはしつゝあるとは不可解なことである。しかしそれにしても尙且つ相當の老爺にして阿片を續行してゐるものも少なくない。これは理屈でなくして本當に嗜好品以上に病膏盲に入つてゐるものである。阿片をのんでゐてさへ高年に達し得るものが多い體質の持主である。之を斷然やめさせるとしたならどれだけ長く生きらるるか判らぬとも云へる。不老長壽の考は支那民族性を見る上の重要要素と見なくてはならぬものと考へられる。

貴賤貧富

支那は一般諸外國のやうに國家の基礎を鞏固ならしむる意識的統制にとらはれてゐる國でないから、ここに安定した政府も建てられず又國家による統制の如きは當分むつかしいものと觀測されてゐる。政府要路に立つ者の身も浮草同様に感ぜられ、唯期する處は國家とは別の天地を作り貴賤貧富を中心とした生活相に即した社會に生を送らんとしてゐるの觀がある。貴賤貧富の考は

千古を貫く支那社會の根幹をなして居り今以つて之が支那全土を風靡してゐる。たまには例外的につむじ曲りの者もゐないではないが、支那四億萬の關心こそはこの一點に歸すると云へる。

一方に大陸味を帯びた特異性を持つてゐる者のあるに拘らず、その一旦志を得て要職にでもありつくと、飛ぶ鳥も落とさん許りの贅を盡し心ある士から顔をしかめらるる者すら少なくない。その爲めには清廉の士からたしなめらるる者がある。酒池肉林あらゆる肉慾主義の三昧に入り、享樂を事とし、阿片に酒色に到らざるなき精力を傾倒する。殊にその都會にあるものは自ら邸宅を擁してゐるに拘らず上海租界に別邸花園を營み、或は自ら名を祕し別人をして之を持たしめ自ら世をくらし之に安居せんとする如き手段をとる。大官を一度つとめた者は子孫が三代食へる、とも云はれてゐる位でその間に溜めらるるだけ溜めんとする執拗振りと熱烈さを持つ。これも要職を引いたあと法律や國家の力で守つてもらへると云ふ目安がついてゐないのだから自ら英蘭銀行になりその他の大銀行になり預けておくやうにする。更に要心深きものは大連に又上海に又南洋にと安住の地を見出してここに餘生を樂しまうとする。奥地の方では他に方法のなき爲め山寨の要害地點を求めて此に人間界を離れた天地を創設せんとする。四川奥地の祕境には千古の

山寨を築き萬縣天成城に賀叔甫の山寨の存する如きはその中の雄なるもの。土豪の生命財産はかうした方法によるの外に安定を求むることは出来ぬ。國土ひろしといへども富豪になつてしまふと却つて支那三界に身を置く處がないと云ふ國柄なのである。國民政府に幾萬の兵が擁されてゐるとは云つても、それは蔣介石の手兵といふに過ぎぬ。又地方にいくら兵力が養はれてゐるといつても、それは地方梟雄の手兵たるに過ぎぬ。眞に云ふ國家直屬の正規兵と云ふはあるが如くにしてない。されば各省各地の土豪どもが自ら土豪を以つて任じてゐようとするには、勢ひ手兵を邸内に養つてゐるの必要がある。支那の國情としてこは又止むなき事である。

支那の富豪生活は奥地にあつては山寨かさもなくば土廓森林を廻らした内部に營まれる。都城にあつては單なる土廓高壁を繞らしたうちに儼然として城郭の如き様子を見せてゐる。これら富豪の生活は常に地方の支配者に款を通じ聯絡を失はないやうに努むるか、さもなければ上述の手兵を養ひ防禦の事に怠りなくやつてゐなくては寧日を樂しむことが出来ぬのである。内地の富豪たちは歎息して、一生のうちいつか上海の租界に出て生命財産を租界の官憲に托して安固をはかるやうにしたいものだとこぼしてゐる。富豪になると誰れ人もこの嘆聲をもらす。租界回收論な

どのいかに書生の空論であるかはこの一事で以ても察せられる。

かうした世相を背景にして、富者はその常として阿片その他の物質慾を満足せしめんとし、結局不老不死の欲望を起す處にまで来る。國であつて國をなさない集團社會の中にゐるからには、ここに落着かんとするより外に求むべき天地はないのである。

貧者賤民にしてその心を清くせんとするものは雲水に身を装ひ無錢旅行の方法で以て雲煙萬里の山野を越え禪寺の本山へ、道教の本山にと落着くものがあり、又市井の巷に出て屑拾ひ、ごみ函のぞき、運河の泥底さらひ、胡弓弾きなどに身を落としてゐるものもある。泰山石磴、明の孝陵乃至は漢陽歸元寺と云つた名勝舊跡には、門前に游客雅人を待ち受け哀を乞うてゐるものが相當にある。しかし賤民貧者といへども多くはそれぞれ適當な仕事を見付け、香煙の吹殻を拾うてあるとか、夏の炎天を團扇一本持ち行人のうしろからあふぎあふぎ一と稼ぎをするとか、苦力仲間に入つて碼頭にかせぐとかその外火車站に稼ぐとか、人攫ひをして他の地方に賣りに出かけるとか、ワントン（雲吞）賣りになるとか、何れも道を得て口を糊するだけの事はしてゐるのみならず、世相が又それらに便宜を與へるやうにも出来てもゐる。

支那は中流階級の少なく貧富の差の極端なるものがあるが、さりとて失業者は他國に見るやうに匡救を求めて自己の無能をかこつものはない。何なりと適当な方法を見つけ出して食ひ代を作ることだけには妙を得てゐる。その苟しくも金になるなら貴賤上下の別なく之を臆面もなく求め之と勇敢に戦かひ且つ取り込んでしまふ。その習慣になつてゐるせいか、厘毛を八釜しく云ひ立て取るべきものは取立てようとする。わづか一錢二錢の口争ひで紳士が車夫と大道のまん中で活劇を演じてゐる場面は支那ではよく見るところである。人はこの支那に見る貧富の差の甚だしき世相に對し、之をグロとなし暗い氣持がすると云つて恐れをなしてゐるが實際はかなり朗らかである。思つた事はあけすけ云つてしまふ所であり、富者を富者と思はず、内心之を無視し超越して平氣で之に對してゐるなど貧富の考へに對して頗る呑ん氣な處がある。事實また精神的には貧者必ずしも悲觀して居らず、又富者の心必ずしも傲つてはゐない。君子は貧を憂へずと云へる至言すら耳にする。貴賤等を異にすといへども門を出づれば皆これ平等、心持は全く同じことであるといふ。そこに支那世相の大きなまじめさが物語られてゐる。由來支那はその國家の力で特に金持を保護しようともせず、財閥に利益になる法律を作らうともせず、自然のままに打やつてゐ

るやり方をしてゐる。之が却つてよろしい。世相そのものが自然の浪によつて整備せられ、貧者となく土豪となく人心の赴く處へ自然持つて行かれつつあると云ふ感じがする。而かも三千年來自治に慣れよくこなれてゐるせりであるか、あまりたいした脱線もせず、はたから國家主義の國が心配してゐるほどの事もなくして各人は自立自存を完了してゐる。貴賤貧富存在の原則はその間にいつも平均され、又地ならしが出來て行きつつあるかのやうに見えるのである。その世相の渦巻に漲る氣分の現れとしてはあきらめると云ふマイファツ「沒法子」（仕方がない）の語が行はれ、金持はこの言葉を吐いて結局すべての言葉に代へてゐるところが見える。

暗殺陰謀

支那の如くその國家に警察力のあれどもなきが如きところ、又その世相の複雑味、幽玄味のゆたかなところに在つては、殆んど何によつてか社會に明光と權威とを見出したらよいか方法が立たない。國家的統制によつて方法の立ちにくい天地には、唯その住民相互間の社會的制裁と自治體の覺醒によるの外あるまいと思ふ。ところが支那はあの通り各個人個人が殆んど支那式の渡世

法によつて今日の社會相を作りあげてゐるのである。かつて段祺瑞のふところ刀として令名のあつた徐樹錚が、世界游歴を了へて歸國の際廊坊の驛頭で狙撃せられ北支の露と消えた。これは氏が永年に互り安徽派の舊敵から狙はれてゐた爲めである。暗殺陰謀の事は支那ぐらぬ自由に又巧みに又効果のあるやうに行はるる處はない。それだけに支那ぐらぬ又秘密のよく固く守らるる處はない。秘密結社がよく成功をしてゐるのも支那人なればこそと思はる。上海のフランス租界その他には探偵小説以上の出来事や陰謀が日日行はれてゐる。當局の目に入るものはその中で九牛の一毛に過ぎぬ。又我が臺灣にすら大正四年の七月に臺南ダバニ事件と云ふ暗殺陰謀があつた。西來庵の建築竣工の賀筵に招待した官憲連に悉く毒を盛つてゐたといふことであつたが端なくも事前に發覺し主謀者羅俊は逃亡し一味徒黨は悉く刑に處せられたことがあつた。

支那はいくら表面平和の如く見えてゐてもその實かかる不祥事が隨處に目論まれてゐる。これは支那民族性のグロ的方面を代表してゐるわけであるが、その智謀は底止するところを知らぬ。支那自體としては之に對して何等の制裁がなく、支配者自らたつて法律を無視しいつどんなたくらみを胸に描いてゐることか判らぬ。政治會議中の胡漢民を捕縛拉致して之を監禁した試めしき

へある。支那はいつまで立つても法治國となり得ぬ國柄であるならば暗殺、陰謀の止む時も亦來たり得ぬ。通信機關が十分でなく又賣收のよく利く國柄のこととて之が防ぎやうもない。事件を知悉してゐるものが何の理由もなく暗殺されることもある。暗殺者には銃殺の酷刑が實行されてはゐるが焼石に水で何の役にも立たない。平素家庭で豚の屠殺を見てゐて血を見ることが平氣であるから、酷刑など課して見てもむしろ之を面白がつて見に来るくらゐが落である。のみならず中にはその青龍刀で首の落とされた利那、その動脈の切れて流血のほとばしり出る小口へ持つて行つて、見物する兒童など饅頭を引きちぎり之に鮮血をつけ頬張ると云つた珍風景さへも見ることもある。殺戮を恐れない心理はかくしてあらゆる方面の資料から證明せらるる。

支那に見る陰謀秘話、暗殺計畫は人をして戦慄せしむるに足りるものだが、それも支那世相の當然の出来事とうなづける。國家の軍隊の如く見えてゐる兵隊が實は手兵であつたり、傭兵であつたり、その一旦戦時状態に入るや給料の問題その他から、いつか敵と款を通じたり駈引きによつては一夜のうちに寝返りを打つといつた如き事は平氣である。相談づくでは二個師團三個師團でも引つれ身を寄せて來ると云つた、たよりなさを見せてゐる。もともと戦争に非ず商取引なり

と見てゐる支那軍人どもであれば、かかる事が計畫的に行はるるも驚くに足りない事かも知れぬ。或は總司令の位地を覗ふなり、主君を出し抜き之を蹴落とすなり、死地に陥れるなり何なり自由な事をする。その實力のあるものであるなら之を押切つてやり抜くことも出来る。そこに支那獨特の陰謀振りがあり、之に又追従する一味徒黨もある。離合集散は世の常とは云へ、その邊の風雲はいつも支那四百餘州に動いてゐる。又その暗雲低迷を見ないことがない。一方に義兄弟を誓つておきながら地方では恐ろしい陰謀をたくらみ、人を宴席に招いておきながら毒を盛り暗殺を企つことも常である。楊宇霆が張學良の處へ麻雀に呼ばれその邸に到り、その室に踏み入る第一歩もろくも銃聲一發その命中して殞れんとする處を、更に學良自ら六連發で一とたまりもなく楊を不歸の客となしてしまつた。楊はそこかつて張を招待し麻雀を遊んだその返禮の意味で呼び返してくれたのだとのみ思ひ込み、自分の身に全滿の赫々たる聲望が集まりそこが張の心に恐怖を抱かしてゐることには氣づいてゐなかつたものらしい。

又蔣介石夫人宋美齡が先年主人遠征不在中のこと、上海で宋子文邸の夜會に招かれダンスなどして浮かれ興じたあと慥かにいつもの自動車に乗つた筈であつたがそれが陰謀のたくらんであつ

た車とあつて、恐るべき闇みの方面へドライブしてしまひ、結局巨大のかねをねだられ滬松警備司令からも秘密裡にかけ合ふとか、夫人の身柄を買ひ戻すにすつたもんだの騒ぎを起した。同夫人を人質にする計畫はいつも江南地方で耳にすることだが蔣夫人は又いつどこでかかる不祥事の主人公にせらるる事か判らぬのである。

かくして年年歳歳支那はそのグロ、ギヤングの實質がくり返されてゐるが、之を剿絶しきれい。さつぱりとした樂土にすることは望まれない。これは賭博、阿片が罪惡視せられず大官までが之を趣味化し之に没頭するやうな世の中であるから、或はグロ方面の事も一種の興味本位となり、之と心中する處まで行かなくては止まぬものかも知れぬ。或は支那社會の實相から云ふ時は難局の打開、局面轉開はこの方法によるの外名案はないと云つた考が深く潜在してゐるかも知れぬ。

支那民族性と趣味とを考察せんとする者は支那のかかる裏面觀についても深刻なる觀察を下して、その深奥幽玄なる雰圍氣を検討すべきである。暗殺陰謀に對する支那人の心境とその實行上の魂膽はかくの如くして現はれてゐるのであるが、しかし半面には又必ずしもそれに無關係のもの、全然それに疑のかかつてゐない者に對して之が巻き添へを食はず如きことはない。日本人は

ややもすると支那内地はかゝる兇行事件の續發せるところの如く解する者多きも、そは謬見である。暗殺は暗殺、平和境は平和境とその間のかみ分けは十分に出來てゐるところである。

社交辭令

社交は支那人には生活の生命であり、出世の秘訣であると見られてゐる。友あり遠方より來たる又よろこばしからずや、と云はれてゐる位に友人に親交を結び知人に交遊を擴めて行く。又友人の紹介による初對面の客に向つても甚深の交情を捧ぐる。その間の社交の慇懃さは至れり盡せりである。それが單なる表面の交際振りばかりではなく、人情の機微に觸れ人心の幽玄味を動かすものさへある。これは一と通りの苦勞性の者ですらも考へつかぬところ。而かも支那にはまだ若い未青年者でその間の機微なコツを心得てゐるものが少なくないのである。

支那の人々の社交は第一に人の面子を尊重して自ら謙讓の態度に出ること、人に對して寛容忠恕の道をつくし自分を責むるに急なる君子人を以つてゐること、又人情の弱點とするとを看破し、相手方をどこまでも喜ばしめ満足の情に浸らしむること、殊にその瞬間瞬間の感情と心の動

きを割破してそれに順應することにつとめ、敢へてその情趣と意志に楯突くやうな態度に出ることをしないのである。つまりその人の面前にゐると否とに拘らず相手方の面子を重んずることに全力をこめ、細心の注意を拂つて社交美の發揮に反するなからんことをこれことめる。第二には自己に聊かたりとも疑ひのかかる如き態度をとらぬやう用心をし又その言辭に注意をしてゐること。支那は世相が世相ゆゑ、思はざる事から疑雲をかけられ心にもなき噂を立てられ痛くない腹をさぐらるる事がある。従つて他人には陳某とか王某とかと交友の間柄なることを感づかることすら用心せねばならぬといつた風である。人から鎌をかけられて居る時は勿論のこと又自身身の話をするうちにも、おのづから語るに落ちると云ふ事のないやうに用心をする。同罪に引入れんとしてゐたり、刺客を廻はしてゐたりすることがあつたりなどする場合には殊更によく用心をするのである。

支那世相の裏には折角客を迎へ宴席に招いておきながら皿に毒を盛つて年來の目的を達せんとする如き事もある。何時どこに如何なる引掛かりがつくかも判らぬ社交は、誰れ人にも満足な答へを與へるを主眼とすといふ原則はきめられてゐても、その實そこにはややこしい事情の伏在し

てゐることがある。といふのは路傍で或る老舗の店員に某氏の邸宅を聞かうとして何等一言の答もなく唯ツンとされる事があつたり、又ブチタウ（不知道）の一點張りを繰返さることがあつたりする。その人の邸宅のありかを知つてゐることを第三者から知らるる事が心ぐるしいと云つた氣持でゐる時には、その返事はあるわけがない。しかし時には酒錢のいくらかを寄越さなければ教へてくれぬと云ふものもゐたりなどする。しかし又事實全くその態度の示す如く知らないから知らぬと答へたまでであると云つたものもある。

又社交舞臺らしい舞臺にあつても、その相當有力なラオトル（老頭兒）に話かけこちらでは何等かの香ばしい答へを期待してゐるに拘らず相手は何の答も云つてくれないで、唯笑つてニコニコしてゐるのみと云ふ場合がある。「笑つて答へず心おのづから閑なり」との李白の詩句そのままの答へぶりである。これは第三者のゐる場合など最も世故になれた人のやる仕方である。明瞭は缺いてゐるが不快の感は起らない。「明朝意あらば琴を抱いて來たれ」と云ふと同じく「別の機會に又答へるであらう、ここは場所柄……」と云ふことにもとれる。支那民族性から來る社交振りはその餘りにこなれ過ぎてゐるせゐか、二つの場合の何れにも意味がとれるといつた答へ振り

をなす者が多く、而かも朗らかな氣分を漲らせてゐるのだから悪くは感じないのである。

支那人の社交性は單なる功利主義からのみ出發してゐると見るものもあるが必ずしもさうでない。確かにその社交趣味に出發して、社交そのことが好きである。多忙の身であつても社交となると何事も忘れ懸命になる傾を有してゐる。而かも社交を利用してその間に要領を果たさうとする者もあるが、支那人一般が性來の社交癖を持つてゐると云へる。談笑としてはしやぎ月夜樹下に語り更かし罪なき冗談で終日を消す手合がある。この故に茶館が社交機關として生れ出で又各種の會館が發達したわけだとも云へる。

社交性の濃厚なところから勢ひ辭令の巧みになり行くは當然の歸結である。學生から年賀狀を寄越すにも天子に奉る書に見る如き擡頭の改行振りで鞠躬の辭令を用ひ、又同じく書生から依頼狀をよこすとき「如父先生」と宛名して書いて來る。自分の赤貧洗ふが如きを形容しては「君子は貧を憂へず」と來る。その君子人を以つて任ずるところなど罪がなくてよい。その僅かに膝を容るるに足りる家に訪ね來たつてもその筆にする挨拶の文字を見ると、驚くなかれ「東壁は圖書の府」「西園は翰墨の林」と來る。恐れ入つてしまふ。共に孔子廟に遊んで見るとここには

徳大千秋祀

名高萬世師

と見事な對聯を見、又武廟に參詣して見るに、

義存漢室三分鼎

志存春秋一部書

などと云ふ聯句を見る。道院に行つて見ると、「鶴舞千年樹、雲生四面山」などとある。かうした好文字を到る處に見る位であるから、社交辭令の眼目を表示するとき文字あるの士はいきなり交以道接以禮

近者悦遠者來

と墨を落とす、誠にその言の如くである。むさ苦しい二間まぐち位の飲食店の看板に掲げられた文字を見ると「吟香閣」とある。實に文字負けがしてこけ威しのやうであるが、しかし支那社交上に見る文字の用法はすべてこのコツで行く。下手をすとかうした持ち上げられた美辭を頂きすつかりお目出度くなつてしまふ。ここに文字美の含蓄の深いところもあるが、その辭令にかう

した美辭をかつき出して來る文才は支那人の天性と云はれる。これは言葉の天才を有してゐる計りでなく文辭の奥深く又その豊富な素養を持つてゐるによる。それが隨處、隨時にほとばしり出て光彩を添へる。而かもその修辭法が一定の型にきちんと嵌つてゐて、いかにも納まりがよく落着きがある。古典から採られたものは一段の雅趣と含蓄美とを發揮する。

この社交辭令は單なる氣分情緒、言葉や文字ばかりで了らしめないで、直ぐ支那の慣習として聚餐酒席の場面を開展する。紹興酒のほんのりと酔ひの廻はる頃陶然たる氣分に仙郷に遊ぶの思ひを起さしめ、天下の士を友とするの快を談じ、一片の閑雲に萬里の心を語り合ふのである。料理に酒に、話は益佳境に入つて夜は更け行く。君に勧めて更に盡くす一杯の酒と來ると云つた調子である。愈出でて、愈妙。支那社交辭令の先きは其の盡くる處を知らず情緒纏綿、たとひしばらく相別るとも、藕絲の細かく相つながらる如くわたしの心は……と云つた工合に根強く又忘れがたい處の機微を穿つて來る。

支那民族にかうした社交辭令のよく發達したわけは、その文化的訓練のこまやかに出來てゐる爲めであると解せらるるも、又一つには矢張りその自治、自立の運命開拓と云つた根強い底力が

裏に流れてゐる爲めであるとも考へられる。何にしても支那世相が文學的に又文化的に表面何等のぎこちなさを感じずに滑かに廻つてゐるのは、かうした社交辭令の油が時々刻々注ぎ出されてゐるによるものと云へるであらう。

面子と社交藝術

日本人にはかどの取れたおだやかな人が少いとは外人のよくいふ所である。事實支那に行つて見ると、殊に田舎にはいつて見ても、かどのとれた人が多い。外人に人好きのする點からいへば、支那人の方が遙かに上位にある。支那文化の特徴として、支那人は社交的方面にかけて頗る巧な術を發達させてゐる。假りにこの會話術を社交藝術と名づけておく。中華民國の人々や西洋人に比べると、日本人は概して無愛想で社交藝術を有してゐない。容易に情を顔に現さず言葉にも發しないと云ふ訓練を受けて來たため、外人の眼には腹黒く陰險な人種のやうに取られてゐる。日本の禮儀と歴史的の慣習、島國の根性とは、吾人を著しく非社交的な型にはめて、無愛想のものにしてつた。人を見れば泥棒と思へといった風に仕込まれて來た。従つて日本にはこれ

まで社會的な交際の機關とかいふものは餘り發達してゐない。人と對話する才能や語學の方面にかけては、殊にお話しにならぬ程度である。そのため一層社交藝術の發達が遅れて居る。支那は老大國であるだけに、その社會に人と成つて居るものは、先天的に最も早く社交藝術を理解し得して居る。實によく人に慣れたもので、機敏に人の氣を呑み込み機會を捉へて圓轉滑脱到らざるなく、殊に對話語學の道はこれ亦天下獨歩で、先天的に上達の速い素質を備へて居る觀がある。つまり日本人の最も短所とする所を、民國人は最も長所としてゐるのである。ここにその支那社交藝術の狀態が如何に現はれて居るかに就き、其の一斑を陳べて見よう。

春秋の末から戰國時代にかけて國內の大國小國の國際外交の重大視されてゐたことは、當時蘇秦張儀の活動振りによつても想像せられる通りであるが、支那の社會は獨り周末に限らず何時の時代にも必ず數多くの蘇張を生み出して居るのである。大なり小なり自ら蘇張となり、國家を二の次としても、先づ銘々自身自身のため蘇張の術を演じなければ生存が出來ぬ。國亡びて山河ありなど嘯いてゐる風流高士にしても、尙且社交藝術の要領だけはチャンと心得て居るのである。従つて支那の何れの方面を探つて考へて見ても、萬事が社交藝術の發達に都合のよいやうに出來

てゐるのである。

第一、食卓の様子を考へて見ても、常に必ず大きな食卓が室の中央に持ち出される。多人数の時はその卓子の數を増せば良いのである。一卓は客八人を標準とするが六七人でも良し、九人十人になつてもよろしい。卓上の眞中に次から次へと取りかへ引きかへ運ばれる料理は、青豆蝦仁、鶏糸湯、東坡肉、紅燒鯉、八寶飯、杏仁湯、何でもござれである。決して少々の飛入り客の増加によつて配膳部をまごつかせるやうな事はないのである。料理はその共同の皿を長い箸で周圍からつづくのであるから、甚だ氣樂である。日本式に盃を取りかはすことはしない代りに、共同の皿を銘々の箸でつづくのである。御馳走を眞中に多勢が近く差向ひになる。話をかはすにはこれが最も精練せられた社交方法である。

田舎で家庭の食事の様子を見ても、室内は成るだけ道路に面した方へ卓子を寄せて來て、行人を眺めながら口を動かしてゐる。奥の方は暗いから表の入口に近い方に場所を取つてゐるのでもあらうが、併し行人にこれを見よがしに遊山氣分で食事して居るのは面白い。自分が山東省袁州鄒縣に行く途中、田舎の飯屋で中食をとつた事がある。土地の風習に倣ひ道路へ大卓を持ち出させ

て、村郎野嬢環視の下に、幾皿か取替へた事を記憶してゐる。鹽谷温大人團長の下に、原田、今村、鳥山、高田の同人も共にこの孟子故里の大道卓子に就いたのであつた。かやうに支那の食事の開放的に行はれてゐる事は、社交藝術に何より強い基礎を與へてゐるものと思はれる。

又支那民族は文學的の趣味に富み口舌の才に長じ、辭令の巧なことは今更いふ迄もない。これだけの基礎のある上に、その談論を好む點に至つては恐らく世界隨一である。その廟堂に於いて市井、巷に於いて、殆ど常に耳も聳せん許り談論に淫せる狀を呈して居るのは、蓋し社交藝術の特色を赤裸々に發揮せるものであらう。二千年の昔豈それ辯を好まんやといひつつも、尙能く辯を振つて天下に遊説した孟子の事を想ひ、今日會館の壇上に頻々ゼスチュア交りに滔々懸河の辯を振ふ民國青年の元氣を思ふときは、支那は天下の辯論國てふ斷定を下さしめるのである。殊にその辯説に際して表情法の巧なる抑揚頓挫の排在よろしき、謂はば芝居的で音樂的である。この點は遠く他國の人々の及ばない所であると稱せられる。その他音樂芝居はもとより、手品、諧謔のことにかけて民衆の共鳴が強烈である事は言ふを俟たぬ。さうして支那各地都城には大小茶館があり、安徽會館とか河南會館とかいふやうな社交機關の設備迄が出來てゐる。斯様にして民國

人の社交藝術は、彌が上にも向上發達せしめられるやうな仕組になつてゐるのである。

支那人の社交藝術は天下一品で、恐らく有史以前から巧みなものであつたであらうと想像される位にその基づく所は古い。又その社會の力が益々その社交藝術を良く刺戟してゐる。人の感情を損はぬやうにして置いて、その間要領の良い事をうまくやつてしまふ。古人曰く、富者に交を求むるは貧に備へんがため也と。蓋しその社交の目的とする所は、自己の福利の増進を計るに在りとなし、其交を結ぶや必ず常に黄金中心主義から打算しようとしてゐるのである。前に擧げた張謂の「題長安主人壁」の七絶の詩などは、蓋し唐時代に於ける社交界の消息を歌つた最も諷刺的な大文字とも見られる。何れの國何れの時代も此の詩の心で萬事觀察する事が必要だが、特に支那の世態人情の裏面は先づこのやうなものと觀すれば宜しからう。而して其の交りを求めようとする心が富貴にあり、利達に在る事は見え透いてゐるのであるが、その心を巧みに装ひ包まうとする心理は又強烈なものである。

支那社交界に最も重大視されて居る所謂面子（體面）なるものもこれから發してゐる。體面論から時々大事の醸生せられるのもこのためである。されば對支交渉には面子を常に考慮する必要

がある。若し民國人はその面子を毀損せられるやうな時は熱狂して如何なる方法手段に出るかも判らぬ。人情はいづこの社會も同様であるが、特に民國人の知識階級はその社交上に面子を尊んで居る。嘗て四川湖南あたりの留學生を澤山賄つて居た東京神田の下宿で、一留學生が幾月分かの宿料を未拂のまま他へ轉じようとしてゐた時、主人が當人の机一脚をせめてもと押へて預つておいた。當人は沒有法子で仕方なく其の通りした。併し其後幾日かを經過して、最早忘れられたかと思ふ頃に、本人自身來訪し、不都合してゐた宿料の始末を片付け問題の机の一脚を引取つて歸つたといふが、これが常例であるとは、三崎町の下宿屋の主人の實話である。斯様に青年が異郷に來て面子を重んずる念の強いのは誠に喜ばしい事である。又民國人同士の間にもその面子の觀念の強い事は顯著なる事實である。併し面子に神經質であるだけに、それだけ又裏面のからくりには一層神經質であるのである。その邊の情緒は極めてデリケートな問題になる。公私各般の交渉折衝事の纏つて行くと否とは、その邊の匙加減次第であるといふ事は大いに心得ておくべき呼吸の一である。

又支那民族の社交振りを對外關係の方面から見ると、總體支那の人々はその相手の自國人たる

と外國人たるを問はず理の存しない所に於ても、強ひて理窟を付け堂々と正面より又背面より兎に角よく語り、よく主張し、よく辯論を戦はすのである。その思ふ所を人々の面前で何等忌憚なく吐き得る度胸と、又その態度とは支那獨得のものと觀ぜられる。時には生若い十二三歳の子供又は婦女子にしても、尙且つ随分口が達者で、はにかむことはないのみか、その言はんと欲する所は遠慮會釋なくどしどし主張する。されば若し民國の青年や臺灣の留學生に向つて、試みに『それ程政治の事などに頭を痛め議論を戦はしたりするよりも、勉強の方に向つたら』といふと、「日本でも維新の際は青年が立つた爲めに一大進展が出来た譯ではありませんか」と逆に來る。かやうに漢族は全く日常何事につけても口數が多く、黙つて居る事が少い。如何にもその點が歐米人にフランクに見える。又實際淡白に良く語るのである。殊に米人はそのフランクな點を愛する。米支兩國の性癖はこの點が良く相接近して居る。此れに反して日米間は此の點に甚だ距離があるやうに見える。主張宣傳の術に長じ、何物かを獲ずんば轉んでも只では起きない底の根強い性質を有する事は、支那社交藝術の根柢に認められる長所の一つである。多く語る事によつて話題が豊富になり、常識が養はれて來る。日本人の目からすれば實に下らない事のやうに思

はれる事でも能く之を美化して興味ある談柄とするのである。

次に又官吏の方面に就いて見るに、裏面の融通や例の慣用手段は因襲の久しき、實に公々然行はれてゐるものがあつて、官紀で縛られる事もなく平氣で駈引してゐるのである。面子を傷つけると思つたり權威を落とすと考へるやうなケチな者はゐない。支那官界の社交界の暢氣加減は又格別なものである。體面觀念の出發點が日本とは著しく違ふから、官吏が一方に手を出しても新聞で騒ぎ立てもせず、感したり、ゆすりに來たりするやうな事もない。官界も世間もその方面の觀念は全く免疫になつて居る。彈力性も夙に失つてゐるのである。斯様に支那各方面の人々は如何なる場合でも其の偶思所感を腹藏なく披瀝し、その先天的に養ひ來つた談論の慣習は、外人側にも十二分に發揮せられてゐる。ために意思の了解を得るやうな場合には、その社交藝術が多大な効果を現して來る。しかも同時にその裏面に包んだ目的を果す事に、最も執拗な態度を持してゐるのである。邦人が古い教育の型に囚はれて、沈黙を守るのを以て兎角偉いものやうに誤信し、しかも常に大事な目的を無言裡に逸して、臍を噛む類の事をしてゐて毫も怪しまないのは、如何にも社交上分別のない次第であると評せずには居れないのである。

娛樂風景

支那で行はるる娛樂の主なるものは芝居、活動、のぞき、茶番、寄せ、手品、輕業、針廻し、碁將棋と云つたところの大衆娛樂から燕樂、賭博、奏樂、小鳥遊び、琴書、高吟と云つた方面のものを含めかなりひろい範圍に亘つてゐる。又戶外蹴球水すべりの如きスポーツまでも取り入れられてゐることがある。芝居はシーミー(劇迷)と云はるるくらゐ芝居の道樂に耽つてゐるものもあるが、通は會食燕席などの了つたのち千兩役者名優の出演する頃を見計らひ出かくるものが多い。芝居には文劇があり、武劇があり、舊劇があり、新派がある。劇場として上海、杭州、北京あたりにはかなり堂々たるものを見る。從來支那芝居はその觀覽客が入口から入り、席にくつかぬをきめる前、暫く舞臺を立ち見してゐることがある。これは氣に入るか氣に入らないかを決定する爲めである。その席につき腰をおろしてしまへば、その舞臺の氣に入つたを證明するわけであるからそこへ切符、番付、捻手中、西瓜子など色々と持つて來る。もし席に腰をおろさなければやがてすぐ場内から出て行くものと見て之から料金をとることはしない。この習慣は

支那式であつて面白い。活動映畫にはアメリカものが多いが、時には支那から材料をとつたものもある。各大都市が何れも近代人の趣味に投じてゐることは日本の潮流とかはるところはない。のぞき繪は日本では近來姿を減するに至つたが支那は南北各地に之を見、今頃日清戰爭の繪を演じて、日本兵の慘酷ぶりを殊更ら大衆に見せるやうに仕組み某方面から多少の補助金を下げてもらつてゐるものすらある。中々抜からぬものがかうした娛樂のうちにも見出されるのである。寄せ茶番めいたものはいくらでも書館、打鼓、或は茶館の一部に見出され最も大衆の心に受けてゐる。アールホワン(二簧)シービ(西皮)などの雅曲を奏しながら堂内にあつまつてゐる村民たちをうなづかせ又笑はせてゐるのである。時には女史にしてその打鼓の齒切れよき唄ひぶりに、太鼓を打つ姿も艶に、天井の一方をテラとにらみ愛嬌たたへて演じ去り演じ出だすところ、さすがに手に入つたものと賞讃せらるべきものもある。茶館兼業のところでは自然出入の客も多く、かなり好況を呈してゐる。南京城内、夫子廟のあたりにはこれが多い。手品は大道の路上に又空地のあたりにその奇術の妙と、そのしやべる滑稽振りとして行人の足を止め、車座を作らせ、ひとり觀客をまはりにその得意の手品を演じてゐる。例へば地上何もなき處に風呂敷を一枚敷き扇で

風を起こし、之を飛ばせたりなどしながらその地面を幾度か改め改めしてゐるうちに此度は風呂敷のうちからむつくりと盛りあがつて来る物がある。扇で之を叩いて見ると硬さうな音がし、カンカンと響くのである。風呂敷を取りのけて見ると鐵の五徳が現れて来るのである。之を取り去り又おしやべりをしてゐる。こんどは風呂敷の下から何物が押しあげて来るのか、次第々々と高くなつて来る。氣合よろしく風呂敷を取りのけると一疋の蛇が出て来るのである。いくつにも舌の先きの分れてゐるのをベロベロ出してゐる生ま生ましい蛇なのである。之を見てあつけにとられた環堵の客は手んに五錢十錢を投げてゐる。かねが集まると又ニコニコして次の藝當に取りかかる。かくして路上の行人も油を賣り賣り半日をここに面白くくらせるのである。手品奇術は支那大衆が心から最も興味深く打ち込む趣味的のものであるから見方によつて民衆娛樂第一のものとも云ひ得る。次に輕業の方は武術とか大武術とか云はれてゐるくらゐに頗る荒々しく又ハラハラさせる事をする場合がある。見てゐて冷や冷やさせられる事がある。例へば一方の頭上に、他の一方が全身逆立ちしたまま頭と頭をくつ付け舞臺面をあらと歩きまはる藝までする。のみならずその頭上に逆立せる男が、その逆さの姿のままナイフとフォークを使ひ分けて

洋食を刺してたべたり、茶をコップから飲んだりなどする。胃袋まで逆にのぼつて這入つて行くやうに見らるるのだから頗る變なものである。かうした藝當をするには豫め二人とも舞臺の床の上にびたと臥し双方あたまを突き出し、釜しきの如きものをおいて頭と頭を接觸させてゐるのである。一方がその脚を壁面に沿うて攀ぢ上るやうにあげて行くに従ひ、他方のものはあたまをどこまでも放さないやうにする。次第にその壁面に接するやう進み寄り遂にピッタリ壁にひつ付くまで詰め寄る。そしてここに直立の姿勢をとり完全に一方のさかさになつてゐるものを、危ぶなく載つけてしまふのである。客は皆ハラハラして見てゐる。かうした武術は常に悲壯な練習と我慢強いねばり強さを條件にしてやらなくては出来ぬことである。一度落として怪我をさせたことがあつたさうであるが、ともかくも物凄いなことをやり遂げるものである。かやうな輕業は舞臺面で演ずることの出来るわざであるが又戶外でハラハラさせる危険なわざもかなり澤山ある。路上の大衆を呼び集めるにはかうした離れわざでなくては人が近寄つてくれない。しかし集つたものは必ずその見料として幾何かのかねを投げて行く。そこに娛樂道德に對するうるはしい良心がある。次に針廻はしは日本の空氣銃の類の遊びで一種の射倅心をそそるものであるが随分市井の巷

で子供が菓子類を買ひ求むるときにもかうした方法がとられてゐる。茶館の中では又圍碁將棋、十六むさしの漢楚兩軍が相攻むるところの場面が相當によく賑つてゐる。茶館遊びに限らずこれらの勝負事には胡弓、風琴、蛇皮線の音曲が娯樂として伴はれてゐる。賭博がその娯樂社交の方の方便に利用されてゐるは云ふまでもないことである。又中には古書を繙き茶館や車中で之を高吟したり、古書に合せて奏樂したり、玉笛の音の涼しげなるを吹いて月に吟じてゐたりするものもある。この邊の娯樂は文人墨家の心にして始めて能くすることの出来るものであるが支那人々はその燕席に之を取入れ又獨坐之をたしなむと云つた風懷を持つたものがある。意外にも毎日を娯樂そのものにて送つてゐる手合が多い。又拳闘、蹴球、氷すべりの類は運動の方であるけれども之を遊戯以上に娯樂化せるものが又少なくないのである。

支那人は民族性として、かうした娯樂各種にわたり道樂を持ち之を日常生活のうちに完全にとり入れ、趣味の小鳥を相手にしながら算盤を弾いてゐるものがあると云つた風である。火車のボーイが小鳥のせわをしながら乗客の面倒を見てゐる様子などもよく見る。娯樂そのものを朝夕自分の仕事に織り込んでゐるものは氣分の上にゆとりを持つ。そこまで來ると娯樂が本當の人生に

情緒を織込むものとなると云へるのである。

射 倅 心

射倅心に對する深き理解と、之に實際に没頭せんとする熱の強きこと支那人の如きは、世界に類例が少ないであらうと思ふ。その危ぶまない藝當、つな渡り式のことを平氣でやつてのけてゐるのは支那人である。不安を感じさうなものであるのにそれをいつも超越し洒洒落落の襟度でゐられる。そこに支那人の射倅心の本當に規模も大きく、又根強く行はるる理由の存することが見出されるのである。

支那は家庭の兒童にしても幼少の頃からして既に射倅本位にのみ育てられ、細民部落の子供が朝めしをたべに出けるにしても必ずや竹筒の中から籤を引き當ててお粥の一杯にありつく。若しよい籤を引當てると一錢で二三杯もたべらるるが運わるく空くぢでも引あてたときは一碗ももらへないで歸る。ここに子供心に既に拭ふべからざる射倅心を深刻にきざみつけられる。之に向かつて幼少の時代から之を教へるは不可とか何とか云ふのは日本での話である。支那では争つて

その知識が注入せられ又それで訓練せられてゐるといへる。或は路次の中で色々遊ぶ兒童たちを見ても路上の壁に向かつて一錢銅貨を投付けそのころげて上を向けばどうの裏を向けばどうのと、すべて射利的の事に大聲して争つてゐる。あわよくば一と儲けをしようとの考は誰れ人にもあり、親子骨肉の間でも之が重要點となつてゐる位である。これでどうして射倖心から免れ得らるるであらう。そのあらゆる賭博、あらゆる駈引、あらゆる談判交渉が射倖の目論まれてゐないものはないと云つてよろしい。競馬、彩票、競犬、その他あらゆる賭け事は支那の人々には三度の食事を止めてでもやらずに居れないところのものである。

南洋に於ける支那出身の華僑連中がその煙草、ゴム、コーヒ、砂糖、米の商賣などで巨萬の資産を作つたと云つても、その更に桁違ひの莫大なる資産を作りあげる方法はと云ふと射倖心による賭博である。二千萬弗の賭けをして一躍四千萬の富をなし、それが又トントン拍子で以つて、一躍八千萬弗になると云ふやうに絶大の射倖手段をとる。歐米人や日本人はとても氣持ちがわるくうす氣味がわるいと云ふが、支那の人は平氣で優に千萬や二千萬を賭けてゐる。自信がある爲めでもあらうが、しかしそれにしても危ぶない綱渡りのやうな事がよくも出来たものだと言はれ

てゐる。射倖心の大きいにあるものでなくては、華僑の肝ツ玉の大きいやり口は判らぬ又判るわけがない。あの物事に無頓着の如くにして而かも細かく勘定高くやつてゐる者にどうしてかかる危ぶない藝當が出来るものかと唯唯驚くの外ない。そこに射倖心の天才的な閃めきがある。それは支那人にして始めてよくなし得ることである。マカオ（澳門）に又シヤム、盤谷にと南方には隨處にかうした博奕所がいくらでも見出される。警察があればどやかましく云つて見張つてゐてさへその目をぬすみ、本島人たちはすぐに博奕の事に取りかかる。之をやめては生きてゐられぬ。此の世にゐる以上やめられないのはこの射倖の事であると言つてもよろしいのである。

賭博三昧

支那は賭博に輝き、住民は賭博なくしては夜も日も明けぬ氣持を有してゐる。恐らく此の世に生れて賭博を禁ぜらるる位なら死んだ方がましだ位に考へてゐる者もあるであらう。これは阿片以上に人心に深く又熱烈に食ひ入つてゐる心情である。法律で禁じたぐらゐで民家の秘密室の奥でこれが止まるやうな生まやさしい性質のものとは全く品がちがふ。

日本のやうに法律さへ發布しておいたら何でも官憲の力で抑へて行けるものやうに上つ面から考へるやうな習慣になつてゐる者は、之を賭博の罪に問へばすぐ止まるにきまつてゐると多寡を括つてゐる。ところが支那は萬事に超越せる國柄の事として、既にその監督の任にある役人自身が大掛かりの賭博を打ち、一舉にして巨萬の富を獲得するに腐心をしてゐると云ふところ。之を役人と見てゐるのが間違ひ、實は唯役人の恰好に見える制服をつけてゐる大陸人なのである。服さへ脱いでしまへば人間並みの賭博心の權化となるわけである。君だつてそれで懐が都合よくなればホクホクものではないかね！と云つてボンと肩でも一つ叩かれるれば誰れだつて反對は出来ぬ筈。御互の日本人だつてあの通り上海の競馬のときは銀行と云ふ銀行、會社と云ふ會社が總休みになつて馬券で騒ぎ立ててゐる。曰くこんどの馬券で二十四萬弗を當てたらどうするなんて隨處に勤め人どもは打はしやいでゐる。こんなケチな會社なんかにくづくづしてゐてたまるかなど、偉いメートルをあげる先生もゐる。ここに人情の機微がある。言葉にこそ出さね、その人の細君の心のうちだつて同じ氣持である。羽左衛門丈がその爲め毎年上海行を續けてゐたのもその心情が讀める。身の都合さへつけばどの日本人だつて皆行つて見たい氣持はあらう。あるからこ

そ在上海の友人に馬券の買ひ取りだけでも依頼し當てたらすぐ打電しろなんて前景氣よろしく、ニコニコ顔でゐる日本人もある。

支那は賭博又は賭博に類したものを罪惡視してはゐない。親子兄弟の間すらこれに一生懸命となり、勿論金をかけて夜あかしまでやつてゐる。支那の火車に乗つて見ても食堂のあと片付けが濟みさへすればボーイ車掌に客まで打混じて賭博三昧に耽つてゐる。客は一と儲けて汽車賃ぐらゐは彈き出さうと云ふ魂膽であることが顔に見えてゐる。又その信念で勢づいてもゐる。船に乗つて見ても支那ボーイはその爲めにテーブルを乗客に提供してゐる實況を見る。

臺灣あたりでも内地人の役人が踏込むだらうと、戸外に見張りをあちこちにつけよろしくやつてゐる。踏み込めばしらぬ態度に涼しい顔をきめ込むのである。姿を消せば又すぐやり始める。丸で飯の上の蠅以上で糠に釘とはこの事だと評せられる。支那の本場と來たら正月は勿論、佳節佳節はそれに没頭するのが何よりの楽しみ、別段に祭りの神様が喜んでゐらつしやるわけでも何でもない。役人であらうが、商人であらうが、學校の先生であらうが、巡警であらうが之にイヤな顔をするものは一人もゐない。そこに大支那の歡樂郷があり、支那百年の大計もある。いくら

國家が財政難に陥らうが、月給不渡りが始まらうが、いくら獨立政權があちこちに筍見たやうに殖えようが構はない。賭博にかけては眼中何物もない。賭博は全人生だ全宇宙だと云つた絶對の趣味の世界と見てゐる。だから法律なんかはずつと眼下に見くだされてゐる。否全然無視して歡樂郷の妨げをなすものだらゝにしか見て居らぬ。

今日の世界は、歐米かぶれの賭博否認の文明を楯にとり人間味を抑へつけてゐる。文明國人とは、法律に萬能の力を認めてそれで體裁ばかり作つてゐる輩だと支那の人は云つてゐる。今の世界文明は日本もその他の國も妙にかた苦ししいハイカラな事を無理に押し立て、その窮窟な文明に酔うてむやみに支那をけなしつけ、だらしない國などと侮蔑してゐる。而かも超然として所謂世界文明を睥睨してゐるかの李白、白樂天や康熙、乾隆を出した人情美に富んだ支那文明と云ふものを認識してをらぬと民國人は云つてゐる。否之が存在を仰ぎ見るだけの明もないのだ。明もないし又之を味ふだけの裕りもなく、素養も持つてゐないやうだ。リットン卿が一寸東洋へ小便しに來たからとて本當の滿洲局面の實相の掴み得なかつた一事を以つて見ても判る通り大東洋の過去の深み、いきさつ、歴史、又その妙味のあるところなどは容易に掴めるものではない。

しかり、確かに白人文明又白人系文明の外に廣い別天地の儼たる存在を持つてゐることは事實である。若しも世が世であつたならば、その心を以て見てやりたい位の氣持もしてゐる。しかしその氣持のあることさへ、今の世には又之に最負でもし賭博國を禮讃してゐる變り種などとうしろ指をさされるものらしい。今日では翰墨の心を以て之を見てやるだけのゆとりと度量が少くとも日本人にはあつてほしいものである。

麻雀迷

天下の遊戯勝負を談ずるもので麻雀を知らぬものはなく、今や麻雀は歐米人となく日本人となくひろく支那以外の國にまでも社交に家庭にかなり深く食ひ込んで來た。麻雀の遊びは、マーヂヤンと發音する丈でも快感を覺えると云はるのであるが、さて此の遊びはつまりは全く一つの體力競争であるべきことをここに一言しておきたいのである。

天下の遊びで麻雀の遊びくらゐ複雑で、しかも淡泊に遊べてそして趣味深く行かれるものは少ない。ホンパウ紅寶の如き、碁將棋の如きも麻雀に比べたら何のことはない。されば麻雀の人

の興味を惹付ける魅力の深刻さ加減と云つたら非常なものがある。凡そ物には一得一失あるは免れぬ譯である。麻雀の如きは之を利用し社交に游戲に計算力の練習にすべて文化的遊びの最も支那式なるものとして推奨するに價するものがある。ところがもしも麻雀に耽溺し之に淫してしまふと云ふと誠に困つたもので、その結果どれ位弊害を惹起するに至るか測り知れぬものがあるのである。凡そ何事にも夫々の程度なるものがあり、その程度を越すときは善も悪と同じ結果になることがある。興に乗じ油の乗つて来たときは、その度を多少過してやつてもさまで體力に影響することはあるまいとは思れる。年少のものは老人よりもその害毒を受くることの少ないのは固よりである。しかし麻雀の遊びの常として、晝間より開始したるが夜半月三更乃至は曉天の鶏鳴を聞き霜を踏んで歸宅すると云ふは尙早い方である。どうかすると午後二三時より始めて翌朝八時九時に至つて割愛の思ひをして一時中止と云ふことにすることもある。しかし實は何れも尙もつと繼續してやりたいと云つた考であるものが多いのである。されば麻雀の道はその道に淫するときは、どうしてもマーチャンミイ(雀麻迷)となつてしまふのである。色を好む方はソウミイ色迷と云ひ芝居狂ひの方でシイミイ戲迷と云ふのと同じわけで、麻雀迷と云ふものが

あるが全くその程度まで進むのが當然である。別段悪い事ではないのであるから麻雀迷になつたからと云つて恥づるには及ばぬ。行くならそこまで徹底するの勇氣がなくてはいかぬ。

ただ麻雀迷に希ふところは、それに耽溺する者に連日徹宵で打かかる丈の體力の持合せがあるかどうかと云ふ點である。かなり深刻に頭を使ふから老年になつて徹夜し之に打込むときは麻雀そのものよりも睡眠不足で腦をいためる。からだに疲勞を感じること云ふまでもない事である。暗算で頭を痛める方は何でもない。その方は仕舞ひに慣れて來ると殆んど勞せずして計算くらの事は出来るが徹宵で連日打かかると云ふことは身體が云ふことを利かなくなる。そこである。麻雀の妙處は巧拙によるよりも體力の問題であると云ふべきである。その點に理解なくして之に耽溺するものは遂には頭を却つて害ふのである。老年になり若手と同じ元氣を出してやつてゐてもその徹宵の報いが翌朝になつて現はれる。觀面に來る。それが恐ろしいのである。

麻雀ほど人と人との間の交りを圓滿にし、たとひ物を賭けて勝ち負け損得があつても、それが爲め立腹したり人を恨んだりすることなく、一種の天命觀、宿命論を擔き出すまでもなく全く諦らむると云ふ習慣を養はせる上に効果があり、又その目的に深刻に役立つものはないのである。

しかし又中には人に贈賄せんが爲めに自らわざと故意に大金を賭けそしてそのまま、負けておいて相手を喜ばせようとする方法をとることがある。これは昔しから最も多く行はるる巧みなる方法で處世術として最も妙なるものと評されてゐる。まさか麻雀に負けた事實をいきなりすぐ悪評して之を贈賄視するものもあるまいから、官民双方の組合つた麻雀振りにはどうかするとかかる魂膽の潜伏してゐるもののあるを見聞することがある。支那では實にありさうなことである。

麻雀の支那の社會に深く食ひ入つてゐることは今更喋々を俟たないのであるが又これ位重寶がられてゐる遊びはない。もとを訊せば浙江省東錢湖の一漁村に起つた何でもない遊であつたのだらうであるが、二三百年の星霜をけみする間に世界的な普及力を有するに至つたものである。世人は阿片やモヒで以つて國民の體力をそがれてゐることを云つてもこの麻雀でと云ふことを云ふものがあまりない。勿論いかに徹宵やつて翌朝十一時までも正午までも床に入つてゐても、支那の天下は存外呑氣に出來てゐるし又午前中は用が捗らぬにきまつてゐるから大した支障も起らない。北京あたりでは午前中は殊に寒中の午前中は殆んど何も出來ないことになつてゐる。それが原因となつてその前夜麻雀で徹宵をしてゐる譯でもあるまいが、しかし隠くすまでもなく大部分冬の夜寒の時間は麻雀でくらしてゐるやうなものが随分多いのである。

麻雀の徳を頌するものはどこ迄も又その美點を數へ立つべく之を理解せざるものなどの輕々しく論じ去ることの出來ぬものがある。麻雀の支那社交界に於ける影響の大なる丈それだけそこに摩訶不可思議の力を有することは争はれぬ。麻雀の一方法を以つてすれば支那の社會、國家、家庭すべての方面を悉く解き去ることの出來るほどの大なる關鍵を有してゐることをここに確言して憚らぬのである。ただそれだけ恐ろしい魅力を有してゐるが爲め、之には非凡な體力を以つて臨むと云ふことにしなかつたならば身體そのものを破壊するの恐れのあることも忠言しておきたいと思ふのである。無論ただ單なる娛樂の一方法として徒然を慰むるの程度であるならば取り立てて云ふの必要もないのである。ここには天下の有爲の士が、そのあまり是に熱中するがために頭腦をいため少なくともその翌日あたまたまがぼんやりして事務がとれない、何だか變だとかぼしてゐるものの頻繁に耳に入るものがあるから、ここに老婆心までに思つたままを述べておく丈のことである。要は麻雀迷の極意は根本に體力の問題のみと云ふ點にあるのであるからその積もりでやられんことを希ふ次第である。

手話

手話とは、手または手の指を用ひて言葉の代りとなし殊更發音を避けて思想感情を表象せんとするときに用ひらるゝ方法である。支那社會の如き隱微の間に際どい感じを表はす必要の多いところでは手話によることが便利であり、又隱語によるよりも更に一層その目的に適切なることがあるのである。

その第三者に聞かせてならぬ相談ごと、取極めごとなどはこの手話によるを最も妙となし、随分各社會各地方ともによく行はれてゐる。そのやり方はその屬する社會や又地方により異なるばかりでなく又男女間に於いてもおのづから相違せものがある。支那民情の現れとしてかなり手話を應用してその相手かたの心を汲むの慣習が見られる。例へば錢勘定の場合などに掛引をして數の上下を争はんとするとき一々之を數で明白に發音するのでは工合の悪い事がある。そのとき五弗と云ふを手で示し、握りこぶしの恰好から母指のみを開き立て、六弗のときは更に之に子指を加へて母指と子指とで以つて六の數を示すと云つたやうな事をする。その母指と子指との形を

十分に緊張させ一直線上になるやう伸ばしたときは、これが阿片用のキセルの意味になる。ヤードピエン（鴉片）と云ふ代りにこの指の恰好を作り手話を試むるが便法とされてゐる。

また數の九つを示し、九弗とか云ふ如き場合には人さしゆびを折曲げ日本でいふ鍵の形を作る。日本では手くせの悪い人を指すときなど試むる形であるがそれが支那では九となる。十弗のものを九弗にせよなど云ふときすぐこの指を折り曲げた鍵の形を作るのである。又五つの數には五本指を全部そろへて手のひらを示してもよいのであるが、十のときはその五本そろへた手の甲を先づ出し次いで又すぐその手のひらを裏返して出す、これで五と五で十と云ふことになる。十弗のしるしのとき之を用ひることが多い。又三の數のときには母指と人さし指と中指の三本を出すものが多いが、廣東の女は子指と薬ゆびと中指の三本を出す。母指を出すことはなるべく差しひかへんとする心持ちが見える。蘇州の田舎では他の地方の指の使ひ方とちがつた方法がとられ、例へば十の數を示すには左右の兩手をつかひ、左右双方の人さし指を出して之を十の字に交叉させ人の前に出すやうな恰好をする。これが十弗と云つた語の代りをなす手話である。或は又かりに女陰の形を婉曲に人にほのめかさうとするには、日本流儀の形ではさつぱり相手に意味が通じな

い。あちらでは薬ゆびを曲げその指頭をば、母指と人さし指と中指の三本を絞つた形の中央へ持つて行つて、少しばかり覗かせるやうにするのである。或は人さしゆびを中指の下へかさね伸ばしそしてその中間へ薬ゆびのあたまを少し入れて覗かせる形をつくることもある。何れにしてもそれはかなり寫實的の恰好をとるのであつて、一目その邊の聯想を容易ならしむるのである。これらは支那は全國的にどこにも通じてゐる符牒らしく見える。必要の多いだけそれだけ機微に觸れた適切な手話がおのづから發達して來るものと見える。

阿片のキセルを言ふにも矢張り人の前では憚る處があつてヤービエンと云つたり、又隱語のターエン（大煙）などと發音したりするよりも、その指の恰好で以て意味を通ずるやうにした方が第一相手かたの面子をそこなはない譯にもなる。殊に紳士としては成るだけ阿片の事はいくらか飲みたくても表面立つて口に出すことを嫌ふ。船中客室のボーイから船客に向つて「一つ阿片の仕度でもいたしませうか」と持ちかけて見たいやうなときは、その言葉の代りに例の指で以て恰好を作つてさへ見せるなら直ぐ諾否の返事が得られる。もしも不要と云ふときには手の恰好は卓の下の方に左手を引き込み軽く横に振ればよいのである。香煙や酒をすゝめられるときでも不調法

もので飲めませぬとこととはるときは、ニコツと柔らかい挨拶顔を見せその手を下の方でかく振る。これがしほらしい斷りかたとなつてゐる。言葉でぶしつけにブヤウ（不要）など云ひかへすのはあまりにきつくあたる嫌ひがある。

又母指と人さし指とを用ひて圓形の恰好をなすときは、それが日本では金を意味したことになる。西洋では之が殊に甚だ失禮な意味になり貴婦人の前あたりではなすべからざる形になるのであるが、支那ではこれは何の意味をもなさぬ。たゞ近來日本人に親しみのある人々の間のみ、之が金の義にとられることになつたやうである。又單に途上人の前に人さしゆびを一本出し之を一寸動かし目くばせをすればそれは食事どこへか行かうと云ふ事になる。昔から食指うごくなどといふのはこれから出てゐるものらしい。會合などの解散したあと門前で友人にその食指を動かされたときは、二人でどこへかたべに行かうと云ふことになる。關係のない第三者は勿論之にはあづからないわけであるから、いかにもこれは婉曲であつてさしさわりのない手話法と見られてゐる。

その外手話ではないが喧嘩口論のとき、相手同士がよく肩を怒らせたり、ピクつかせたりし今

にも手を出しさうな恰好をして氣勢を示すことがある。支那の喧嘩はその字面の上にも口偏のついでゐる通り口ばかりやかましく云ふのである。手や足は出さぬ。その他又人の話を感心して聞くとき首をゆるく大きく圓を描くやうに動かし、腕をこまぬき眺めてゐるものがある。その時はその相手の話を十分に納得した氣持を示すことになる。これは單にうなづいてゐるよりも、一層意味が深く又強いのである。

人に對して最も惡感を催さしめ、侮辱のしるしをして見せる手話法には龜の恰好をして見せるやり方がある。ワンプ（忘ハ）と俗に云ひ龜の姿を象るもので、このワンプを表示するには先づ左手をさし伸べ中指を十分に伸ばし他の四指を動かすことにより、龜が四肢を動かして歩くときの恰好をなし之を聯想せしめるのである。この恰好を相手に見せつけるときには日本の「コンチクショウ」と云はれた以上に立腹させ、相手をひどく侮辱したことになる。その侮辱法を最も絶頂に達した表示法に高めて行くにはその手を自分の頭上に高くあげこれ見よがしに龜の足を動かし見せつけるのである。相手の憤慨ぶりはそのとき大變なことになる局面がどう進展して來るかわからぬと云ふ處に來る。さればこれは紳士の用ゆべき手話でなく、苦力とか、ならずものとか、

べらんめえ連のなす方法であると見られてゐる。ここにはそれらの社會の一手話として紹介しておくのである。又最も危險な方面のものとしては、便衣隊のことがある。路上便衣隊が支那服の寛衣をまとひそのたつぷりした袖の中に手を入れ拱いてゐるのを見る。その拱手してゐるのはややもするとピストルをかくして平靜を装うてゐることが看破せられる。夕暮れ城外畑の暗の中あたりからかうした姿をしたものの現はれたとき注意してゐないと一發來ることがあるなど感かされることがある。手の話、手の恰好もそのときどきの様子で色々の意味が感知せられるが暗黙の間にかうした機微の表示法はひと通り心得ておくべきである。

迷信

支那は俗間には道教や佛教の信者として寺詣をする善男善女が多い。その本尊祭壇の前に立ち供物をそなへ、三跪九拜をくり返すことしばし、やがて神前のおみ籤を引く。大吉、吉、凶、大凶などの黄符の木版刷りを頂き、之による家運の判断、病人の卜占その他身の上百般のことがきめてもらへる。支那の各地に見る神佛詣では多くはこれらの迷信に基いたもので、中には神前

に焚くユワンバオ（銀紙で折りたたまれた馬蹄銀がたの供物）の灰をあつめて持ち帰り之を薬に煎じ重病患者にのませると云つた迷信を見ることさへある。江南サコンセ（石公山）観音廟の石佛に参詣するものは皆この灰を持ち歸るを無上の御利益と感じてゐる。無智の老農、老嫗たちは單にその神佛に對する敬虔の念に燃ゆるのみであつて、その灰がどんな作用をなすかについては固より確かめてゐるわけでない。善男善女たちは念佛唱へつつ之をかき集め手向けの蠟燭を最初包んで來た紙片に收め恭々しく持つて歸るのを見る。

又南支の片田舎では農家に重病患者が今も臨終といふとき、家の男たち二三人をしてささやかな神輿をかつがせ田圃の畦をあるかせる。何の經か念佛知らぬが口々に唱へつつ男たちは一目散にかついで行く。或地點まで行きふたりの足なみ、念佛、その氣合などの合致した刹那神のお告げによつて俄然その神輿を長柄のまま傍の溝の中に投げ込むのである。するとその長柄のところに當たつて生えてゐた青草に目をつける。それがいかなる種類の草であらうとお構ひなく早速根こそぎ引つこ抜いて持ち歸る。曰くこは神託によつて授かつた靈藥であるにより、之を煎じてのませるなら必ず病人は直るとする。若しそれまでしても一命を取り止め得ない時は、それまで

で諦らむるの外ないとするのである。道教の方でこれを青草のまじなひ法と唱へて草根木皮療法と反對に立つ療法と見られてゐる。果して之で直ればよし、直らなくとも人事をつくして止むと云つたメイファーツ没法子の天命論に支配されてゐるわけである。がしかし之によつてその迷信のいかに深く人心に食ひ入つてゐるかがわかる。又滿洲は撫順の市中街上に老樹の株がある。炭坑の苦力土民たちは之を道祖神と見て之に幾多の繪馬式の小額を奉納して飾つてゐる。それに書かれた文字は何れも「有需必應」或は「有求必應」の四文字である。小さき祭壇まで備へられ之に禮拜する女たちを見る。土地柄坑内生活の苦痛は異常な感傷も多かるべくかうした路傍の天然老樹が一種有力な迷信の對象物となつてゐるのも無理からぬことである。

その外東嶽廟、城隍廟、娘娘廟、老君堂、土地公、關帝廟、清道觀、龍王廟などといふ多くの神位本尊の祭られた寺が到る處にある。何れも香華の絶えまなく門前門市をなし早朝から賑つてゐるものが多い。片田舎ではかうした迷信の神廟がすべてその邊りの公園であり、娛樂場であり、俱樂部であり、書館（寄席に當る）であると云つた風に見られてゐる。中にも道教の寺には北京の白雲觀の如き又蘇州の玄妙觀の如き参詣人が隨時之に集まり地方民の繁榮を來たしてゐる

ほどのものもある。白雲觀の正月十九日の祭日には幾十萬といふ北支一帶の乞食と云ふ乞食が之に集まり何れも一人残らず喜捨が受けらるると云ふ利益に浴してゐる。これは必ずしも慈善と云ふのではなく、その乞食姿をしてゐるものうちにいかなる神仙が姿を變へて中にまぎれ込んでゐるかも知れないといふ考もひろく廣がつてゐる。それが爲め一般土民は大變なお祭り氣分ですわぎ白雲觀に參詣し金を恵み與へるのである。一般土民の間にはもしその乞食をば乞食として見くぶり之に金借しみでもしたりすると、後でどんな祟りが生じ家運を傾けさせらるるか判らぬと云ふ迷信がある。乞食どもの方ではその弱點につけ込んで集り來るわけでもあるまいが事實さうした機微の間に人心を支配してゐる何ものかがあるやうに思はれる。

尙神佛に對する土民たちの供物のことであるが、一般水村山廓の住民たちはその神佛の心を以つて人間なみの俗な考を抱くものとしてその供物の少なきときは神佛の方でも應報を香ばしからぬ程度に出ししふるであらう。しかし十分に供物を齎發しておくならば吉祥至らざるなく、十分の果報は當然あることであらうと云つた風に見てゐる。迷信もここまで來ると神佛を以て人間同様に見てゐることがわかつて愛想もつきるのである。己れの考から神の意中を探りきめてゐる處

に文化の程度が讀める。かくしてその神前祭壇に物を供へんとて、家のかみさん老母たち打つれそれぞれ提籠に納めた雞、家鴨、豚など山海の珍味を持參してそなへてゐる。これは固より神に供へ奉るのであつて、僧侶や、寺乞食に取らるることは望ましくないとしてゐる。それ故その連中は供物を置いた前に三跪九拜し圓座の上に起つたりすわつたりする。又紅蠟を點じたり線香を立てたり爆竹をあげたりして念佛を唱へ、色々と心の限りを盡すのである。その間そこへ寺の男だの乞食だのが集まつて來て見てゐるが、神さん連はその祈願念佛のことが濟んだら最後早速それらの雞、家鴨、豚などの山珍海味は一と皿も残して置かうとはせず持つて來た提籠の中に納め持つて歸つてしまふ。寺の男ども互に目と目を見合はしあいた口が塞がらぬと言つた形である。實に滑稽やら現金やらあきれたものである。これでは神様に對してもホンの御馳走の香を嗅がせたとに過ぎぬ。周圍に待つてゐた人間にこりやくを與へることは少しもしない。却つて罪になると思はるる位である。

どうせ土民たちの迷信にしたつて、享樂生活と歡樂氣分に浸り不老長生と富貴萬年を希ふといふ外に何も考へてゐるわけでないのであるから、かうした祈願をかけに行く時に自分の持ち物だ

けは損をしないやうに減らさないやうにしたいのだ。いくらたくさん御馳走を神前にそなへても人に施すことをしないのだと云ふ見えすいた心境が判つきり漲つてゐる。美しい罪なき迷信のうらには、かうした現実的な氣持がかなり見えてゐる。そこに支那式の奇異な迷信の雰圍氣が看破せられるのである。

秘 藥

支那の秘藥中の雄は、毒藥と不老長生藥とであらう。鳩毒が雉に似た鳩と云ふ鳥の羽から得らるる毒であることは人の知るところ、この羽の色は茶褐色を呈し、之を石のそばに持つて來ると石がとけてしまふと云はれてゐる。その羽は軸にあたる心棒の處に、最も毒氣が多いと云はれてゐる。又毒と云ふ文字は艸(毒草)と毒の字とから成つてゐるがその艸が如何なる植物であるかはよく判らぬ。けれどもストリキネの類のものや、毒茸はかなり支那各地に見出される。がその形は概して小さくその色は白い。時折り支那田舎の税關などで鳩毒が差押へられたのを税關吏から見せらるるゝがある。頗る猛烈なものであるから之で暗殺計畫をするのはやさしいことであ

る。食事に毒を盛るときにはかうした植物性のものが用ひられ、料理番又は饅頭屋の老爺などどぐるになつて仕事がされてゐるものらしい。砒素や猫いらすの類の礦物質のものを用ひるよりか支那では動植物質のものの方が多く使用せられてゐるやうに思はれる。

不老長生の事は支那富豪によつて最も熱心に研究せられてゐるが、それと同時に精力増進劑のことに又多大の關心を持つてゐる。支那料理の上にこの補身のことを應用せられてゐるのは云ふを俟たぬが、廣東の蛇の膽を錠劑となしたものと、又之を煎餅に作つたものと、或は虎骨に生薑を加へて煎餅となしたものと、或は鹿の袋角をうすく輪切りにしたもの(之を血片と云ふ)とか様々のものがある。血片は上製のものとなると一匁三百兩もする高價のものもあつて、支那最高の秘藥として信ぜられてゐる。それから酒類の方には上述の虎や蛇を用ひたものが數多く見出される。即ち三蛇膽酒、四蛇膽酒、虎骨木瓜酒などがあり、アルコールの外に補身劑が多量に含有せられてゐると云はれてゐる。房中劑としては青トカゲの尾を入れてかもした酒がある。男子は雄を女子は雌を用ふと云はれてゐる。その尾の上方へ反り加減になつてゐるものを用ひると効果が多いと云はれてゐる。支那では之をハブカイ(蛤蚧酒)と云ひ最も強烈なるエロ酒

と呼ばれてゐる。青年期にあるもの之を用ふれば鼻血を催し、又のぼせて目やにを出すに至ると戒しめられてゐる。その外茯苓、何首烏、チンコウ（青果）などの痢尿用のものも色々あるがこれらは秘薬と銘を打つほどのものでもない。

又犀角の盃と云ふのが古くから用ひられ今も尙古玩店あたりに之をよく見る。毒酒など盛られたとき犀角で飲むならばその毒消しの效が顯著であると云はれてゐる。支那では高貴の人はその毒をもられたとき之を知るために、銀冠のついた象牙の箸を携帯する必要があると云はれてゐる。南とか遠方の秘郷から取りよせたものでなくともよろしいのである。

人参は隨處に朝鮮からも吉林からも紅白の兩種をまた産出する。老人の爲めに又冷え性の人の爲めに喜ばれてゐるものである。元來煎薬であるが近來は錠劑になつたものもある。ともかく不老長生薬はイモリ、トカゲ、ヘビ、ゲンゴロウ、虎などの動物が主薬となつてゐるやうであるが時には迷信的に棗の秘法と云ふが貴ばれてゐることは一奇である。又桃實の神話があり又杏の傳説もある。杏林と云へる語が古くから醫者を示す語となつてゐる位でかうした果物の核がかな

りその方面では有力なものと思はれてゐる。

風土病

支那の風土病には珍らしい病氣の症状を見せてゐるものがある。長江筋で青い野菜をなまでたべるとややもすると長江赤痢にかかる。いつまでも赤痢的症狀がつづき容易にはかばかしく行かぬ。これは白菜その他の菜ツバを無頓着に平げる人に多いと云はれてゐる。しかしこれは外人に多く見る病氣で土着の老農あたりは慣れてゐるせりでもあるかあまり見ないやうである。

土民に見る最も多い風土病は例の移動性を持つてゐる瘤の皮膚面に出来る病氣である。こはからだの如何なる場所にでもところ嫌はず出来る。顔に、頸部に、腕に、足に、陰部に本當に處を選ばない。始めはポツコリ小さく盛りあがるのであるが漸次増大して時には二三寸から四五寸に達するものもある。支那の農夫が五寸ばかりの瘤を頸部につくり本當の頸はよこに傾けながら平氣で天秤棒かつぎ野菜などマーケットに運んでゐるのを見れば、あまり痛みや痒みはないものらしい。普通それは一二寸のものであるが脚部、太股から足の先に移つたり、腕から又手先に移つ

たり、ひたへから眼蓋の方へ移動したりなどする。この病症に不思議なことはその生じたところの位置が移つて、尖端の處まで行くといふと自然に消滅することこれである。例へば額から眼蓋に來ると行きどころがなくなるものと見えて自然に消える。腕から手に來、指に達すると又亡くなる。脚部も亦然りである。陰部あたりにしてもさう云ふ症状をとるものらしい。婦人などには婦人病でなくこの病の勃發することがある。日本人で中部支那に在留するものに時折りこの病に侵される者がある。概してこの病は湖南湖北江西安徽と云つた土地に殊に男子に多く之を見る。別段患者自身にしても田舎の事とて之を切開したり治療したりしないでそのままに放任してゐるものが普通である。

それから稀には人間の皮膚が貝殻同様にカサカサした肌合ひを見せるものがある。所謂貝殻人間で、見せ物にされてゐるものがあるので、その全身を殘らず見る機會を得たのである。朝鮮から南支にかけて時折りかうしたものが見られる。これは風土病でなく外の病から來た症状かも知れぬがともかく不思議な人間である。これ亦痒痒を感じることもなく平氣でゐるものらしい。これは皮膚が硬い苔状をして幾重にも重なつてゐるものであるから、さわると麥藁細工に觸れた

よりも一層硬い氣持がする。恐らく皮膚全體が爪に化し爪の肌を示してゐるものと察せられる。その他畸形のものとしては手の指の六本あるものの相當なることである。牛に五脚牛(犁)のものを北京の動物園で見たがこれは却つて珍とするに足りる。六本指の人はさまざま珍としないのである。江南地方でよく見かけるが別段當人はきまり悪くも思つてゐないらしく、不斷社交界にもよく顔を出し硯の墨を磨るときにも六本指のままをやつてゐる。指は母指が二本あるので餘分のものの方がやや小形を示してゐる。かうしたものは風土の加減で出來たものもあるまいが、之を切り落とさうとしない處は身體髮膚之を父母に受く、之を傷くるは不孝の始めなりと云ふ教へが十分隅々に徹底してゐる爲めであるとも解せらるるが、實際は、金もかかると云ふ處からそのままに打ちやつておくものが多いのである。

支那旅社

支那で支那宿のことは客棧(北方ではコツアン南方ではカザン)と言ひ一に旅社又は旅館とも云つてゐる。或はホテルをもじつたわけでもあるまいがフアンテン(飯店)と云ふのもある。中

央飯店、北京飯店、長安飯店など云ふがこれである。旅館寒燈獨り眠らずなどと唐詩にも見えてゐるくらいであるから、旅館の語もかなり古くから用ひならされてゐる。

支那の住まひは日本風といふよりも西洋風に近い。居室に寢臺、椅子、卓几と云ふ風で自然支那宿の様子は家庭の居室延長の觀がある。大都城に見る近代式の宿屋には洋風をつくりのハイカラな設備があり、部屋の天井、四壁、窓掛から浴室、ヴェランダ、庭園と支那式の感じを少しも現はしてゐないものもある。僅にその賣店に支那古玩工藝品など陳列してゐるに過ぎぬ。しかしくから西洋風に出來てゐても、支配人以下の従業員は矢張り支那人であるから支那の氣分は多分にあると云へる。ところが日本人や外人は本來支那視察を目的任務としてゐる旅行であつても却つて支那氣分の乏しい洋風旅館を選ぶの傾がある。支那宿は氣持ち悪しく又衛生的でないといふのがその理由となつてゐる。否支那街が危険だとか、宿の界限が薄氣味わるくとか云ふ。然し支那宿にかかる不安の眼を以つて見るのは認識を誤つてゐる。

第一支那宿は支那民情風俗を窺ふものの必ず宿るべき處でありそしてその雰圍氣を味ふべき處である。洋風旅館では本當の支那民情は汲みとれぬ。支那宿は迎賓旅館とか、悅來棧とか、惠中

とか、老公太とかいふ支那特有の名の付いた看板扁額を掲げ、門には仕官行臺、學生歡迎といったやうな迎賓的美辭が對聯にして吊されてゐるといつた風である。門を這入ると中庭を囲いて周圍に客室、厨司、賬房（帳場）ボーイの部屋などがづらりと並んでゐる。大都城には二階三階又それ以上の高層のものがある。大規模のものとなると客用の應接室、大小の客廳の備へがあり、正面の大姿見の兩側には遠來の客の心を喜ばせる名句の聯が掲げられ、花瓶置物の飾り、鐵畫の四君子などの吊るされてゐるものがある。帳場の壁には大きな掲示板があつて止宿客のすべての人名、出身地などが列記されてゐる。

支那宿の勘定は室の大小、位置、方角、設備の如何によりてきまらないが、大體は室料本位である。一室いくらで定められてある爲め二臺の寢臺のある室に兩人の客が泊ることあるも料金は同じことである。たまに例外もあるが、室本位であるから經濟である。食事はつかないのが原則であり、却つて食事を要求されると迷惑がつてゐる宿が多い。旅客には又これ位便利なことはない。片田舎の客棧は一室二三十錢どまりであるが都城では五六十錢から二三元、又七八元、上海あたりの大東、大中華、一品香、虹口大旅社、東亞大旅社には更に高價なのがある。チップは一

割をきめとしてゐるが又手加減もされる。支那宿で日本人の不便に感じてゐるものは便所である。南支はマードン(馬桶)が宿室寢臺のわきに備へられてゐる。こは二重蓋になつた圓筒状の低い桶である。慣るれば人と話しながらも用足しが出来るが初めはいくら腰をかけてゐても音沙汰がないので閉口させられる。馬桶を平氣でこなし得る程度になれば一バシ支那の田舎旅行が出来る卒業生と見てよい。客室には都會では鍵のかかるドーテがついてゐるが片田舎はその必要もない位純樸であり、茶代を出しても「手前の宿は餘分なものを頂かなくも立行きますから」と機嫌を損ふ處すらある。北方片田舎の宿は室外、高壁の間の寸地に煉瓦が二枚並べられ側に、茅廁と書いた札が吊るされてゐる。空氣の乾燥せる爲めか臭氣なくいつしか粉末化し昇天する。或は狗や豚などがあと片付けをすることもある。城内ではさすがに廁の設備は出来てゐるが戸のあるうちは少ない。なすべき事をなすに何で氣まりの悪いわけがあるかと云つてゐる。これだから支那宿はとも角も慣れる事が第一である。

南京蟲はチュウツン(臭蟲)と云はれ支那宿には殆んどつきものと考へられてゐるが、冬季は出て來ぬ。又大規模の清潔なうちにはゐない。初夏から初秋まではこれに見舞はれるのを覺悟しな

くてはならぬ。これも慣れれば免疫になる。なれぬものは除蟲菊の粉又はアンモニア、或はグッド・バイ・フライの噴霧器を携帯するのが便利である。蝸カタツムリは北支那に限つてゐる恐ろしい毒蟲でまゝ支那宿に匍匐してゐるのを見る。濕氣のある處に潜んでゐるから用心が肝腎である。

支那宿で喜ばしいことは氣分の呑ん氣なこと、殊に南畫、文人畫に見る風流な雰圍氣のあることである。胡弓や玉笛を友として旅の無聊を慰むる客のあること、蘭花を客室に賣りに來る乙女のあること、部屋の壁に古人の名句對聯扁額の心を咬る者のあること、相客に篆刻、文人などの風流人を見出すことなどである。友が訪ねて來て筆硯をそばに七言絶句で以つて長途の疲を慰むる平仄を並べ、大聲で高吟してくれたり、轎子で迎へに來て文人の雅會を催してくれたりする。その趣味さへ理解されると意外の社交氣分が漲り滿堂春色を生ずと云つた場面を見る。従つて支那宿に泊まるには多少文字の素養、文學書畫の趣味があると都合がよい。古玩美術工藝のたしなみを持たぬ旅客では當人自身に淋しさを覺ゆるであらう。時には番頭などでも詩文の出來るものがゐたり、名勝舊蹟の事に精しいものもゐたりする。近來支那宿が結婚の式場、披露の燕席になつたりなどする。支那風俗の生きた資料がゐながらにしてここで得られる。又動亂時には總

司令の辨事處に充てられたりすることもある。何にしても支那宿は宿そのものが設備萬端日本人には不向きと見られてゐるが、風俗趣味の上から棄てがたいものがあるのである。

若し視察の爲めの遊歴客が支那宿にとまると云ふ場合には、荷物を出来るだけ減らすべきである。地圖はともかくもピストル兇器を鞆に忍ばせてゐたりするは却つて身の危険を呼ぶわけになる。近來公安局から外人の客には特に荷物改めを嚴にする傾があり臨檢が行はれる。武器、モヒ、アヘンには殊にやかましく官憲の目が光つてゐる。出来るだけ手荷物は少なくし旅装は支那服、支那帽と云ふいでたちを最も便利とする。これが又地方環境に對する保護色を利用したことになる。洋服に折靴、寫眞機などを携帶するは當人自身は便利にちがひないが支那宿ではあまりに目に立ち、それに言葉が全然出来ぬとあつては宿が益淋しく感ぜられる。又支那宿に於ける日本との音信文通のことであるが、これは又かなり不便である。ポストも隨處にあると云ふわけでない。大都會にゐる時とはちがひ、内地に奥深く這入つた場合は折角認めた葉書を幾日間も投函できず持つてあるくことさへある。田舎の方の話はともかくとして、せめて都城開港地には氣分に添ふ支那宿がいくつもあるわけであるから多少之に慣れておくことは支那風俗なり民族性なり

を視る上からも大事なことである。又事實自分で泊つて見ない事には本當の支那の味、深い處が認識されないのである。

紅 燈 街

紅燈綠酒の巷は游野郎の出入する歡樂郷としてのみ考へらるるが、支那の如き社交の進みあらゆる方面を經濟化し紅燈街に耽溺するも亦或る問題を經濟的に有利に解決せんとする一手段なりと見られる故、狹斜の巷必ずしも悪い意味にとられてゐない。しかしかうした雰圍氣に耽溺しその眩惑の域にまで這入つてしまふ者は必ずしも多くはない。かかる界限は又何れの地方にあつてもその都城游子のいき抜きの場所として設けられてゐるのが普通である。

船着場は云ふに及ばず片田舎のささやかな街にあつても、この紅燈街ばかりは大なり小なり設けられてゐる。上海の四馬路、北京の前門外方面は天下に有名なるもの、又滿洲では奉天のピンカンリ（平康里）あたりが最も評判が高い。その地方地方にはその時の流れと人の集る中心の移動の如何によつて盛衰は免れないが、いくら衰へたりといへどもその殘骸が孤壘を守つてやはり

その商賣をしてゐると云ふものがある。その上流方面を相手とした大都城の紅燈街にあつて、その一廓を占むる處の街區は所謂柳暗花明の雰圍氣を見せ、その壁は高く門に風流な雅號文字を金文字で入れた看板を出したり、紅燈を出したり、一見たゞの町でないことを思はせてゐる。北京あたりに見るものは殊に趣に富み、門を入れれば年寄の老婆がゐて高聲にてその樓に抱へて居るだけの美妓の名を呼ぶ。その聲によつて美人は一人一人その御化粧した姿を静しづと游客に近くお目見えする。そして客が客廳に通され少憩してゐるところへ例の見参したものの何と云ふのがお目にとまつたかを聞きに来る。名を忘れた時はその何番目であつた事を答へる。するとその部屋へ案内される。二三人のつれと一緒にその部屋に茶のみ卓をかこみその美妓と語るのである。或は西瓜子や南瓜子を出したり林檎の皮をむいて出したり、熱茶の注ぎかへをしたりする。先方の方から麻雀でもしようと思ひ出すまでになるには、度重ならなくてはならぬが普通はものの一時間かそこいらで先づ二弗くらゐの茶代をおいて出て行く。そして又外の家に入つてひやかす。かくの如くして深更まで外套を目深にかぶり冬の夜寒むに物好きをきめ込む日本人の客なども少なくない。話がよくなるとまれは胡弓をひく先生にひかせて、美妓は鶴のひと聲と一曲歌ひ出で

は春風ただよひ歸る時間を忘れしむることもある。

紅燈街も北京あたりでは南班北班と分れ、又そのうちにも上中下があり、行く客のたちによつて又方角のちがつた方へ出かくることもある。上には上の香りがし下には下の臭氣があるなど争へぬところがある。衛生方面は支那では殆んど望まれてゐないのであるからかなり危険が伴ふと云はれてゐる。しかし支那人同士の間ではたいした事はないとも云はれてゐる。それにしても開業醫に就いてきいて見ると、支那の外來患者の病氣は眼病について花柳界の病が多いとの事を云つてゐる。支那の紅燈街では日本のやうに、そのひやかし客と美妓との間にいくらどんな事があつても氣持をあせつたり、焼いたり、いや味を云つて氣わるくさせたりなどすることはなく全く淡白に行はれてゐる。これもその特色の一つとなつてゐる。尙化粧風俗については従來とかく厚化粧の方であつたのが近來は總じてうすくするやうになつた。又襟に特色があつたり、ゾボンの曲線に特徴が見えたりしてゐた。これも近來はスカート姿になつたので大分モダン式を發揮するに至つた。上海三馬路、四馬路方面に見るものは、特別に又異様な感じを與へてゐるものがあり時代の流行を導いてゐるかの感がある。それを見んとて日本人などの多情の連中はターツアウエ

イ（打茶園と書きひやかしに行くこと）に浮き身をやつすものが少なくない。

支那民衆の幽情は赤裸々にかうしたところに現はれ、又風俗趣味の最も濃厚に窺はるところだけに又一段の興味が漾うてゐるやうに感ぜられる。

貨幣風俗

支那のやうな統一のない社會には、貨幣の不統一とか貨幣の偽物とか贋札とかはさらにあり、その爲めに宛然支那は貨幣を中心として一つの大きいグロの國である。貨幣風俗の内容とその變化いきさつ魂膽は實に興味あるものがある。たゞ日本の如き贋金の少ない國の人々にはかうした複雑な風俗の裏を流るる氣分がわかりにくい事であらうと察せられる。

支那の幣制改革の論はかなり古いものである。一圓銀貨をこまかく兩換をするると小銀貨二十錢を六枚と銅錢の二三をくれたり又その二十錢の小銀貨を銅錢にくづしてもらふと七八十枚くれたりする。その相場は時により場合次第で上下高低があり一定してゐないが、ともかくも、十進法で進めない事は事實である。そこに十進法本位に考へようとする外人には大變な不便がある。幣

制改革の論はいつもかうした外國人側から出て来る。しかし國內的にはかうした不統一がちやんと嚴存してゐる爲めにその間に仕事が出来るわけでもある。相場は朝夕によつてちがふ事もあり河水を隔てて河向ふと此方とでちがふ事もある。雨の爲め午後河を渡れなくなると河向ふの方のかねの値が高くなる。天津の札を上海の商家に持つて行つて支拂ふとすると受取つてくれぬ。天津の札を北京で用ひてさへも、天津までの往復の汽車賃と兩換料とを差引いた勘定にするなら受取らうなどと云ふ。尤もなわけであるが、ともかくも一つの國のうちでありながら不便この上もない話である。外人の目に之が改革と斷行の必要を感じるは當然のわけである。

ところが支那は貨幣の制度の上でなく風俗の上から之を見ると、その取引にあつては支拂ひをする時は札のみを用ひ、その吊錢その他を受取るときは銀貨のみに限ると云つた事を規則にしてゐたものがある。これは札の價值がうたがはれいつ無價値になるかわからぬと見られてゐる爲めである。幾萬元といふ金を現銀のまま秘藏してゐるものは少なくない。張作霖が先年廓松齡の亂のとき、二千萬弗からの銀貨を車に積み滿鐵公所へ持つて來て保管してくれと云つて頼みに來たとき日本人は皆少なからず驚かされたのであつた。金は地下室その他の穴倉へ秘藏してゐるも

が多く、銀行は信用がなくいつ取りつけを食ふか判らぬと見てゐる。その爲め住民一般は銀行とは無關係に自宅へなるべく秘藏しておきたいといふ考を抱くものが多い。

一圓銀貨の周縁にあるギザギザは之を磨滅させても同じ價値で通用せらるるが故に大商人あたりですら之をあまた函に入れガランガラン振り動かしそのギザギザの銀粉をためて、之を金に代へんとするものがあつたりする。或は又その銀貨の價金をかねて懐に用意しその拂つてくれた金と懐の中ですりかへあとから容を呼び止め、價金を出しては客を面詰する手段に用ひるといふものがある。うしろから呼び止められやかましく詰問された客は價金をつかまされることにより二重に支拂はされることになる。これは民國九年十一年製の小銀貨に殊に多い。ときとしては又一圓銀貨にもニセがある。それが爲め支那商店では客から銀貨を受取るなりすぐパチンパチンと帳場の板の上に投げ付け、その響きを聞き、その眞否を確かむるの方法をとる。又指頭に乗つけて他の銀貨と打ち當てその清き響きを聞かないならばすぐ面前で客につき返す如き態度をとる。これは自衛上止むなき事であるが外國の慣れぬ者などは之を氣にやむこと夥しい。

上海あたりの大取引や國際勘定には銀貨の代りに馬蹄銀が用ひられた。之を多量に運ぶのは自

動車などを用ひることなく、苦力に殆んどその監督すらもつけず幾萬金、幾十萬金と云ふを所定の目的地へ運ばせてゐた。長い綱で以つてそれぞれ萬兩函が引張られてゐるのを見た。これには從來とも決して間違ひを生じた事がないと云はれてゐる。場所が支那だけにこればかりは不思議に思はれた事である。

正月の風俗に饅頭を家庭のものが祝つてたべるとき、そのうちの誰れかが一錢銅貨の這入つてゐるものを食べあてるやうに仕組まれてゐることがある。之を食べ當てたものはその年中縁起がよろしいと云はれ喜ぶのである。又婚禮その他賀筵の席に出席せんとするものは、そのポケットに喜の字を二つ並べて紅紙で剪みたるものを貼付け之をその家のボーイ召使どもに祝つてやるの風習がある。祝儀袋に之を收め祝ひにやるのと同じわけである。かうした金を現生まのまま贈る風は支那では當り前のことになつてゐる。従つて物を形容する時にも金錢と云へる語を露骨に用ひ、古硯の譜を形容するときにも金錢火捺(圓形の紅い火捺のこと)などと云ふことがある。雅會にかゝる語を用ひるは殺風景と云ひたいところであるが支那では存外平氣である。或はむしろ之を以つて快感を覺えてゐるのかも知れぬ。すべて露骨に云ふ風が一般に受けてゐる爲め人に金

の話をする時指で以つて圓形を作る式の日本の風俗はあちらではあまりしない。片田舎に行つてかかる恰好をして見ても一向に通じないのである。

又古い風俗としては穴錢即ち制錢をあまた紐に通し之を木の枝に結び付け、金のなる木を描き唐子にかつがせてゐる彩色畫を見ることがある。こは五福臨門と云つたやうに幸運の家庭に向かひ來たれる事を暗示せる招福圖として喜ばれてゐるもので正月の門神に多く見る。又財神廟の神が馬蹄銀を手にし白眉の姿で安坐してゐる姿などもよく見る。金と云へば銀貨よりも馬蹄銀の方がたしかに富貴のしるしとして似合はしく、一般風俗の上には主に之が藝術化して表現されてゐる。神前祭祀のとき善男、善女たちの焚いてゐる金もこの馬蹄銀の紙製のものに限られてゐる。又道教の寺々の天井、又香料を賣る店の天井から壁のあたりに一パイ藏せられてゐるのもこの紙製馬蹄銀である。ユワンパオ（元寶）と云ふがこれである。神に之を手向け、之を燃き、神靈に之を捧ぐるは自己の要求をきき入れてもらへる條件の一つであるとして信じてゐるのである。

料理・阿片・香煙

社交としての食事

日本の人々が支那の社會に實地に踏み込み、第一奇異に感ずることは、支那街に生活してゐる人々が始終口を動かしてゐることである。常に食卓を圍んで何かよく食つてゐる。のべつ幕なしに口を動かして居なければ淋しいのだと云つた風に支那の人を批評する者もあるが、これは當たつてゐる批評ではない。多くの支那の人は朝飯を十時前後に食べ、三時のお茶の時分になると又卓を圍んで何かを口にしている。日本人よりも概して健啖であり又胃袋も相當に大きく丈夫らしい。良く食らひ良く飲み良く語ると云ふ點に於ては、數等日本人などよりも優つてゐる。夫れゆゑ日本人の眼に支那の人が、常に口を動かしてゐる様に見えてゐるのは無理のないことである。支那街の全體を通じて考へて見るに、何の街にも何の辻にも飲食店の商賣の多いことは非常なものである。これ等の店は甚だ無雜作に店に出入りの出来る様にもなつて居る。必ずしも店に踏み込まなくても路傍で優に、食事を濟まし得るやう簡單な仕掛けにもなつてゐる。相當身の廻りを立派に着飾つてゐる紳士體の人でも、大道の露店に腰をおろし舌鼓を打つてゐる小景は南北各地

によく見られるところである。

斯様に喰へることに掛けては誠に手軽く、又安價にやれる仕組に出来てゐる。それだけに誰でも食ふこととなると無意識且つ無雜作に考へてゐる。それ故中流以上の社會人士でも、朝出會ひがしらに友人や來客に接する時の挨拶に、チファンラマ吃飯了麼(飯食つたか)と云ふのである。これは日本語で「お早よう」とか「今日は」とか云ふ語に當たるのである。朝の挨拶に殆んど無意識的に食事を濟したかと云つて、左程に不作法にも聞えなくなつてゐる位に、食事のこととなると一般化せられてゐるのである。或は又人に對する尊敬の挨拶に「一晚聚餐しませう」と云ふ言葉を發してゐるが、これは「明日天氣ならばお互に結構ですな」と云ふ程度の軽い意味しかないのである。貴方に御馳走をするから明晩食事をしないで下さいと云ふ様な意味では決してない味しいのである。日本で所謂「では又」つまり「そのうち飯でも一緒に喰べやう」と云へば「さうしませう」と當もなく返事する程度にしか當らぬのである。支那人社會の習慣に慣れてゐない人はこれを眞に受けて、その通り正直にその人の持てなしを受けるつもりでその家を訪ねる

ことがある。元來先方では御馳走する積りでは居ないのであるから、たとひ家に居て面會をして呉れても別段食事の話は出ない。寧ろわざわざ出かけて行つた人は野人禮に媮はずとして馬鹿にされるだけのことである。若し正式に招待を受けたとしたならば、お定り文句の丁重な案内が印刷物で来る筈である。これに向かつて此方からも又正式に返事を書いて使に持たせてやるのである。極めて親密な間柄でない限りは口先で食事の挨拶があつても、これは一つの辭禮に過ぎないと軽く見ておくのが本當である。

これ等はすべて食事その物が一つの辭禮になつてゐる位に、食ふ事第一主義であることを裏書するのであるが、又社交の上から食事を共にすることを以て、可なり意味のある事としてゐる場合も相當にある。支那人同志友人關係を現す言葉の中には「貴下から御馳走をされたからといって、今直ぐ私が貴下に御馳走の返禮をする様な、そんな水臭い關係でもありませんまい」と云ふ挨拶をして、君と僕とは非常に親しく水魚の交をしてゐるとの印象を強める場合さへもある。これも半面から云へば食事その物を、單に一つの社交方便として軽く見てゐるものと云へよう。併し又食事に招待されることには種々の意味がこれに結び付けられる事があるので、支那の社交界に

於ては、食事の案内を受けると意味深長に考へ眉唾視し警戒する場合も少くない。

例へば北京とか上海とかに長く滞在してゐる間に、單なる歓迎の意味許りでなく、時ならぬ時に支那の人々から「特に此ん度の日曜の晩に貴下と食事を共にしたい」と云ふ招待状が來ることがある。無論それにも主賓として招かれる場合と、陪食を仰せ付けられる意味で、其の好機會に加へられると云ふ場合とあるのである。何れにしてもその招待にはたいして特別の意味の含められてゐない時と、其の招待の動機がよく分らなくてもやがてその招待状を受けたのが引き懸りとなつて、數日を経つとそろ／＼何かの形式を以つて或る種の要求の出て來ることがある。食事に招かれたところから飛んでもない糸を引ひて來て、後で先方の申出を聞かねばならぬ破目に陥る様な場合も實際にあるのである。若しそれと睨んだ時にはその御招待は謝絶する方が賢明な道である。先方は其の招待を謝絶せられた事に依つて婉曲に相手が自分の計畫に好意を持つて呉れて居ないといふ暗示を與へらるゝからである。その方が安全なのである。

無論支那の事は何事によらず理屈通りに行くものでないのであるから寧ろ、招待状でも來た時には心持よく、出掛けて行き、後で要求の有つた時は又その時の事と云ふ風に理屈張らずに、氣

樂に打碎けた態度に出ると云ふのも支那氣分として面白いことである。がそこには底があつてさう何時も圓滿主義でやつて行けない場合もあるのである。我々が東京に居る時など支那の留學生諸君から、時折り差迫つて縁もゆかりも無いのに神田あたりの支那料理店などに招待され、自分許りでなく家内も共に來て呉れと乗物まで差向けられることがある。それが随分冬の寒い晩で雲は降るし、雪は二三寸も積んでゐると云ふ様なひどい時にも構はず呼び出しが來ることさへあるのである。がこれも支那の青年たちに時會して見たいとのなつかしい氣持ちなどして、大きく云へば御互に親善を進める所以にもなるであらうと思つて出席して見る。すると案の條數日たゞぬ中に「先生御苦勞ですが一つ私の爲めに外務省に顔を出して呉れませんか、さうして對支文化事業の方から僕に毎月學資金を下げた呉れる様に、僕の爲めに運動して下さい。私の目下の境遇は郷里からは戰亂の爲め金が來なくなつたし、それに私の外務省から出てゐた金額は私が暫く支那へ歸つてゐた間に他の友人に割込まれてしまつて、今ではその金が貰へなくなつたのです。私のこの事情に同情して下さい。先生は平素中國の青年學生達に同情の深い方であることは皆よく知つてゐます。何んならあすの朝直ぐ一緒に行つて呉れませんか」と斯う云つたやうな戦法で臆面も

なくやつて來るのである。

無論その心持には可愛いところがあつて、豫てからの計畫的の行動であるとは云へそこには憎むべき何物をも見出ださないものである。自分に對し平素親しみの心を持ち宛かも孫が祖父さんに物をねだるやうな譯なんであるから、時間の許す限りは一緒に外務省へも出掛けて行き其の要求の半額なりと事情を詳しく話して支給して貰ふやう橋渡しをしてやつたことなどもある。其の後尙又其の學生は自分の小宅に來て「後もう少し澤山貰へる様に運動して下さい。今のところは全く苦學生同様な譯ですから」とどこまでも要求して己まないものである。そこにはそこに人に云へぬ事情もあるのであるが、慨して先づ一度でも食事を共にすると云ふことがあつたならば、それが縁故となつてあとから種々の事柄に根を延びて來るのである。

自分がこゝに斯様なことを述べるのは、その招待の好意に對して警戒をしてかゝらなくてはならぬと云ふ意味で云ふのではもとよりない。支那の社會は高所大所から見ると斯くの如き習慣が古くからあつて、對人關係が複雑になつてゐるだけに益々密接になり、親密になつて行つて、後では如何んとも出來なくなり、抜き差しならぬ一種の社交關係を結んでしまふと云ふ風な一般的

の傾向があることを申し述べるに過ぎないのである。無論このやうなことは、食道樂そのものを目的としてゐると云ふよりも他の意味が加はつてゐる不純なる食道であるから、その料理が美食であるとか五味八珍であるとか云ふことを主たる目的としたものでは勿論ないのである。食道樂中心主義の支那料理と云ふものは、多くは功成り名遂げて社會上の地位をよく贏ち得たる人々はもとより、さうでなく普通一般の人々であつても、社交的によい料理を採り出來得る限り自分も愉快になり人をも喜ばせると云ふ意味で、盛んに美味をあさり、兼ねて精力の増進を目的とするところの材料を選ぼうとするのである。

それゆゑ客に勧める酒にしても、普通のラオチウ（老酒）の他にウーチャビー（五加皮）や、長春酒を用ひ之に鹿の血片を饅節のオカカの如く削つて振り掛け、客に勧めるのである。それによつて、客の氣分を一層優雅ならしめ、又精力を絶倫ならしむる意味から立て續けに乾杯又乾杯と來るのである。

或は又南方の廣東料理などにあつては、日本人にはあまり目度く響かないであらうが例の蛇料理と云ふものを出して、食物の側から雅客の精力を一層増させる様にと努めるのである。或は

又四川省の片田舎に行けば、西藏から取り寄せられたところの冬虫夏草と云ふ動植物をチャンボにした様な一種の生物を料理に採入れて、之を汁物にして客に勧めるのである。其の意味は客をして不老不死ならしめ、或は不老長壽ならしめたいと云ふ歡待振りから之を出すのである。其の他四川省には尙ハスモ（蛤士蟆）と云ふ蟾の類を料理して、その膀胱のあたりにあるところの脚部の肉を取り出し之を珍料理として精力劑に用ひ、客を喜ばせるのである。かやうに廣大な支那には各種の珍料理があると同時に、客の歡待にふさはしい目出たい料理が幾百種類あるか分らないが、總べてこれらの料理と云ふは食道樂中心主義の社交性の上に見出さるゝものとして紹介することが出来るのである。

若し夫れ更に一步を進めて富豪貴族社會の家庭に入り、或は宮中の奥御殿に入つてそこで行はるゝところの珍らしい結構な料理に就いて見ると、凡そ宮中大膳職の専門家が如何にして皇帝日夕食卓の上に味覺を満足せしめ、又王公の好みに合ふ様にと天下の凡ゆる山珍海味を採り入れ苦心に苦心を重ねた調理法で以て、前代未聞の珍料理を拵へ様とするかが判る。恐らく過去二千年と云はず、三千年と云はず、其の複雑な調理法は連綿として今日に及び、一日も其の手を緩むる

ことなく遂に今日の世界的支那料理を發達せしめたものである。それ故今日北京あたりの有名な料理番、殊に前清朝の大膳職の民間に下つて店舗を開いてゐると云ふ料理店へも出入し、その料理を試食して見ると、さすがは名にし負ふ宮中の名料理かなと思はしむるほどの御馳走が手交換へ品を代へて卓上に飾られるのである。

支那はそのあらゆる階級の食道樂に就いて考へて見ると、上流には上流向の料理があると同様に、中流には中流向の、又下流には下流向の料理がそれ／＼あつて、比較的多數の人々を樂しませる様に出来てゐる。日本の料理の様に客が突然殖えたからと云つて料理番が急にあわてる様なことはない。唯そのときは食器なり箸なりを、其の割込んで來た客の前に支度さへすれば其の他何の心配もなくひよいのである。どうせ食卓の中央に運ばれた御馳走を、共同で周圍からつき合ふのであるから、二人や三人位の増減は殆んど意に介するに足りないのである。此の點から云つて見ても支那料理が社交的氣分に出来上つてゐることは明瞭な事實である。

尙中以下の家庭であると食卓を街路の通りに近い部屋に持ち出し、成る可く明かるいところで往來に面して卓を圍みなるべく、行人の眼に觸れる所で食事をしてゐる。井をついき家族のもの

が、其の何を喰べてゐるかと云ふことを見て呉れよがしに食事をするのである。さうして若し知人の通り合せる者でも見れば、口に御馳走を入れた儘大きな聲で之を呼び止め、どうぞ這入つて一緒に喰べて行かないかなどとすゝめるのである。そこには一種云ふべからざる社交氣分が溢れてゐる。こまやかな消息は、其の間に看取されるが、日本の家庭の禪寺的な無言食事法とは全然趣を異にしてゐるのである。

春の彼岸に清明節の佛事を行ふ時分は揚子江沿岸方面では殊に非常な御馳走を作り、之を大道の真中に持ち出して、全然知らない人をも呼び止めて腰を掛けさせ、どうぞ貴下も箸を取つて呉れと云うてすゝめて來る。直ぐその云ふことを聞いてやつて卓を共にすると其の喜びは又非常なものである。そして云ふに亡き人も定めし此處に降りて來て貴下の卓を共にしてくださつたのを見て善い子孫を持つたと云つて喜んで呉れるであらうなどと云つて感謝の辭を述べる。すべて斯う云つた調子で支那の人々は食道樂に耽けると同時に、其の食事を如何に社交的に進めんかと云ふことに努めてゐる。そのところは實に麗はしい風俗であつて、同時に支那の社會又家庭が如何に圓滿第一主義であるかと云ふことを裏書きしてゐるものと云へる。

本場の支那料理

支那料理に數多く出くはして居る人は慣れたもので、宴會の初には湯匙で一寸その出たつゆの味を見る位である。例によつて皿數が多數順々に出て來るのであるから、餘り採集主義を發揮するの氣が利かない。先づゆるゆるとやれば良いのである。夏向になると支那の暑さはまた格別であるから、支那では主客共に體の上半は都會では薄い麻服などをつけてゐるが、田舎などでは裸になり上衣をぬぎすて専心御馳走に打ちかかるのである。最初のほどは、威儀服裝を正し、上品ぶつて打ちかかつても居られようが、乾杯が始まると、それではとてもやり切れない。

熱いタオルの二三度も出る頃から、主人よりチンチンと兩手ですくひ上げるやうな手つきして「脱がうではありませんか、さあどうぞ」といふのである。上衣を脱ぎ棄て、十二分に主人もてなしの熱い物をいただく態度に進む。こは主人に對する禮である。少しの遠慮もいらぬ。若し一人で鹿爪らしくして居ても、はたから同化させられるのであるから、一層その好意を早く受ける方がよろしい。そして御馳走は地方によつて食べ方が幾らか違ふが、その銘々の卓上には食

べた材料の骨などは堆高く積んで置くのが主人の好意を受けたしるしを裏書した事になる譯で、落花生の皮でも、西瓜の種の皮でも、何でも杯のそばにまとめておく。さうすると、熱いタオルを持つて來るボーイが時を計らつてそれを片付けに來る。向ふで掃除しに來てくれるから少しも心配はない。日本人は却つて卓上をスポイルする事を失禮だなど思つて、そつと卓の下の暗い所に棄てたがる。下に犬でも來てゐて落したものを片つばしから片付けてくれればいいが、さもないときは、綺麗な土間や床をそれこそスポイルする事になる。汗のついたままで吐いて棄てられは、却つて主人の方でも後始末に困る譯である。

支那料理の極致は、老酒とこなれのよい山味海珍とで満腹になり、陶然とよい心持で滿堂春を生ぜしめるにある。従つて主人側の心づかひはもとよりであるが、客の方でも支那氣分になつて、大陸的のめでたい不老長生の話やら、西太后の逸話やら當世の民國社會の世態やら、支那に行つた時の思出話など、次から次へと隙のないやうにたたみかけて、談柄に花を咲かせ、その場面の空氣そのものを爛熟させるといつた處まで導いて行くべきである。その中に綠蔭の涼亭から一陣の風が吹いて來る。主人御自慢の扇面類が客の間に清鑑を請ひたいといつて取り出される。

四壁の對聯軸物の古畫について清話がはさまれる。甘い杏仁湯でも一度のしきり目に出されると、一旦書齋の樓上見晴しのよい處に案内をされる。徐天池だの、何紹基だの、金冬心、高南村だのと少し遊味のあるもの、仇英、藍田叔などのどうかと思はれる大幅なども、次の部屋にいかめしく掲げられる。暫くして風流文雅高士の清談の幕がすむと、また階下の宴會室に戻つて来る。卓上は再び飾り付けられて、あつさりした珍味の續きが繰出されて来る。若い手合でもあると例の支那拳でもやつて掛聲高く

一心、二喜、三元、四季、五奎、六順、七巧、八馬、九子、十全など、あたりの迷惑も構はず叫びはしやくのみであるが、その罰杯を飲み乾す場面にもなると歡聲一時に起り、大變なものである。併し風流高士の連中にはそれはない。滑稽に上品な話をつきませたクラシカルな物靜かな趣味談位が精々である。

シヤムの本場の燕の巢を始め、本當の主人公肝いりの珍味は終り程よいのが出されるのであるから、折角の佳境に入つて箸をおろしたきり客の手が出ないでは全く失禮である。最後の珍菜に箸を離さず食べてくれるといふのを以て、主人公も面目を施した者としてゐる。馴れた客はその

邊の呼吸を吞み込んでゐるので、主人公の喜びも一通りでない。洋食の禮法と違ひ卓上に飾られた冷菜はいつ箸でとつてもよろしいので、少しも遠慮はいらぬ。どうせ最後には下のものにさげしてしまふのである。併し東坡肉の如く、厨司以下の料理方がお下りを受けて入札にでもしようと思つてあてこんでゐるもの、また紅焼鯉魚等の大きな肴の如き、大抵片身は残してさげるべきものになつてゐるのを、古禮に背いて魚をかへすやうな事をする、心得ない田舎者だなどつまらぬ事で男を下げるやうなこともある。身體の忙しい客は、中途熱いねぢハンカチで汗でも拭うたのをさかひに、主人と左右の客に靜かに斷りそつと抜けて歸るものもある。普通の宴會では概して食後閑談に長く居すわる客人は少なく、すべて料理が出てしまへば、やがて挨拶してさつさと引揚げる事になつてゐるやうである。

卓上の社交

支那料理の卓上に於て心得べき主なことをここにかい摘んで述べて見よう。支那料理の宴席は、自分が主人公として催す場合は兎も角、客として招かれてゐる場合には、豫定された時間よ

りも早く、或は正確に其の會場に行くべき筈と思はれるが、支那の習慣では西洋人の如く正確に其の時間に行く者は少ない。或は日本人の如く先方の迷惑を察して早目に行くと言ふやうな者は尙更ない。成るべく支那流に東洋流の習慣と言ふか、六時と云へば八時位に遅れて行く。出來得る限りゆつくり加減して出掛けて行く。遅ければ遅い程大人であると云ふ。つまりない手加減が加はつてどうも時間の點がうまくゆかない。皆が其の氣持でゐるから時間に掛値がしてある。結局のところ始まる時間でなければ始まらないのである。特別の用のない限り遅れ勝ちであるのが原則になつてゐる。

食卓が開かれてから主人側に立つ人は、其の御馳走を前にしてちやんと正装をした客の二三人が眼に着けば、先づ自ら其の羽織に當る馬掛兒を脱ぎ、そして客全體に向かひ上衣は脱いでいただきたいと云ふことを云はなければならぬ。而し中には強いて云つても取らない人がある。これは無理に強ひない方が宜しい。

料理が進み酒が廻るにしたがつて、話は隣同志局部的に賑つて来る。それはそれでも良いけれども、成るべく其の會にふさはしい話の中心から脱線しないやう、其の中心をどこまでも失はせ

ない。うまく舵を取つてゆくことが主人又は主人側の人の心得で置かなければならないことである。喜びの賀宴であるに拘らず場所柄にふさわしくない話が出ると、これを角立てない様な話で大きく覆ひかぶせて手際よくこれを他に轉ずるとか、又甲の人が殆んど不用意に人の噂を話題に出して來た場合に、其の話が乙の人の親戚の人にふれて來ると云ふ危険を感じて來た場合には、これを他の話題に轉ぜせしめなければならぬ責任がある。うっかり話してしまつて、後でとんでもない取返しつかないことになる場合もある。其の爲めに一部の人は招ばれて却つて不愉快を覺える結果になる。

話の種類にも依ることだが、大體宴席の場面であれば面白い話、又目出度い話、或は男女の間に大いに快感を覺える話ならば、急轉直下にその方に結び付けて話の舵を取つて行くことは、最も望ましい事である。その場合には言葉の使ひやう或は機轉の利かし方がまづいと云ふと頗る榮えないことになる。其の邊は主人公の心得てゐなくてはならぬ問題である。

もともと其の座席に招く人の粒をよく注意して選んで置かなければ、顔振れ次第では今日はこんな席に出席しなければよかつた、と云ふ感じを與へる場合がある。中には形式だけ出席して先

方から電話を掛けさせ、急用が出来たと云つて中座する者がある。此の間のこととは頗るデリケートであつて、其の場合々に落度なく片付けることは可なり腕を要する事である。尙卓上の心得としては御馳走をいただいた以上料理その物に就いては調味を褒め、これを禮讚する如き辭令を用ひることはもとよりである。而しそれに就いて支那の人々は實に態とらしくなく、相當の理由又相當の美味を舉げて、主人の好意に十二分に報ひるだけの挨拶が出来る。日本人は其の禮讚の感じだけは人伍に落ちないけれども、どうも言葉がそこまで届かない場合が多いのである。後で手紙で挨拶をするにしても、其の點に於て支那の人にはかなはない様である。

近來支那の卓上に於て支那の人自身も箸、小皿、等を一々紙で拭く人が出来て來た。これは氣分の問題であつて、大したことではないが、二三錢の白紙を切り潔癖性の人の氣分に副ふやう考へる傾向を生じた。尤も北京あたりでは其の紙に廣告文が書いてあつて、目的は一種の宣傳の意味になつてゐるのでもあるが、多くは紙で拭くことを氣持が好いとなしてゐる。面し自分達はどうせ見えないところではどんなことがあるか分らないのであるから、紙片で箸を拭いて見たところでは始まりぬと云ふ様な氣分である。殊に田舎に行つた場合、蠅の澤山留まつてゐる御馳走など

を見た時、到底その様な神經質の人では食卓に着くことは出来ないと思へる。

食事の後は麻雀の遊びをよくやる。其の時支那ではわざと勝負に負けて主人が客に一種の贈賄の意味で、客の心を喜ばせる様なさう云つた交際振りのあることは事實である。それには幾萬金かをかける勝負がり、其の間の消息では随分面白い話題を持つてゐる。それ故食前食後の支那の交際社會の氣分と云ふものは見れば見る程深みがあり、又複雑味があつて、どの程度まで奥底のあるものか探りが入れられないと思はるる位であつた。

懇懃なる乾杯

支那料理の席上では、その卓に新たな料理が運ばれる度毎に主人は隣席に對して杯を舉げて、乾杯々々と繰り返しつつ懇懃な態度を示し祝杯を舉げる。一座に對しても其の乾杯を求めないのである。如何に食事中歡談湧くが如き宴酣はな極に達してゐても、主人としては其の料理の改まつた際には必ず此の乾杯を忘れない様に注意してゐる。注意どころではなくボーイが新たに運び來るのを見れば殆んど無意識に客に對して乾杯を求める習ひである。一同は主人から云はれるまで

もなく殆んど響の音に應ずるが如く一齊に杯を舉げて飲み乾せば、後は杯底の見えるまで直角にこれをそば立て、其のたしかに乾杯せしことを示すが禮である。

それで支那料理の宴席では、乾杯々々と連呼することが、一つの陽氣な言葉として考へられてゐるから、乾杯は即ち宴會の眼目だ位に考へられてゐる。日本の宴席の如く自己の杯を順次客に一人一人指して廻ると云ふ様な手数は致さない。若しも同じ卓に着ける客の中で、特に陳なら陳、王なら王と云ふ人と乾杯したい場合には、其の名前を陳先生又は王先生と云つて呼んで、餘り大きく乾杯などと云はないでそつと杯を舉げる。さうして求めて互に挨拶をして相方が酒杯を飲み乾し、靜かに杯底を見せてにこにこ顔で其の乾杯の禮を終るのである。

乾杯が餘り頻繁に續くときは支那料理に於いて老酒の量が相當に進むのである。それ故これに日本酒の如くアルコールが大量に入つてゐる酒であると忽ち頭に來る。もとより支那の酒客は多くは上戸であつて、下戸の手合は少い。非常な酒量の持主が多い。然し酒そのものが北方の老酒にしても又南方の紹興酒にしても、酒精分の含まれる量は極めて僅かであつて、客をして軽くほんのりと陶然たらしむる程度である。又口當りも強く感じない。五加皮の如く玫瑰酒の如く焼酒

よりも強い酒を好んで用ひてゐる人もないではないが、概して云へば宴席の乾杯に用ひる酒は比較的軽い酒なのである。

支那料理の宴席は微に入り細に入り、人情の細やかなところを穿ちさうして儀禮を厚うして慇懃の極を盡す。最も洗練された宴席であるのだから乾杯振りの練れてゐることは申すまでもないのである。實に支那宴席の歡迎會の場合とか、或は離別の宴會の場合とか、最も慇懃振りを發揮してゐるのである。其の間に席上で詩を作つて其の行を盛んにする場合もあれば、又一座残らず柏梁體の詩を作つて主賓に禮を厚うすると云つた様な催しもあつて、何かにつけて其の乾杯振りは實に至れり盡せりである。

家庭料理

支那の家庭は地方にもよるが、大體二度の食事のところが多い。三度のところも決してないではない。二度の食事といふのは、これは夜分は麻雀その他で夜更かしをし、朝寢坊するところから朝飯が十時過ぎと云ふやうに自然時刻が遅れるためである。家庭料理は朝は極めて簡單で中流

どころでも三品か、四品の程度である。五品出る家は少ない。無論卓上の中央に共同のお皿を出すのであつて、これを周圍から一尺二寸もある長い箸でつき合ふのである。お汁物もあれば野菜もあり肉類も出る。さうして粘り氣のないさらさらした飯が出る。地方に依つて米の取れないところでは、粟又は玉蜀黍などを用ひる。又山東方面では大きな饅頭ゴハンを用ひるが、こは幾分鹽辛く出来てゐるだけであつて、餡は入つてゐない。

家庭料理の御馳走は主として晩飯に出る。中流の家庭であると五皿から六皿以上、或は七皿八皿と云つた程度に盛り澤山に出される。野菜に鰕、又各種の麴類、又冬瓜の煮た物、人參その他の野菜類、或は魚類、鶏肉、玉子、餅と云つた物、その他餘り日本に知られてない饅頭の薄皮の如き物で、鴨の肉又は肉飯の類を巧に包んだ様な物もある。

中以下の家庭であると油條豆腐トウモロコシや、豚、犬羊の肉類、主として臍物類を取り合してこれを煮詰めた物などを取る。海參カイコであるとか、或は火鍋子等の料理は中流又は上流の家庭の料理にもよく見るが、或は又焼鴨子、油鶏、清湯燕菜などは可なり良い家庭で用ひられる品である。紅焼魚鯉の如きは時たま御馳走すると云つた時に卓上へ持ち出されるのである。家庭料理にも種類は多いの

であるが、普通日本の支那料理店に定食をたべに行つたとき出される様な、あの様な多くの品數が出るのではない。毎日のことであるから、極めて無雑作に單子モノなしに料理番の手加減で出されるゆる規則張つてゐない。従つて食器なども比較的質素である。所々缺けてゐる皿、茶碗などを用ひる様なことさへもある。又始末の好い家庭であれば一つの皿に數ヶ所もかすがひ止めがしてあるひび割れの物をそのまま用ひてゐるこさへある。

中以上の家庭であれば象牙の箸を用ひてゐる。或は又色の着いた骨の箸を用ひるうちもあるのである。中以下では竹の箸が一般である。箸の形は、日本の箸の如く先端が鋭利にとがつてはゐない。したがつて極めて細い物を掴むには不便である。況んや油類で料理された滑り易い料理は取り難いのである。それ故上流の家庭では一種のホークを用意して、これで突き差して取る様が出来てゐる。尙家庭の食事で即席的に俄か料理を必要とされる場合には、普通麴類の汁物を作る。或は什錦飯シシキンと云つて五目飯の如き物を作る。臺灣邊りの本島人の家庭では米粉コメコを用ひるのが普通である。至つて手輕くしてお腹を拵えるに充分であり又經濟的でもある。

支那の家庭料理は大要上に述べた様な物であるが、南北各地方に依つて多少違ふことは免れな

い。一家庭が卓を圍んで團樂の下に箸を採つてゐる場合、俄かに臨時の割り込み客があつても、少しもまご付くことなく、食事を共にすることが出来るのである。日本の如く食事を成るべく靜かに早く切り上げて、食卓を片付けて了ふ様な方法ではなく、支那の家庭は可なりはいやいで賑やかに食事を採る。又其の時間も長い。さうして食後には多く胡弓などを弾じて互に食後の團樂氣分に浸たるのである。なんとなく支那の食事の方法は其の部屋も比較的氣樂に出来てゐるけれども、其の氣分は愉快に明るく打ちはしやぐと云ふ傾向がある。中流以下の家庭の食事が大道に近い方面へ卓を出して、門前に行く人を眺めつつ食事を採ることは前にも申し述べた通りであつて、頗る場面が陽氣に出来てゐる様に見える。

尙一般の家庭では晝となく夜となく麻雀に打ち耽り之に勢力を打ち込んでゐる。そこで普通の食事以外に麻雀の爲めに晝となく夜となく食事を採ることがある。夜半は多く焼そば其の他簡単な料理を卓へ運ばせて腹拵へするのである。若し冠婚喪祭その他の取り込みのあつた場合には外部から料理番を雇ひ、或は又は料理店から料理を取り寄せなどして、家庭の料理と打つて變つた珍料理を味ふこと日本と同様のやうである。

支那家庭の日常生活は着ることよりも食道樂に耽つてゐる者が多い。殆んど食ふことが主たる生活の如くに見做されてゐる如く、決つた食事の外にも常に口を動かしてゐる様に見える。可なり良家の家庭であつても、その令息達が煮炊きの細かい事までなかなか好く知つてゐる。自分自ら臺所の手傳などをし、或は自分一人で味付けなどを結構よくやることさへ見るのである。日本では斯様な話は珍らしく感じられるが、支那では普通である。其の代り家庭料理に對して女が口を出すと云ふことは甚だ香ばしくないとせられてゐる。支那の料理は男が之に従事する。男専門であつて、一家の主婦どもは家庭料理のことに口を出さないのが原則になつてゐる。若し指圖がましくこれに指令でもした場合には、女の癖に料理に口を出したと云つて非難の聲を聞くことさへある位である。それ故年頃になつて他へ縁付くと云ふ令嬢などにも、自ら臺所に立つて調理の實際をお稽古すると云つた様なことは支那では殆んど見ない例であつて、さう云つた様なことを當人は固より親達も奨めないのみならず、これを口にするにことさへ恥づると云つた風である。これは甚だ舊式の習慣でゆくゆくは斯かる習慣は打破して自ら先頭に立つて食卓の風味を自ら作り上げると云つた風にならなければならぬと思ふ。けれども永い間の習慣を今俄かに變へて新しく

することは困難なことであらうと思ふ。

阿片の描く世界

支那の社會で民情味のゆたかな世界から阿片が取除かれたとしたらどんなであらう。それは恐らく世の中から女を奪ひ去つたあとにも比すべきものであらう。支那は阿片で持つ。阿片がなかつたら夜も日も明けぬと云つてよい。阿片くらの魅力のあるものはなく一にも阿片、二にも阿片、全く支那は阿片王國の綽名を冠してもよいほどである。

支那は國としての財政窮乏とか、地方省政府の財政樹て直しとか、大官當局者のへそくりとか總べて金に關して大きい融通の話がありその祕話の裏面に必ずこの阿片がある。勿論言葉でヤーピエン（阿片）と云ふことは憚つてターイエン（大煙）と云つたりパイヘイ（白黒）と云つたりして隠語を用ひてゐる。白黒と云ふは白がモヒ（モルヒネ）を指し黒が阿片を指してゐること云ふまでもない。その他手の指の恰好で阿片のキセルの形を作りそれを口許のところへ當てがふの方法をとることもある。かやうに隠語を使つたり手の形で之を暗示したりする位に阿片そのものを

を心の中ではかばつてゐる所が見える。

いくら不景氣であらうが、いくら亂世であらうが、いくら片田舎であらうが、阿片の話となつたら耳寄りの話だとあつて直ぐ人の心を牽く。それほどに金になる力を有してゐると云ふのは全くこれが民族的第一位の嗜好品となつてゐるが爲めである。酒よりも、香煙よりも何よりも人に好かれてゐる。その味は女にまさるとさへ昔から云はれてゐる。以てその如何に四億萬の民衆が之に耽溺するかの意味も了解せられるであらう。

阿片窟

支那の巷街でその中流以上の家庭と覺しき家を訪ねて見ると大抵阿片室の設備が出来てゐる。よしそれがなくても寢室そのものが急に大煙室に充てられることはいつも見る處である。又都城では大通りから這入つた路次の奥に煙館と云ふのがあつたり、又旅館の客室に、酒樓茶館の樓上に阿片窟の出来てゐるのが少くない。或は支那船、輪船（輪汽）に乗つて田舎へ這入らうと云ふとき乗合はせた客の中には手の爪の色の淡褐色に染まつてゐる先生が少くない。その齡まだ三十

臺と云ふ若手の連中でも一パシ色の濃く焦げてゐる指先を見る。これなどは既に癮者と稱されい
つも常習的に自分の指でやつてゐる證據が爪に表はれてゐるのであつて、隠さうとしてもかくさ
れぬ印となつてゐるものと見られる。篋でやるのがまどろこしいとあつて、手で煙管に詰め詰め
火であぶつて焼いて行くその間にいつしかあの通りの色に染まつてしまつた譯なのである。さす
がに火車の中では夜汽車の頭等客（一等客）ならともかくも、それにしても同室の客の手前又、
車中煙臭の氣の擴がり易いので遠慮することと思はるるが、しかし車掌と了解を得て、ボーイの
内職にその用意をさせることは、支那のことだから不自由なことはない。ところが船中であれば
これは殆んど自由自在で官艙（一等）房艙（二等）給艙又客艙（三等）と、そのどこに在つても
勝手に支度をさせることが出来る。又中には自分で銘々荷物の中に忍ばせたその七ツ道具を取り
出して、薄暗いところでそろそろやり始めようとしてゐる場面を見ることさへある。

かやうな風で支那は水村山郭いづれの地へ行つて見ても、阿片は盛に徹底して行はれてゐる。
知らない人でもその阿片の煙の香氣を一度嗅ぐときは何の香氣であるかは知らなくともいかにも
支那らしい香であることに先づ氣がつく。部屋に入らない前その香を鼻に受入れる。慣れぬうち

一種云ふに埴へぬ亡國的な惡臭として感ずることであらう。殊に見たところ薄氣味の惡るさうな
風態の農夫たちの姿が目に入ると、何だか物凄しい氣持もしたりして何となく不安の氣に襲はるる
こともあるであらう。然しそれも二度三度と重なるにつれて悪くなくなつて來るのは面白い。

支那人の中には、阿片があればこそかうして毎日を愉快に送つてゐられるのだと話をしてゐる
者がある。こちらにかなりある。重要使命を帯びて日本へ來朝せんとしてゐた南京政府の某大官
も、いつか日本と云ふ國は阿片禁制で絶對の力を振うてゐる國だと聞いて日本行は中止だと云ひ
出し遂にそれきり取り止めにした事實談さへもある。これなどは船の中であれば上海出帆するな
り例によつて直ぐ色のついた爪でやり出す先生であらう。

阿片の好きな人が、旅行に阿片吸煙器一切を携帯して歩くことは何も不思議なことでない。日
本人ならどんな香煙黨でも時として外出にキセルを忘れるくらゐのことはあるが、連中は決して
忘れない。普通のタバコ黨にしたつて支那では、古風の水煙袋と云つて水中を潜らせる香煙の雅
器を持つてゐる者もある。外出するときには之を樂しげに携へ水をガラガラ云はせてゐ
るくらゐである。支那人の嗜好趣味家と來たらとても悠暢で小鳥の鳥籠さへ提げ散歩しながら小

鳥と物語りをしてゐる先生すら見受ける。どうしてあれほど香ばしい阿片の好きな先生が之を忘れて行つたりするところがあるだらう。自分の身體は忘れるところがあつても吸煙器の一組みばかりは第一に用意すると云つた程の心掛けである。本當にそこまで深く嵌つてゐる。

それと云ふのも生理的にその人その人によつて時間が定められ、間歇的にからだの調子がちがつて来る。若しその時が来てゐて之を吸煙しないときは、目眩ひがしたり、悪寒を覺えたり、冷汗をかいたりして見る見る蒼白の顔になり、とても見てゐられないのである。そこに恐ろしい肉體的苦痛苦惱が始まる。醫學上それがどんな工合に症状を起してどう云ふ経過をとるものか詳細の事は云へぬが自分は、その癮者と談笑してゐるとき俄かに相手が變な調子になつて來たので相手がたにそつと注意を促した事さへある。それは人道上の問題であると思つた。

臺灣總督府ではその臺灣籍民でその癮者の程度に達してゐるものには之を公然許してゐる。一週間いくらいくらとその人人によつて分量を限りミトメ印を携帯したものに限り官許を與へてゐる。相當に高い税金を課してあるので今のところかなりの歳入になつてゐる。又專賣局内部には事實上阿片を試験する人を必要としてゐて、そこに月給でかかへられ毎日阿片室に納まつてスパ

スパ吸うてゐる老爺がゐる。責任のある仕事であるとは云へどんなに阿片黨の連中からうらやましがられてゐることか知らぬ。

阿片は呑みつけたら最早や止められなくなる。その中毒状態に達した者は毎日必ず吞まなくてはならぬ。日本へ旅行して來る往來の間だけを中止しておくなど云ふわけにはまゐらぬ。酒やタバコや女などとその點はちがふ。ちがふ處にそれの特徴があるとも云へる。支那では紳士も又田夫野人もその旅行に際しては吸煙器を持參すると云ふ譯がほぼ之で了解せられたことと思ふ。船中でもボーイがその心持を察してゐてくれてゐるし、又買辦（コンブラドル）の方でも勿論萬事心得てゐてくれてゐる。客の方でもそれを當て込んで乗船するものもある。陸上では公安局の目が光つたり、それが宿屋客棧にど鳴り込んで來たりするが水上の船と來たら安心なものである。水上署のものや税關の人間も來ることは來るが、もともと嫌ひな先生ではないし、袖の下次第ではどうにでもなる。その邊は双方でわかつてゐる間柄であるとして、とも角治外法權の別天地だらう位に考へられてゐる。そこに平和な一輪の明月が照らしてくれてゐるのである。

支那船内部の雰圍氣と云ふものは乗つたことのない人には判らぬが一種特別の乗合ひ和合の情

趣の充ちたところである。昔から吳越同舟と云はれてゐるくらゐで雲煙萬里の人同士の寄り合つてゐるところ、その乗組みの人狎れのしたのが殊に客の心を牽きつける、又その御愛想もよい。胡弓を弾じて月下に異郷の情を慰めてくれるなど又とない人情美が味はれ詩的のところがある。かう云つた場面に阿片を呑み呑み、耳を欬ててゐれば必ず華胥の國以上の天國へ遊びに行くことも出来るであらう。支那の旅行者が阿片器を携帯して行く習慣のあるが爲めに竹の煙管がゴムの管で出来るやうになつたり、又大の紫檀の盆が小さい眞鍮製の便利なものになつたり色々その向き向きに歓迎せらるるやうに出来てゐるのを見る。

日常生活の表裏

日常生活の上に、阿片が云々など若し今の支那青年たちをつかまへ語り合ふと大抵は迷惑がつた顔をする。これは面子論から来る顔付きであつて大衆なり阿片黨なりをつかまへて語るときの空氣とはちがつてゐる。青年たちは今のところ國際聯盟から問題にされて見たり、又人道問題からやかましく論議されて見たりするのだから之を遠慮したり、又迷惑がつたりしてゐるものと見

られる。又事實青年期の者はあまり飲んだこともない人が多いのだから、あの香ばしいやうで油こい妙味のある美しい境涯は理解せられてゐないであらう。知らぬのだから迷惑がるのも無理のない話である。つまり阿片はその日常生活の裏の裏を流れてゐる嗜好品であるから表面立つた話にはしない方がよいと考へる。又その爲めに隠語や手の言葉が出来てゐる譯でもある。しかし日本ではそれが禁止され絶対に器物もキセルも何も入れさせぬ法律になつてゐるのであるから、一層日本人の心には不可思議に考へられてゐる。毎回支那風俗の話をする度に一つ阿片の秘話をしるなどと質問を受けるのである。日本人一般には確かに阿片の正體をつき止めたいといふ獵奇的な氣分が多分にあるらしい。さらばと云つて上海、漢口から奥地あたりに入る機會があつたとしてもその阿片の現場に奥深く分け入ることは危険が伴ふものの如く杞憂を抱いてゐるものが少なくない。何少しの危険もあるわけなくむしろ支那風俗の機微を知るには最良の場面が見出さるのであるが、それにしても怖ぢ氣がさきに立つてただ物凄じものと相場をきめてゐる。ここにはいかに之を見たり踏み込んだりしても自分の爪のあかくなるほど之に淫し又癮者となるほど溺れるのでなければ決して恐れたりすることはいらぬと云ふ點を明かにしておく。

阿片にからまる興味關心と云ふものは今や國際的にひろがり聯盟では人道主義の上からヒュマニズムに反するからして之を云々と云つた議論が出てゐる。支那自體は外からいくら何と云はうが止められぬから續けるのだと云ふ行きかたである。いくら法律でやかましく云つて見たつて役人自身が之とぐるになつて黒貨（阿片のこと）を動かしてゐる以上之がやまる譯がない。支那の内部と云ふところは法律の力とか役人のにらみとか云ふものが一向效力を現さない。いくら國法をふりかざして見たところで役に立たない。それもその筈である。役人自身がそれを守るつもりでゐないし、さういふ腹を持つてゐないのだからいい加減のものである。人民の方でもそんなものと承知してゐる。そこらは實によく出来てゐる。支那式にゆとりがあつて面白い。

さればひとり阿片のみと限らずあらゆる國法がそれ式に見られてゐる。そのうちでも阿片は特に酒色以上に好まれてゐるものであるから、假令一部青年者流が拒毒會（阿片禁止會）の力で之を防止しようと努めたところで、滔々として押し寄せる阿片王國の阿片熱には抗するわけにいかぬ。外人の方でもその熱烈な欲求を見越して印度棉を積んだ形に見せかけてゐる貨物船が來て見たり又アラビヤから大船で直航して持つて來たり、色々その間に苦心をしてゐる。そして落着く

先は支那の某方面の手中に這入ることにきめられてゐる。吳淞沖渡しとか、舟山列島の島影などで月明にかなりのグロ的方法で取引されてゐる。隨分命をかけての物數寄な密輸入であるからその代りうまく這入つてしまへば、それこそたいしたものである。その爲め某大國の大ビルディングが、漢口のバンドに巍々乎として聳ゆる建築をさえもなしたと云はれてゐる。漢口界限の口さがなき連中は、珍らしげに語り合つてゐるが、これ位の事は支那到るところに澤山あるものらしい。又あるのが當然でもある。

友あり遠方より來たる、また悦ばしからずやとあつて、支那老爺の家庭に訪ね入るときどうかすると、先づ以つてその豆ランプに火を點じキセルに阿片膏をつめて、さあ、お飲みなさい！と許り手にとつて渡してくる。これは日本人では田舎に行くとき酒の燭徳利を用意されて抜きさしならなくなるのと似たものである。そこに人情美の發露がある。これは酒を提供されたよりも一層敬意を表はされたわけになるのでその好意は無にするわけにいかなくなる。そこに支那民族性の本當の現はれがある。支那人を云々するものが、ややもすると唯表面的なテーブルスピーチを交はしたり又俱樂部で談笑したりしたただそれだけで肝膽相照らしたやうな氣持になる

者もあるが、本當の處はその本筋まで這入つたものでなくては判りつこない。その間の心情その間の天地は全く別なものである。阿片にまつはる風俗がわからなくては本當の支那の話は出来ぬ。ただ日本では話にくい事が幾多あるので〇〇を用ひなくては全部説明の出来ないことの多いことを遺憾に感ずる次第である。

車中の香煙

シヤンエン、シヤンエンと耳に立つやうな聲を連呼して、賣子が支那火車（汽車）の中に賣り歩く。シヤンエンとは支那語であつて、字は香煙と書く。香煙の香は、シヤンピン（香賓）のシヤンと同様、又イピンシヤン（一品香、旅館名）など云ふと同じく、支那ではかなり響きのよい音とされてゐる。

支那の香煙には、紅錫包があり、ハータメン（哈德門）があり、外國からの舶來タバコ、其の他色々のものがある。車中に賣子の賣りに来るのは、大抵安い紅錫包あたりであるやうである。客の中には、シイコワツ（西瓜子）を買つたり、ナンコワツ（南瓜子）を求めたり、ピンコ

（苹果、林檎）を買つたりしてゐるものがある。何れ手持ちぶさたや、時間つぶしに求める西瓜の種であつたり、南瓜の種であつたりするのだから、たいした物はない。その無雜作に、手の爪に垢のたまつてゐるやうな指で摘んでくれるのだが、之を氣にしてゐては際限がない。しかし之を買ひ求めたものは、隣り近所の相ひ乗りの客に、之を如何です、と愛相もよく出しひろげ、先づ自分でつまみ、齒と舌の尖端とで巧みにこなし、皮を吐き出したりなどする。

自分は香煙をのまぬ、と云ふよりは、生來喫めないで車中でも之を求めたことがない。が、しかしだんだん車中で話相手になり、相手の氣持もわかりかかつて來ると、隣席の香煙黨は紅錫包を買ふ。そして自分が喫めない人間であることを知らず、朗らかな氣分で一本呉れたりなどする。すぐそのとき、ブチエン（不吃煙）と云つて自分は喫めない事を云つて斷つてしまへばよいのだが、話の様子で、その時機を失することがある。すると勿論喫める人だと思ひ込んで客は、自分の鼻もとのところへマツチまでつけて持つて來るやうなことになる。

支那の習慣では、人を訪ねて行つても、第一に客室で先づ香煙を出し、主人公自らヤンホ（洋火、マツチ）をつけて、親しくその客の口もとに持つて來る。ボーイにでもつけさせたらよささ

うなもの、支那の社交儀禮としては主人公自らがこの禮をとることになつてゐる。客は恐縮して之を受ける。その間の主客の殷勤な様子と云つたら、新派の芝居にでもありさうな恰好であつて、全く見る目も嬉しいやうである。香煙の喫める人同士は、あのやうに愉快な恰好をしてゐられるものかと自分などはうらやましく感ぜらるることもあるのである。

しかし自分は、車中で之を人から貰つても、折角の好意を無にせずどうかすると、もらつておいて人にゆづる事もあるが、大抵はいきなり左手を下の方におろし、人にわからぬやう五指をひろげ、手首を折つた形で横にかかる振る。イリマセヌ、結構デスの意味を柔らかに表現したるしである。これは第三者に知らせぬやうするので、無論支那式のやり方なのである。いきなり、ブチエン（不吃煙）と云ひ切つてしまつては、何だか失禮のやうな氣持もするので、間接にかやうに心づかひをするわけである。

香煙が喫めないから、自分は之を預かるだけのことだ。その香煙一本の提供如何と云ふことが、ひどく車中の友情を暖め、あとで色々の話題を進めて行く上に、好都合になるものである。香煙そのものよりも、その向ふの人の好意心境がわかるので、知らぬ旅の人々はタバコによつて

よほど接近し易くなる。吳越を界する錢塘の渡船で、所謂吳越同舟してゐるときなどでも、たつたタバコ的一本で、惠風和暢の情趣を漲らせることも出来る。人はどうかすると、支那内地の旅を頭から危険がつたり嫌つたりするものがあるが、人情に變りのあらう筈はなく、タバコが取り持つ縁で吳の國でも、越の國でも、心なだらかに遊歴することが出来るのである。タバコに限らず蓮子であらうが、キヤラメルであらうが、同じコツで行けるのである。

しかし中でも、香煙の清興氣分くらゐ、氣分のよいものはなく、殊に團體の太いその相手が自分でマツチをつけて、態々立つて来てくれる心情に至つては、いくら儀禮の國とわかつてはゐても、高雅な氣分にすつかり打たれる。日支交渉なんかでも、いつもこの氣分態度で行つたとしたら、さう蝸牛角上の争に、火花を散らさずとも、うまくやれることだと察せられる。

車中でタバコを縁の社交ぶり、親しみの四方山話くらゐから、萬事がすらすらと解決せらるるなら、誰れ人も日支交渉に苦勞するわけのものでもあるまい。がしかし、又翻つて考へると、このタバコ氣分の親しみが、いつも日支兩國要人の間ばかりでなく、専門家同志の間にも、商人同志の間にも、青年學生同志の間にも、と云ふ風にこの氣分が濃かに網目のやうに編まれてゐるの

であつたなら、存外何事もなく和平裏に片付くものかと考へられる。國民外交の要は、むしろ肩を怒らし聲を大にして對峙するにあるのでなく、全くこのタバコの橋渡しにあるべきものだと思ふ要領で行きたいものである。

奥地に見る喫煙風景

自分が湖北から、四川の方面を行脚してゐたときのことであつた。三峡裏山の方面に、農家の軒にたくさんの煙草の束ねた者が、列をなして幾條となく吊るされてあるのを見た。雨にあてぬやうにと、うまく軒にかけぼしでもしてゐたのかも知れぬ。

四川の奥地へ深く行つて見たことがあるが、瀘州邊でタバコを刻んでゐる店頭の庖丁を見ると、日本出来で泉州堺のものであつたことを記憶してゐる。全く存外なところに、日本品の調法視されてゐることがわかるのである。あちらでは日本のやうに之が専賣と云ふわけではないのだから、何れの民家にもどつさり貯へられてゐる。山家や田家のそばを、チャオツ（轎子）で遊歴してゐるとき轎夫が路傍楊柳の下に、肩を休める爲め停まることがある。休んで一ぶくすると云

ふとき、自分は、何心なく山家の門に近づいて見ると、その軒下に吊るされた枯れた煙草の葉を、轎夫ども脊伸びをして引き取り、平氣で失敬してゐるのである。

人の物は自分のものだ、と云ふ極めて輕微な謂はば大ざつばな共產氣分のやうなところもあるものと見える。取る方でも平氣だがしかし取られる家の方でも又平氣なもので、そこが頗る鷹揚に見えてゐる。山家の風習にはよい處があり、伸んびりした處がたしかにある。上海あたりの生き馬の目を抜くところなんかとは大分變つてゐる。

自分が重慶遡江の途上であつた。峡中靈泉禪寺の或る石窟の奥を訪ねると、轎子をやとひ出かけたのであつたがそのとき、山路半ばにして休憩をした。偶々その場所が香煙の葉の吊るされてあるうちの前であつた。自分は門前竹林の側に立つて、しばし低回、あたりの山水風光などを賞してゐたところ、その山家から一人の白眉翁が姿を現はして來た。見ると手に五尺もあらうと云ふ自然の竹管そのままの長キセルを持つてゐる。水牛の吸ひ口がついてゐて、雁首は自然の竹根の部分のふくらみのある處を穿ち凹めて出來てゐるのである。やがて翁は、手を伸ばし軒端に吊るされた例のタバコの葉をむしり取るのである。そして元始的なキセルの雁首に、くしやくしや

に揉んで詰め込んで之に無雑作にマッチをつけて燻らすのであつた。

その口を開いて煙のうは飲みでもするやうに喫み始めたときの様子と云つたらない。太古の神農氏の再来でもあるかと思はれた位である。キセルの長さと言ひ、又その恰好と言ひ、又そのキセルの吸ひ方と言ふ、丸で現代ばなれのした眺めであつたのだ。支那も一千里の奥地でなくては、かうした秘境風景は見出されないものだらうとつくづく思はれたのであつた。その軒端に吊るされたタバコの葉と言ひ、白眉翁の姿と言ひ、珍らしい一幅の畫韻を湛へてゐて、何とも云へぬ仙境氣分を嗅られたのである。

同じ長江でも中流の漢口や、下流の南京上海は、ウエストミンスターだの、スリーカツスルだの云ふ、ハイカラな香煙の行はれてゐるところであるに引換へ、その上流の奥地にはかうした浮世離れのしたタバコ風景が見出される。その邊はかうした大支那の天地でなくては、好個のコントラストを見出し得ないのでないかと思はれる。

支那の奥地秘境に行つて、かう云ふキセルの長いのをを用ひてゐる處は、ここばかりでない。恐らくその竹管の長さの長ければ長いほど煙の風味はよいわけなのであらうから、その手に持てる

程度の許すかぎり長く作らうとするのは、自然の勢であらう。安徽省九華山の林下をあるいてゐるときも、チンヤン（青陽）あたりの田家でかなり長いを見た。六尺くらゐもあつたかと思ふ。右手にその六尺のキセル、左手に大の團扇を持ち悠々天下は太平だと云つた静かな煽ぎ方をしてゐるらしく、こちらをぢろりぢろり見てゐる恰好と云つたら、何とも譬へようがなかつた。支那内地のタバコの風習は、かうした長キセルや老翁の悠暢な姿と併せ考ふることによつて、本當の地方色がここに拔出されてゐる。ここに於いて支那大自然の奥地の景趣と、この邊りの情緒と、ピッタリ合つてゐることがわかる。國民政府がどちらに向ふが、蒋介石が蜀の國に飛ばうが、大空を行く白雲くらゐにしか見てゐないだらう。否それほどにも考へて居らず、てんで殆んどあたまにないと言ふのが本當の心境なのであらうと思ふ。

日本の人は、新聞紙上ではやれ蒋介石の、やれ汪兆銘のと政治上の渦巻のみを見てゐて、その他のひろい舞臺は殆んど考へようもしない。政界外にどんな大きな天地が残されてゐるか餘り考へない。ところが支那は、タバコ、キセル、白眉翁を通して見るだけでも、これほどの面白い別天地の残されてゐることに氣が付くのである。

ここに少しく滑稽なことを附記して見ると、日本の人はキセルの灰を雁首から落とすと云へば、手でボンとたたいておとすにきまつてゐるが、支那の長キセルを用ひてゐる老父たちは、そこを見てゐるとあの支那靴で以てボンと蹴り出すのである。雁首を足で蹴つて灰を出すなどは、天下の奇観であると思ふ。どうせ酒盃にも匹敵するほどの大きい雁首から出る灰の塊りなのだから、足で蹴つても不思議はない譯だがとても珍らしく見えた。足を使つて蹴つても蹴り甲斐のするほどの灰である。そのときの現場を見てゐる自分には、實感が伴ひ、いかにもユーモラスに思はれた。読者はその有りのままを想像して見るだけでも、如何に支那の奥地の、文化の變り果ててゐるかが判ることであらうと思ふ。

王侯の香煙・苦力の香煙

王侯でも、細民庶民の階級でも、別に人間と云ふところに變りのあらう筈はない、と云ふ支那流の考へ方は、タバコ趣味の上に、最も露骨に現はれて來てゐる。日本では、埃及の葉巻でも喫むものは、多少上層階級の人、ブル階級のものに限るくらゐに思はれてゐる。よくタバコ喫みの

内情は自分は素人で知らぬのであるが、とかくタバコ位のものにさへも差別待遇が出來てゐるやうに感ぜられてならぬ。

ところが、支那ではどうかと云ふと、裏店の路次に住む人間でも、葉巻が喫みたいと思ふときは、いつ何時でも路次の入口のタバコ屋（兩替を兼業）で、之を買求むることが出来る。その價は極めてお恰好で、日給労働者も無理をしなくともよい相場で賣つてくれてゐる。固より之に金色の紙帯が巻いてあつたり、美しい飾りのある函に入れられてあつたりするのではなく、全くの裸かのまま、店棚に列べられてゐるのである。紅錫色などの上等品は求め得ないものでも、葉巻は之を求むることが出来る。好き好きによるものだから、どうにでも勝手に求められる。葉巻きと云ふ言葉に見えてゐる通り、葉巻は葉巻でもタバコの葉がグルグルと巻いてあるだけのものである。刻んだり、包んだり、面倒なこと一切が省かれてある代物なのだから、安いのは當然である。原則的に云ふなら、全くさうあるべきである。その原理原則のままに、之が細民部落の手に販賣されてゐるのだから愉快な國である。

日本には、高位高官らしく、又細民は細民らしくせよ、と云ふ傳統的の舊習がまだ多少共残つ

てゐる。八百屋、肉屋の御用ききが葉巻などくゆらせてゐたとしたら必ず何とか云はれる。いくら云はれたつて、よいわけではあるが、人もわれもそれを多少氣にする。こは身分の考と云ふものが、いつもついて回つてゐるからである。支那は、そこへ行くと、王侯でも、宰相でも、大將でも、新兵でも、氣樂なものである。乞食風情であつても、威張つて市中城内を大道狭しと潤歩する。苦力の親方のチンパン（青幫）杜月笙はその雄なるものこの人の前には、あの天下の蔣介石その人でさへも、あたまがあがりつこないものである。この一事を以つてしても、支那の社會には、上下の別があるやうであるがその實がないと云へる。従つて、いくら細民苦力にしたつて、人の奥めぬわけがあるかと云ふ立前になつてゐることが判る。道理で、支那の碼頭船着きありの荷役をしてゐるクーリ（苦力）も、随分立派なタバコを、いつも口にしてゐることがある。それが又支那では、随分値段安くも出来るのであるから驚かざるを得ぬのである。

細民御用ゴモク煙草

この話は支那でなくては見られぬ珍談であるから、細民御用ゴモク煙草、特にここにタバコ物

語の一挿話として紹介し、自分の見たままを研究家の参考に供給しておく。

支那には、細民の喫むゴモク煙草と云ふものがある。これはその始めから最も大衆向きに出来たものであるが、そのタバコの作り方を、自分はよく船着の雑踏してゐる中心地點で現場を目撃してゐるのだから、なるべく詳細にここに描いて見たいと考へる。

上海にセロブ（十六鋪）と云ふ處がある。こは支那第一の人氣のわるい船着場即ち碼頭である。グロ氣分百パーセントの處とも云へるところで、白晝でも泥棒小盜兒の出るところで行人はよほど氣をつけてあるかないと、財布をすられてしまふと云はれてゐるところである。自分は、上海城内は、高昌廟であるとか、半淞園であるとか、乃至は小東門あたりの散歩の歸り、よくこのセロブに順路だから出て来る。フランス租界の電車に乗るに、よい順路に當つてゐるからである。ところが、そこはあの雑踏してゐる出船入船の客、その客をあて込み品物を賣り付けに行く行商人、それから荷役の労働者に、荷主、輪船公司からの係員、乞食、支那巡捕（巡查）に、支那の役人、老若男女、外人、支那人、日本人、黒ん坊、赤ん坊、茶色、すべてあらゆるものが集まり、立錫の餘地のないやうなところである。日本人は怖がつてゐる者が多いから、あまりそこ

へは出入しないが、支那の人は、海産物商、雜貨商、仲買人を始め、運送屋、ワンバオツオ（黄包車）、馬車、何と云ふことなしに上を下へのごつた返しをやつてゐる。而かも毎日朝から晩まで、これであるから、その船着きの恐ろしさと云つたら大抵想像がつくであらう。

そのセロブ（十六鋪）のワンプ（黄浦）江上に面した倉庫の壁下に、乞食に近い人間が、何かしきりとタバコを巻いてゐるやうな事をやり、大勢の行人の足をとどめてゐる。黒山のやうにと云ふほどでもないが、十人や、二十人はいつも周圍を取圍んで之を見てゐる。口をあけてポカンとしてゐれば、必ずやられる。あまり、ポケットに持つてゐる人間は、見物人中にゐないやうだから安心かもしれぬが、ともかく人氣のわるい處である。その眞ん中に細民が、一人敷物も布かず、地べたに腰をおろしタバコを巻くことに餘念がない。ここで一寸注意しておきたいことがあると云ふのは、支那は火車站（ステーション）に行つて見ても、ホテルの入口に行つて見ても、紳士、淑女外人あたりのタバコの吸殻を途上に投げ捨てるものがあると、小さい乞食の子供たちは、之にたかり奪ひ取るやうにして拾ひ、之を口に持つて行く。そして更に吸ふて見たり、又その火の消えたのは集めて、之を箆の中に納めたりなどしてゐるのを到る處で見かける。聞く處に

よると、上海には、これらのタバコの屑粉を買ひ取つて呉れるところがあり、それへ持つて行きさへすれば、いくらかになる。その爲め我を先にと之を奪ひ取り、自分の収益にしようとしてゐるのであることが判る。

壁下の隅つこに陣どり、踞坐してゐる細民先生は何をしてゐるか。その手仕事を今かうして見るのは、タバコの問題ばかりでない。支那の社會と、今日の世相を見極める上に、大切なものがあるから、自分は特に興味深くそのサークルの中にわり込み、熱心にこれを見たのである。先づその坐つてゐる圍りには、新聞紙をひろげてゐる。之にタバコの屑のうんと積んである山がある。例の各處でひろひ集められたもので、この中には西洋の舶來タバコもあれば、支那出來のものもあるわけである。それがどこから集めて來たか、ウエストミンスターや、スリーキヤスルの美しい空函などである。よごれてゐないのが、澤山これも又山のやうに集められてある。これも又古もののみ集めてゐる。會社でも別にあつて、そこから譲つてもらつたものかも知れぬ。尙新聞紙の上には、手前の處に糊がおかれ、小さい刷毛もおかれ、そして肝腎な薄いオニアンペーパーが支度されてある。丁度タバコ一本を包むだけの大いさに切られ、之が澤山に積み重ねら

れてゐる。それから、匙があり、又タバコを盛つた紙をクルリと入れて巻く簡単な仕掛けのスタレ式の道具もおかれてゐる。

それからそこでやつてゐる工作ぶりを見ると、極めて鮮かなもので、手前の小さい臺の上に先づその薄い紙をとり、爪で剥がして持つて来る。それへ匙で一杯すくつて、五目のタバコをうづ高く盛る。それがきちんと一定の分量になるやうに出来てゐることは云ふまでもない。之をそのスタレ式の機械にかけて、クルリと一回轉廻せば、それで巻き煙草の形のもが出来る。それを糊付けして、それから吸ひ口を挿し込む。出来たものが、十本づつ溜められると、之が別の紙でくるまれる。くるまれたかと思ふと、之をきれいな空函に納めて行く。その間が僅か二三分出来あがる。その空函の色は一定せず、色々の寄せ集めものである。それだけに美しさが一入で色とりどりなるところに特徴があると云へる。

この工作の場面を見つめてゐる見物人のうちに日本人は唯自分ひとりだ。でも自分はいつもの支那服支那帽姿であるから、すべて皆中國人のやうに見てゐる。日本でなら、それだけの工作を見てゐたなら、そのうちの一人くらいは、その出来立てのものを「オイ君。ソレヲ一ツ」と

云つて氣前よく買ひ求める者が現はれるところである。ところが支那のかうした社會にはそれは見られないのである。

尤も大道でやつてゐる手品輕業（武術と云ふ）のやうなものには、いくら勞働者風情でも之を立ち見してゐた者は、自分がそこを中途で立つとき、大抵ものの一錢や二錢は喜捨して行く。之をだまつてかねも投げずに行くやうなことはせぬ。中には、帽子を持つてあとで錢を集める子供が来る段となると、サツサと知らぬ顔で姿を消して行くやうな思ひやりのない者も稀にはある。が支那では、そのやうなことをするのは滅多にない。あれも、生活の爲めにやつてゐるのだとの理解、同情を以つて見てゐるのだから、社會政策的の氣持はおのづから實行されてゐるわけである。思ふにそこである。そこに支那の支那たる處がある。人から云はれてするのでなく、むしろ云はれずとも、自分でするといふ風の雰圍氣が漲つてゐるのである。

ところで今支那のタバコの場合にはどうかと云ふと、その出来立てのものを一函、函ぐるみ買つて行つたら、よささうなものである。價も比較にならぬ程に安い。五分の一、六分の一の價でわけて呉れる。けれども、その十本入を求めて行かうとしない。不思議に思はれるが、事實さう

なのである。すべてが廢物利用の寄せ集め物見たやうなものであるから、十本入を求めぬ氣になつてよいわけであらうに、そこに心持が來ないと云ふのは、そこにわけがあるのである。

ゴモク煙草の工作が進むうち見てゐると、それを出來ただけ一函づつその倉庫の壁の根石のところに立てて見たり、列べてみたりしてゐる。次に出來あがるのを見てゐると、先生その函の小口の一隅に小さい穴を穿つ。その穴から一本引出し頭を覗かせてみたりする。穴をあけると、その函は傷物になるわけだが、それをも押し切つて穴をあけるとは相當譯のあることである。一本の卷タバコを、その穴から半ば抜き出し、あたまを出しておくことによつて、客はそれに目をつける。誰れしも懐ろ工合と相談である。一函買ひ求めるには持ち合せが足りない。タバコは欲しくはあるが、一函買ふのは勿體ないと來る。一本賣りをしてくれるなら、早速求めようと云ふ心境になる。又事實さう云ふ手合のものばかりが集つてゐるのだ。

ゴモク煙草の工人は、その人心を見てとつて、ちやんと心得てゐる。先づその一本あたまを出して列べると客の目を之に牽きつける。早速そこへトンペイ（銅幣）を出す客が現はれる。そして一本呉れ、次の一本を呉れ、又その次ぎをと云ふ風に續々賣れる。忽ち羽がはへて飛ぶ形である。

ある。全く人心の機微はここに在る。細民のポケットから云ふと、一度に函ぐるみは贅澤だ。十本入を一度に求めて見たつて、一遍に皆喫めるものでもなし、あればあるで餘計な不經濟と知りつつも煙にしてしまふ。チビチビ一本買ひをする方が、ふところの都合がよいのだ。しみつたれなやうな考方ではあるが、支那の細民の胸にはここまでの考へがある。その代り江戸ッ兒の式に宵越のかねは持たぬ杯と云ふやうなのは、一人もゐない。皆持つてゐないやうな顔をしてゐて、あれでいざ嫁取り、聳とりと云ふ段になると、相當な堂々たる料理店、茶館、酒樓に上つたり仲々相當なところをやつて見せる。國情が國情だから、支那の人は日本人とはちがふ。自分で始末しないことには、銀行も當てにならず、結局は政府も、法律も、辯護士も皆だめだと云ふのであるから、どうしたつてここに來るの外ないのである。

ゴモク煙草一本買ひをしたからとて、之を守錢奴のやうに評するのは認識不足も甚だしい。かやうに見て來ると、細民部落に働くタバコの作り方と云ひ、又その賣り方と云ひ、又その買ひ方と云ひ、全く世界獨特の色彩を帯びてゐる。そして之が支那でも、最も人目を引いてゐる上海の城内、黃浦江沿ひのセロブの話と云ふのだから面白い。支那世相はここまで來てゐる。

最近にも自分が北京から、密雲、クペイコウ（古北口）、承德と歩き熱河の田舎に、或る日の午後三時の休息をとつた。トラックから下車して涼亭の綠蔭に凭り、茶をのみ、ゆで卵をたべてゐた。十錢で七ツと云ふのだから、熱河の田舎の雞卵はまだ相當に安い。それでどうであるか、細民百姓達は、かなり生活が苦しいわけであるのか、乞食同様の子供が足もとに來てもつれてゐる。そしてあのゆで卵の皮をむき、殻を落してゐると、その殻についてゐる薄い紙のやうな表皮を犬のやうな恰好して、その子供たちがあちこちとひろひとり、之をしゃぶつてゐるのである。實に涙の出る話ではないか。これは二十年前、自分が山東省、曲阜の田舎、鄒魯の寒村で體驗したことと、同じ話であるが、支那も滿洲國も、その細民部落の間に這入つて見ると、全く同じやうなことが目撃せらるるのである。

之を思ひ、上海セロフの船着場のことを考へて見ると、先づ以つて似たやうな話である。同じ人間でありながら、あのやうにしてまで、そのタバコ趣味の爲めに、懸命の努力と云はんか、苦心と云はんか、熱烈なる欲求を見せてゐるのである。ここにはタバコを通じて見たところの下層階級の支那生活が、どんなものなるかをあらましながら紹介したわけである。

嗅ぎ煙草の魅力

かぎ煙草の趣味くらゐ、又支那人生活のうちの優雅な氣分を見せてゐるものはない。上述の長キセルの話や、ゴモク煙草の話も、固より支那の或る風俗を示す一助にはなる。更に又支那社會の一方にはかぎ煙草の舊習をとどめてゐる一天地があるのである。

この方面は、支那の習俗を研究せんとする外人などで、その器物を蒐集する癖のある者の中でピーエンフ（鼻煙壺）と稱し、隨分熱烈な趣味嗜好が唆られてゐるのである。これは鼻に嗅ぐタバコを入れる小壺なのであるから、之を鼻煙壺と云ふのである。この小壺にはその材料と形の上に、愛すべきものが澤山あり、殊にその裝飾された圖案の様式には、最も鍾愛措く能はざるものがある。材料の方から云ふと、硝子（玻璃製）、水晶、瑪瑙、孔雀石（綠があり紺青色がある）、琥珀（玉蟲の綠色なるものの潜在せるものがある）、磁器（染付、描き畫）、端溪（硯材を應用したるもの）、景泰藍（七寶燒のもの）、玉類各種、堆朱、青銅、又は錫、眞鍮（これらは未だ見ない）とりどりのものが造られてゐる。又その口もとに用ひられた蓋には珊瑚樹であるとか、鍍金

ものであるとか、琥珀であるとか、色々のものがある。そしてその蓋に持つて行つて、小匙のくつ付いてゐるのが普通であつて、その小匙を以つて内容のカギタバコを一パイ、二パイとすくひ出すのである。

形状には、丸形、楕圓形、平扁、多角など、これ亦様々なるが、之をいつも身につけ携帯する上から、大抵扁平形となつてゐるのが便利とされてゐる。玻璃、磁器のものには、圖案に風雅典麗なるものがあり、山水、花鳥、人物、詩文など、その好みによつて翰墨氣分をそそれるものが見出される。外人や日本人は云ふ。支那の人には好ましからぬものがゐるが、これらの工藝品、殊にかう云つた細かいものには、愛すべきもの研究すべきものが多々あると。こればかり幾百千と買ひ集め又之を秘藏してゐるものも少なくない。又北京琉璃廠であるとか、又スウバイロウ（四牌樓）であるとか、上海城内湖心亭であるとか、小東門に五馬路、古坑店、又佛蘭西租界の李文珍あたりに行つて見ると、かなり又見事なビーエンフ（鼻煙壺）の陳列が見られる。中にも五馬路のイユエン（怡園）と云ふ茶館には、庶民級に向くところの代物が、處も狭いほどに出されてゐて八釜敷く客に迫つて來る。樓上の大變な雜踏のうちに、かうしたタバコの材料を見るの

は誠に面白う。

その嗅ぎタバコは粉末であつて、鼻孔の中に入れると、氣持が爽やかになる。夏季の溽暑の頃は清涼劑として最も喜ばれる。日本には口に入れる方の材料のみ多く、東洋流の鼻に嗅ぐものとしてはあまり用ひられてゐない。麝香とちがひ、樟腦とちがひ、沈香、白檀ともちがふ一種獨特のものであつて、あまり之を澤山鼻に入れる時は、クシヤミを催して苦しくなる。

支那では、手に夜光の珠を持つてあるとか、胡桃や、瓢の種を持つてあるとか、色々中風除けのものを、身からはなさないやうにしてあるいてゐる者がある。それをしてゐるのは多くは老翁であるとか初老以上の人であるとか云ふものに限るやうである。さう云ふ手合であれば大抵又このカギタバコの趣味を辨まへ、従つてビーエンフ（鼻煙壺）をポケットに携帯してゐる。外出散歩のときには之を忘れぬやうにしてゐる。人の宅を訪ぬるときも、自らその應接室で之をとり出して、自分でよいだけ出してゐる。机上、卓上に一と匙二た匙と風に吹き飛ばされぬやう注意して出し、薬指のふくらみに載つけて、之を鼻孔の側面潤ひのあるところに静かにくつ付けるのである。すると、大變な涼味を覺えて氣分がよくなる。阿片をやつたときの味のやうに、云

ひ知れぬ複雑なる風味があるわけではないが、しかし、たしかに颯爽と爽快な気分になり、その間
センチの情を帯びて来る。それだから、南畫をかいたり、詩文にたづさはつたりする文人墨客あ
たりは、いつも之をポケットに入れてゐて、ひまさへあれば鼻に少量づつ入れ、そしてかるく左
手で團扇をつかつたりなどしてゐる。

吳昌顔翁なども、あの高年になるまで、家庭でも、又仲よしの白龍山人王一亭翁の梓園に遊び
に見えたときでも、又虚明軒友永翁あたりと翰墨談を試るときなどでも、いつもその好きな鼻煙
壺を忘れないやうにしてゐた。時折り自分は之を褒めて見る。すると、翁は「あなたも一つやつ
て見ませんか」などとあの黄色い聲して、婆さんめいた相貌を崩し、白い齒を見せつつそろ／＼
御自慢のピーエンフを取り出すのである。そして、八仙卓上に、一と匙、二た匙と出してくれ
る。やり方が慣れてゐないので、要領がうまく行かず、少し餘計に薬指につけ過ぎ、之を鼻に入
れると早速クシャミが出て、ひどくやられる。その恰好が滑稽であつたと云つて、時々吳昌顔翁
から、人の中でひやかされたりなど、相當茶目氣分を満喫したこともあつた。自分も東京小石川
小廬の支那室に、このピーエンフを持つてゐて、時折り中華民国からの、遠來の客でもあつたと

きは出して話題のたねとしたり、勧めてお愛相にしたりなどしてゐる。

支那の刻み

支那のタバコにも、支那の刻みタバコがある。これを飲むには長キセルを用ひることもあるが
又シュイエントイ（水煙袋）と云ふものも用ひられてゐる。水中をくぐらせた煙を喫むのであ
るが、その水を潜らせた煙が、その首の管の長いところを通ると、その風味が増して來ると云は
れてゐる。従つて、その首の竿は長いほど喜ばれてゐる。景泰藍（七寶）のものがあつたり、白銅の
ものがあるが、近來出來るものは、とかくその竿がどちらかと云ふと、短かくなりつつあるやう
である。支那の舊家で隠居さんたちの用ひてゐるものには、古色蒼然たる上乘のものがある。見
るからに高雅な逸品である。これはその胴の中に入れられた水を潜らせるので、吸ひ口から喫ま
うとすれば、勢ひ水中に泡を生じ、ガラガラと音のする風情が伴ふ。

水煙袋の用法は先づチリ紙で燃つてある中空の紙捻に火を付け、之をくゆらせておき、いざ喫む
と云ふとき、之に息きをフツと吹きかくる。するとその勢で火が點ぜられる。その炎火を以てキ

ザミタバコに火をつくる順序になるのである。ピンセットや掃除用の刷毛の用意せられてあるものもあり、見るからに支那の文人気分をそそげるもの。これ亦支那生活を象徴するに足りる好材料として、ここに特に水煙袋のことを記する次第である。支那のタバコの話は、日本や西洋の風習と大分かけ離れ、それだけ世間の人にも知られて居らず、たまに書物文獻に散見するものも無いではないが、それは今日の現實の風習から大分かけ離れた處の多く、靴を隔て痒きをかくの感がないでもない。ここには支那の習慣にあまりなじまなかつた讀者の爲めに極めて平々凡々なことながら、當り前の事を述べたに過ぎないのである。

永久に搦めぬ大支那の正體

永久に擱めぬ支那の正體

北京の交民巷、正金銀行のカンメン看門に幾十年となく勤めたる好好爺の大男がゐた。別段その「貴姓」を尋ねたこともないが、一見その豊満にして愛嬌たつぷりの處は滿洲旗人の後か、それとも山東生れの賤しからぬ者の後でもあるかと思はれるほどである。その人相のよいこと愛相のよいこと、溫和な氣分で優し味のあることなどからして、實にさわりがよくて來訪者に好感を與へてゐた。

最近自分は香港、廣東へ漫遊に出かける船中で正金の武内金平翁夫妻始め六人半の家族打連れて賀茂丸に同船したことがあつた。そのとき金平大人の北京懐古の閑話中に、此の看門に就いての話題があつた。その日の夕食後、卓を圍みつゝ北京趣味話をかはしてゐると、金平翁の云はるゝに、「實際あゝ云つたおだやかな好人物を、支那民族の間に澤山見てゐるといふと、支那の社會に非人道な殘虐な仕打ちをする悪者など、とても出さうもないやうに思はれるのである。ところが昨今の支那の實際を見てもあの通りなわけであるから、本當に支那といふ國はどういふ譯で

さうなるのか判らぬ國だね……」と。

全くその通りである。自分共支那の國民性、支那人の性質に就いては人一倍その觀察を密にし色々考を怠らないやうにしてゐるつもりであるが、やゝもするとその人道を超越し國家を蹂躪するは固よりのこと、無茶をやつて恬とし恥ぢず丸で手のつけやうのないことをする。支那といふ國は全く判らぬ國であるといふ結論の出るのは自分も全く同感である。恐らく此の私見を讀まると讀者諸君に於いても自分と感を同じくされる方が多いことと思はれる。支那は國土もひろく従つて佛の如き心をもてるものや、何等惡心を挾まない聖人の如き感じの與へらるる人格者も實に澤山あるやうに察せられるのである。それは田舎の方に一步ふみ出して見るといふと、その環境の平和氣分に充ち満ちて人の心もよく出來て第一人格そのものも圓満に出來てゐる農夫、和尚、老爺、船頭、隱居、看門といった類のものは随分澤山あるのである。自分の見誤りかも知れぬが實際田舎の奥地に這入つて見ると、必ずしもその穴居の民を訪ねる事をしなくともかうした佛の如き人々に接することは決して少なくないのである。殊に田舎の百姓たちの中にはそれが多いのである。

支那はその田舎をあるいて見るといふと、いくらでもその惇樸、人をチャームするに足りる美風の保存せられたる者があるのである。支那の田舎宿に泊つてゐるときなど目に一丁字なき手合ひを相手にしてゐてさへも随分人物を見出すのである。之をその都會地、租界、城内、船着きの如き生き馬の目を抜くやうなところのみを見つめてゐる者には、とてもその理解のつかうわけはあるまいが、元來廣い支那のこととて、各省の郷土々々にはかなりその田舎の美風がそのまま遺つてゐるやうである。例へば

その一、田舎の農村の路傍に早朝より熱茶の接待があり大甕に杓や茶碗まで添へ、旅人に施しの爲め小屋掛の設備せられてあるのを見る。義亭から義亭に行く間のつれづれを慰する爲めのものであつて全く施しの爲めにできたものである。

その二、田舎の橋のない河流に、出くわしたときなど困つてゐるとその邊にはきつと只で渡ししてくれる義渡といふのがある。渡し賃を取らない渡しで誠に便利なものである。義亭、義渡何れも旅人には有りがたいものである。

すべてこれらを考へて來ると支那人に對し普通にもつ印象とはちがつた考を抱かせられるので

ある。實に平和といへば極端な平和の民であると云ふことがわかるのである。自分は幾度か又幾十度かその平和を愛する田舎の民衆に接觸したり、又その家庭をも訪ねて親しくその氣分を味つても見た。かれらの間には決して理窟はない。彼等はやれ民族、やれ民主、やれ民權といったやうなことはないのである。唯その人生を楽しみ平和を愛し、歡樂を求め長壽にあこがれ、富貴を欲して子孫の榮ゆることを、これ希望してゐるといふまでである。そしてそれ以外には八釜しい理窟を高調するなどいふことは一部學生、青年の間に澎湃してゐるだけのことであつて、田舎にはさういふやうな氣分は見出さないのである。

かくの如く平和の隨所に見出さるゝ反面、支那四百餘州には各所に時局にちなんで頗る平和ならざる風景が見出さるのである。これはしかし上述の聖人君子らしい好好爺の連中とは全く別關係にいくらでも突發的に起つて來るのである。一方にいかに多くの君子村、平和村が出來ても支那といふ國は又他方にいくらでも惡村が殖えて來て仕方がない所なのである。その君子村の善政に見做ひ他の地方はその蠻的行爲を根絶しさうなものであるのに、事實はいつ迄經つてもかかることがないのである。こは上に聖天子でも現はれ君臨すれば自然に止むが如く思ふものもある

かも知れぬがそれは事實に照して見れば、全く畫餅同様の考に過ぎぬのである。支那といふ國は一方に聖人も居れば他方には國を毒し國を奪はんとする大賊もゐるといつたやうな國である。非常な忠臣がゐるかと思ふと、それが一夜の中に主君に寢返りを打つといふことを何とも思はないと云ふ國である。さればこそ一方には大學者がゐて儒教の造詣に恐ろしい深い研究をしてゐるかと思ふと、他方には儒教なんか全然踏みにじつて而かも恬として恥ぢぬといふものも現はれて來る。文字を何よりも大切に考へてゐるかと思ふと、文字などは何とも思つてゐない亂暴な者も現にいくらでもゐる。さう云ふ兩極端なものが出て少しも差支ない國である。

一言にして云へば支那くらゐ矛盾の多い國はないのである。支那は好好爺ばかりゐて大層よい國であり、平和郷として立派なユウトピアであるといふことが云へると同時に、又實に無政府状態であつて、警察の實權の行はれるといふことがない國、權力者によつて政情が安定してゐると思ふと一夜にしてクウデターを行ひ、急轉直下に逮捕命令や暗殺を敢てせしむるやうなことをする國でもある。その暗黒面はとても日本人などの正直な純真なあたまの持主には本當に理解されることはあるまい。それ故支那を目して極樂淨土である、武陵桃源であるとして賞するのも當た

らない論ではないと同時に、又之を殘虐無道の國だと非難して蠻的視し三等國視し四等國視せんとするの無理ではない。どちらでも本當の取扱ひなのである。國際的に云へば弱い國であつて同時に又強い國でもあると云ひ得る。即ち弱きが故に強いとも云へる處に支那の姿が見られる。その大英帝國をへこたらしめた如き物凄腕を有してゐる點からいふと、決して並み大抵の弱國とはちがふのである。この邊を考に入れて支那を評するときは、支那には又孔子教を中心に論語一點張り、愛相のよい信頼の出来るやうな人物もゐる代りに、又いつ何時でも之を無視して何をやり出すか薩張り見當のつかぬ、奥底の知れぬ人間もゐるといふ決論を與へる外ない、といふが一番眞相に近い考へであると思ふのである。

支那人ぐらゐ芝居氣たつぷりな國民は無い。僅かこゝ半世紀の間にさへ王朝が變り幾度か政權が變つてゐるか知れないが、彼等はいづれも「人生は芝居なり、國家は劇的シーンなり」とばかり達觀し中折帽子を烏打帽子にかへたほどにも感じてゐない。泥棒をしても盗んだ品物をかへしてしまへば帳消しになると思つてゐるとはよく言はれることであるが、先般の大山事件に見ても分るやうに、彼等は大山大尉を慘殺したのに對してどこからか支那人の死體を搬んで來て、その

側へ置き「日本の方だつてこの通りやつてゐるんぢやないか、お互様ぢやないか……」と、帳消ししたつもりで抗議したものである。たとへそれが一分間位に眞赤な嘘と判ることであつても平氣なものだ。日本側にこんな立派な證據があるのだから、いくら支那だつて今度は兎をぬぐだらうなどと考へてもそれはこつちの考へだけで、支那側にすれば決定的なものでは決してない。これは支那の民族性なのである。日常のことでも「それみる、大嘘ぢやないか……」と扇でぼんと頭を叩いてやりたいやうなことが澤山あるが、彼等は叩かれたつて平氣なもの、かへつて叩かれたことで帳消しになつたぐらゐに思つてゐる辛抱強さには到底日本人は敵はぬ。人力車などに乗つて通ると、何處からとも無く、乞食や鼻つ垂小僧が迫ひかけて来て、人力車の前へころり轉がり、自分で道路へ自分の頭を叩きつけて血を出し、その血を顔や兩手へなすりつけて、「これほどの努力に對して、何故金をくれないんだ……」と食つてかゝる。いゝ加減に放つて置くと四回でも五回でも繰り返す。こんな時は面倒臭いので二、三錢つまみ出してくれてやると、又ついで来るから遠くへ放つてやる。草むらの中へでも這入ると、なか／＼見つからないので死に者狂ひになつて探し廻る。そのひまに人力車を急がせて逃げてしまふ。彼等は全く根氣のいゝもので、

目的の前には如何なる手段をも撰ばない。

そこへいくと日本人はあつさりしたものだ。友人に金を貸したと假定する。何か面白くないとがあつて喧嘩にでもなると、そんなケチのついた金アいらねえくれてやる。そのかはり今後は絶交だといふことになるが、それが支那人であると相手をおだてあげたり、茶館へ連れて行つたり、辛抱強くかゝつて最後にとろ／＼返させてしまふ。

大人ばかりで無く、子供だつて心得たもので、第一夫人と第二、第三夫人の子供では夫々權利がちがふので、自然着せられる衣類までちがつてくる。同じく日本に留學してゐる兄弟でも、宿屋の格からしてちがつてくるといふことになるが、これに對して日本のやうに露骨な喧嘩はしない。極めて上手に藝術的につき合つてゐる。かういつた「曰く言ひ難し」といつたやうなことは、いくらでもある。

或る友人二人と茶館へ行つた時の話、ボーイに「お茶がぬるくなつたからさしかへてくれ」といふと、茶碗をもつて廊下へ出るなりこのボーイが、がぶり残つた茶を口飲みにしたのを私も友人も見てしまった。やがてさしかへて持つて來たので、前の残つた茶はあけて、新らしくさしか

へて来たのかと聞くと、残った上へさして来たのですといふ。僕は馴れてゐるゆゑかまはず飲んでしまつたが、友人は汚ないボーイが口をつけたのを見てしまつたのでどうしても飲まうとしな
い。で、ボーイにお前が口をつけたのを見たから汚なくて飲めないんだと叱ると、ボーイの返事
が「ちや、見なかつたと思つて飲んでくれ」といふ。かうなると正に禪問答である。芝居な
どで日本では斬られて倒れた役者は、黒ん坊が黒い布を持つて来て観客に見え無いやうにしなが
ら樂屋へ落してやるが、支那では斬られると一人は倒れるが、のこのこ起きあがり大威張り
で樂屋へ引ッ込んで行く。支那ではこれは見なかつた、見えなかつたことにしてあるのである。潔
癖性の日本人には理解出来ない點で、偉大な大陸的國民性だと云へる。

私は獨り事變の上海を方々飛び廻り、便衣隊の中も正規兵の中も通つて来た。人は大膽だとい
はれるが、大膽でもなんでも無い。要はたゞ「無心」であることだ。幸ひ支那服も著馴れてゐる
し、多少支那語も判り、事情に通じてゐるせゐもあらうが、面倒になつた時は支那生れだが、日
本で育つたとか、父が支那人だとか出鱈目をならべると「するとあなたは混血兒ですか、へえ：
…」といつた調子で有耶無耶になつてその場は濟んでしまふ。

支那といつても都會の支那、田舎の支那、永久變らぬ支那、先走る支那といろ／＼ある。眞の
支那の姿などは容易に掴めやうも無い。エロの支那も本當の支那なら、親日の氣分の支那も本當
の支那である。見る角度によつて夫れぞれちがふ。日本のインテリが、たとへば菊池寛氏のやう
な文人でも行つて眞の支那の姿を各方面から見究め小説にでも織込んでくれるやうにならなく
ちや、日本一般の人々にはちよつと支那を理解することは出来ないだらう。

上海の藝妓屋街などへ行つてみると、鐵兜の陸戰隊員が銃剣をきらめかす。その走る姿に藝妓
など門口に立ち、ニッコリと微笑をおくつてゐたりする。日本の兵隊さんに絶對に信頼を置い
てゐるからだらうといへばそれまでだが、これが彈丸雨飛、瓦や硝子の破片がどこからともなく
飛び散つて來るといふ日支事變最中の上海風景なのである。日本内地の藝妓諸君にこんな眞似は
出來まい。どこまでも大陸的に出來てゐる。

窮すれば通ず、戦争でどんなにべちやんこになつても時間の競争で、即ち長い年月の間には最
後の勝利を得てみせるぞとねばる。そのねばり強さは、英吉利の植民地政策と同じで、海千山千
の腕がある。だが事變當時上海などには物資の缺乏し、マーケットには全く食べものが無くな

つた。暴動はいつ起らないとも限らない。物資を運ぶ列車の爆撃、それが支那の最も恐れてゐるものではあるまいかといふ風に見られた。それと上海の戦塵の中で感じたことは日本が宣傳通信網に今少し力を入れなければ嘘だといふことであつた。上海で愛宕山のニュース放送などを聞いてゐると、實に物たらないし、をかしたことが澤山あつた。日本が「王道の戦」のために自衛手段に出たものであることを、支那のインテリ級によく教へてやるのが大切ぢやないかと思ふ。とに角支那はかういつた國だから、日本が徹底的にやつつけたと思つても、相手の支那は案外けろりとしてゐるだけで徹底的なものだとは考へない。長期決戦を叫んでゐるが、支那人は年數さへ長くかゝれば最後の勝利はこつちのものだと考へてゐる。前にも言つた、ねばりの強いことは無類だ。阿片戦争では英國に負けたが、常時英國にとられた文の者はみなとり返してしまひ、現在残つてゐるのは香港一つだけぢやないかといふやうなことを自慢し云つてゐる。支那西南の實權は蒋介石の國民政府が握つてゐる形だが、この蒋介石が時折りお土産を抱へて門を叩く、大物が支那にゐることを忘れてはならない。それは浙江財閥の名残りである。浙江財閥から見れば蒋介石は一時赤ん坊にもひとしいものであると見られてゐたといつても過言ではない。

後藤朝太郎先生著作目録

一、翰墨行脚	昭六、十一、三〇	三、五〇	一六、硯及筆墨紙研究	昭五、九、五	二、〇〇
二、支那遊記	昭三、十二、三	三、五〇	一七、硯之葉	大十、六、三〇	一、〇〇
三、支那及滿洲旅行案内	昭七、五、三	四、五〇	一八、支那旅行通	昭五、三、五	〇、七〇
四、支那文化の研究	大十四、六、六	五、五〇	一九、支那料理通	昭四、七、三六	〇、七〇
五、支那趣味の話	大十三、九、一	三、〇〇	二〇、中華民國地圖	昭四、三、五	一、〇〇
六、面白い支那風俗	大十三、八、一	二、〇〇	二一、支那今日の社會と文化	昭三、六、二〇	一、〇〇
七、支那風俗の話	昭三、九、二	二、八〇	二二、支那勞農階級の生活	昭五、三、二〇	〇、三五
八、支那文化の解剖	大十、四、五	三、五〇	二三、翰墨談(絶)	昭四、五、二〇	四、〇〇
九、お隣の支那	昭三、九、二〇	一、八〇	二四、長生秘術(絶)	昭四、三、三	三、五〇
一〇、長城の彼方(絶)	大十一、五、九	〇、八〇	二五、支那の山水	昭八、三、二〇	二、八〇
一一、支那料理の前に	大十一、五、五	一、八〇	二六、哲人支那	昭五、十一、一	一、五〇
一二、支那の社會相(絶)	大十五、十一、二〇	五、〇〇	二七、支那民情	昭六、十一、五	〇、三〇
一三、支那民情を語る	昭五、六、二〇	四、五〇	二八、支那行脚記(絶)	昭三、十一、一	二、三〇
一四、支那風景と庭園	昭三、三、五	二、〇〇	二九、支那風俗趣味(絶)	昭五、七、五	二、〇〇
一五、文字の史的的研究	昭五、六、二〇	二、〇〇	三〇、支那社會民情(絶)	昭五、十一、五	二、〇〇

三、阿片室(絶)	昭三、二、五	二・五
三、青龍刀(絶)	昭三、三、五	二・三
三、眠れる獅子(絶)	昭四、五、五	二・三
三、日本より支那へ	大三、十、三〇	〇・五
三、支那の田舎めぐり	大四、八、六	〇・五
三、歡樂の支那	大四、三、二四	〇・五
三、不老長生	昭三、六、七	〇・五
三、長久の支那	昭三、一、四	〇・五
三、老朋友	昭三、三、七	〇・五
四、文字の研究(絶)	明四、二、〇	四・五
四、文字の沿革(建築篇)	明四、二、	二・〇
四、文字の起源(絶)	大五、五、九	二・〇
四、文字の沿革(絶)	大五、五、九	四・〇
四、支那國民性	昭三、八、〇	一・〇
四、教壇上の漢字(絶)	明四、七、一	一・三
四、文字の教へ方	大七、三、三	一・五
四、文字の活用	明四、九、五	〇・八
四、漢字音の系統	明四、六、三	一・三
四、明治の漢文(絶)	明四、一、〇	一・五
五、言語學(上、下)	明元、七、八	一・〇
五、現代支那語學(絶)	明四、二、八	〇・五
五、線音双引漢和大辭典	大三、五、二	二・七
五、標準字典	昭三、二、〇	二・三
五、自修辭典	昭三、二、〇	二・三
五、文字學概説(國語科學)	昭八、十、二	非賣
五、漢字の教授法	明四、七、二〇	〇・二
五、漢字の生ひ立ち(テキスト)	昭五、三、二〇	非賣
五、滿那の全局	昭八、十、一	非賣
五、支那讀本	昭八、三、五	一・三
六、問題の支那	昭八、七、五	一・三
六、淮南子(國譯漢文大成)	大七、四、二	非賣
六、支那の體臭	昭八、九、三	一・五
六、滿支風景庭園鑒	昭九、三、七	八・〇

四、支那の庭園	昭九、七、〇	一・五
四、文字の研究	昭七、一、六	八・五
四、支那風土記	昭七、二、三	二・五
四、支那家庭論語	昭七、十、五	一・三
四、五十年後の太平洋	昭三、一、二〇	一・六
四、初等漢字の教しへ方	昭三、五、五	二・〇
四、日支親善工作	昭三、一、二	〇・三
四、支那民俗の展望	昭三、五、八	三・〇
四、不祥事と日支親善への途	昭三、九、三	非賣
四、支那秘境を巡りて	昭三、三、四	非賣
四、文字行脚	昭三、十、三〇	三・八
七、最近の中華民国を語る	昭三、一、	非賣
六、改訂漢字音の系統	昭三、二、三	二・五
六、文房至寶	昭三、六、一	三・五
六、土匪村行脚	昭三、七、一	二・八
六、支那の男と女	昭三、九、六	一・三
六、上海戦と支那國民性	昭三、九、五	〇・二
六、支那の山寺	昭三、三、五	二・〇
六、不老長生の秘訣	昭三、三、二〇	一・三
六、隣邦支那	昭三、七、八	一・三
六、茶道支那行脚	昭三、三、一	一・五
六、最新支那旅行案内	昭三、三、一	一・五
六、支那を知れ	昭三、六、三	一・三
六、大支那の理解	昭三、九、六	一・八

大支那の理解

昭和三十三年九月十日印刷
昭和三十三年九月十六日發行



大支那の理解

定價 一圓六十錢

外地定價 一圓七十六錢

著者

後藤朝太郎

發行者

株式會社高陽書院

代表者 今泉 調夫

印刷者

東京市神田區一ツ橋二ノ三
綾部喜久二

印刷所

東京市神田區小川町一ノ一
宮本印刷所

發行所

株式會社 高陽書院

東京市神田區一ツ橋二ノ三
電話九段二一四五番
振替東京九〇〇三番

大取次

東京

林平書店・東京堂・栗田書店

大阪

大阪寶文館・柳原書店

高陽書院優良圖書

高須虎六著	二宮尊徳の思想と行績	送料價 一・一六〇
奧谷松治著	二宮尊徳と報徳社運動	送料價 一・一五〇
ウイル・ジ エディ原著 泰一 郎 譯補	愛犬訓育讀本	送料價 二・一六〇
本莊可宗著	戦争と思想變革	送料價 一・一五〇
蠟山政道著	現代社會思想講話	送料價 一・一六〇
蠟山政道著	日本政治動向論	送料價 三・一八〇
丸岡秀子著	日本農村婦人問題	送料價 一・一三〇
高橋次郎共著 千原啓鷹共著	正統派スキ―術	送料價 一・一五〇
小原龜太郎著	商品の鑑定を語る	送料價 一・一三〇
松岡文翁著	大釣のこつ	送料價 一・一三〇
北洲學人著	圍碁哲學	送料價 一・一五〇
大倉金之助著	公債と勸業債券	送料價 一・一三〇

高陽書院發行

高陽書院優良圖書

太田哲三著	會計學概論	送料價 三・二〇〇
太田哲三著	財務諸表準則解説	送料價 二・一八〇
太田哲三著	財産評價準則解説	送料價 二・一四〇
太田哲三著	訂改商業簿記	送料價 二・一〇〇
太田哲三著	會計學研究	送料價 三・一五〇
太田哲三著	會計	送料價 一・一六〇
岩田哲三共著	インフレーション會計	送料價 一・一六〇
小菅敏郎著	貸借對照表分析論	送料價 二・一六〇
西野嘉一郎著	事業財政分析觀察法	送料價 二・一五〇
大槻爲八著	銀・通貨爲替論	送料價 四・一五〇
山邊六郎譯	レーマン原價計算	送料價 二・一三〇
松本信次著	株式取引所論	送料價 三・一五〇
豊崎稔著	經濟統計の作り方と見方	送料價 二・一四〇

高陽書院發行

新銳哲學叢書

12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
統計論理學	社會教育學	精神測定學	群衆社會學	民族生物學	戰爭哲學	歷史哲學	宗教哲學	道德哲學	世界辯證法	西洋哲學史	日本哲學史
高山峻	朝原梅一	內田勇三郎	今井時郎	古屋芳雄	多田督知	齋藤响	谷山惠林	馬場文翁	小島威彦	仲小路彰	齋藤响
24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13
現代思想批判	現代生活批判	危機神學	超現代性美學	最近佛蘭西哲學	最近獨逸哲學	現代音樂論	現代文學論	宣傳技術論	知識哲學	日本國家學	政治哲學
本莊可宗	大塚虎雄	丸川仁夫	清水宣夫	高山峻	小島威彦	久志卓眞	黑田禮二	小山榮三	篁實	藤澤總明 大塚虎雄 丸川仁夫	藤澤總明

(是進代無本見容内)

會人練
書陽高

760
169

